

松本市文化財調査報告 No.201

長野県松本市

*KIRIHARAJŌ-SHI*

# 桐原城址

*KAIGANJI*

# 海岸寺遺跡

—発掘調査報告書—



2010.3

松本市教育委員会

長野県松本市

*KIRIHARAJŌ-SHI*

# 桐原城址

*KAIGANJI*

# 海岸寺遺跡

—発掘調査報告書—

**2010.3**

松本市教育委員会

# 序

桐原城址は松本市入山辺桐原山に所在する室町～戦国時代の山城で、信濃守護小笠原氏関連の山城群のひとつとして、県史跡小笠原氏城跡に指定されています。一方、海岸寺遺跡は入山辺東桐原に所在する遺物散布地です。

このたび、県営畑地帯総合土地改良事業に伴う幹線農道が建設されることになり、そのルートの一部が両遺跡にかかるため、長野県松本地方事務所から委託された松本市が、記録保存のための緊急発掘調査を実施しました。

発掘調査は市教育委員会が、平成19年10月～12月、同20年4月末～21年1月の足かけ3年にわたって行ないました。夏の猛暑、冬の厳寒の中で作業でありましたが、関係者の皆様のご尽力により無事終了することができました。その結果、これまで明らかなでなかった桐原城の防御施設である竪堀、川除普請に伴う石堤や海岸寺遺跡の一端を把握しました。これらは今後地域の歴史解明に大変役立つ資料となると思われます。

しかしながら開発事業に先立って行なわれる発掘調査は、記録保存という遺跡の破壊を前提とする側面があることも事実です。開発により私たちの生活が豊かになる一方で、歴史遺産が失われてしまうことは残念ですが、発掘調査により当時の様子を知り、私たちの郷土松本が歩んできた歴史が一つずつでも解明されることは大変貴重なことと考えます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた参加者の皆様、また調査に際して、多大なご理解とご協力をいただいた長野県松本地方事務所の皆様、そして地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成22年3月

松本市教育委員会 教育長 伊藤 光

# 例 言

- 1 本書は、平成19年11月5日～12月20日、同20年4月28日～同21年1月26日に実施された桐原城址(松本市大字入山辺8796他)と、同20年9月22日～12月2日に実施された海岸寺遺跡(入山辺1944他)の発掘調査の報告書である。
- 2 本調査は長野県松本地方事務所による県営畑地帯総合土地改良事業(山辺地区)幹線農道建設に伴う緊急発掘調査であり、松本地方事務所より松本市が委託を受け、松本市教育委員会が発掘調査・整理作業・報告書刊行を行なった。
- 3 本書の執筆分担は次のとおりである。  
第I章・第II章第2・3節：久保田 剛、第II章第1節：森 義直、第III章第1・2節：内田陽一郎、宮島義和、関沢 聡、同第3節1～3：小山貴広、同4・第IV章：吉井 理、第III章第3節5：原田健司、第V章：関沢 聡
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。  
遺物洗浄・注記：百瀬二三子  
金属製品保存処理：洞澤文江  
遺物実測：(土器)竹内直美、竹平悦子 (金属製品)洞澤文江、吉井 理 (石器)荒井留美子  
トレース：(遺構)内田陽一郎、片山祐介、吉井 理 (遺物)竹内直美、竹平悦子、吉井 理  
版組み：竹平悦子  
図版作成：片山祐介、内田陽一郎、吉井 理  
遺物表作成：片山祐介、小山貴広、原田健司、吉井 理  
写真撮影：(遺構)関沢 聡、石井佑樹、内田陽一郎、宮嶋洋一、宮島義和、吉井 理  
：(遺物)宮嶋洋一、内田陽一郎  
地形測量：中部測量株式会社  
航空写真、写真測量：株式会社地図測量  
編 集：内田陽一郎(桐原城址)、吉井 理(海岸寺遺跡)、久保田 剛
- 5 本書の中で使用した遺構名等の略称は以下のとおりである。  
土坑→土、竪穴状遺構→竪、トレンチ→T、サブトレンチ→ST
- 6 本書の図中で使用した方位は真北を指している。
- 7 本文・遺構図中に表記した遺物の番号は、各遺物一覧表のNo数字に対応し、第III章第3節では実測図が掲載されている場合はその後の( )に図Noを記載した。
- 8 本書では、竪堀の法面・堀端の左・右を、竪堀末端の堀底に立って、上方を見上げた場合の左・右で表記している。
- 9 今回の調査にあたっては、河西克造、桐原 健、笹本正治の各氏からご教示、ご協力をいただいた。また、松本市立博物館から博物館資料の閲覧・写真撮影で協力をいただいている。記して感謝を申し上げる。
- 10 本書の作成にあたっては、発掘調査の担当者であった関沢 聡氏が桐原城址の第III章第1・2節、総括の執筆、図版・写真図版の編集に参加・協力している。
- 11 本調査における出土遺物および測量図・写真等の諸記録は松本市教育委員会が管理し、松本市立考古博物館(〒390-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189)に保管・収蔵されている。

## 目次

序	
例言	
目次・図目次・表目次	
山城用語解説	2
第Ⅰ章 調査経過	3
第1節 調査の経緯	3
第2節 調査体制	6
第Ⅱ章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3節 文書史料	9
第Ⅲ章 桐原城址	15
第1節 調査の方法	15
第2節 遺構	17
1 西区	17
2 中区	19
3 東区	20
第3節 遺物	26
第Ⅳ章 海岸寺遺跡	30
第1節 地形・地質	30
第2節 調査方法	30
第3節 調査地基本土層	30
第4節 遺構	31
第5節 遺物	32
第Ⅴ章 総括	35

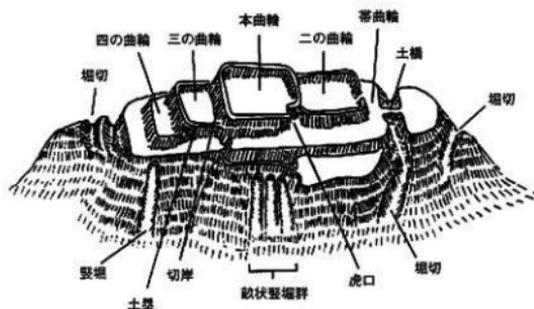
## 表目次

第1表 桐原城址 土器・陶磁器一覧表	28
第2表 桐原城址 瓦一覧表	29
第3表 桐原城址 ガラス製品一覧表	29
第4表 桐原城址 金属製品一覧表	29
第5表 桐原城址 石器一覧表	29
第6表 海岸寺遺跡 遺構一覧表	32
第7表 海岸寺遺跡 土器・陶磁器一覧表	33
第8表 海岸寺遺跡 金属製品一覧表	34
第9表 海岸寺遺跡 石器一覧表	34

## 図目次

第1図 調査地の位置	40
第2図 工事計画路線・調査対象地	41
第3図 桐原城址 縄張り図と調査位置	42
第4図 周辺遺跡	43
第5図 桐原氏館跡	44
第6図 桐原城址 調査前地形測量図(上) 工事計画・調査区配置図(下)	45
第7図 桐原城址 西区 遺構配置図-近・現代-(左) 遺構配置図-堅堀-(右) 付 トレンチ配置	46
第8図 桐原城址 西区 完掘地形測量図(左) 遺構図(右)	47
第9図 桐原城址 西区 土層	48
第10図 桐原城址 西区 堅堀	49
第11図 桐原城址 東区 遺構配置図 付 トレンチ配置	50
第12図 桐原城址 東区 完掘地形測量図	51
第13図 桐原城址 東区 堅堀 付 岩盤露出範囲・岩盤変色範囲 堅堀走行状況	52
第14図 桐原城址 東区 堅堀土層	53
第15図 桐原城址 東区 平垣面 遺構・土層(左) 石炭(右)	54
第16図 桐原城址 東区 石炭 裏法立面図	55
第17図 桐原城縄張り図	56
第18図 桐原城址 中区 トレンチ1	57
第19図 桐原城址 中区 トレンチ2	58
第20図 桐原城址 中区 トレンチ3	59
第21図 桐原城址 中区 トレンチ4	60
第22図 桐原城址 中区 トレンチ5	61
第23図 桐原城址 中区 トレンチ6	62
第24図 桐原城址 陶磁器・ガラス製品・金属製品	63
第25図 海岸寺遺跡 調査区配置	64
第26図 海岸寺遺跡 遺構配置図・基本土層	65
第27図 海岸寺遺跡 遺構図1	66
第28図 海岸寺遺跡 遺構図2	67
第29図 海岸寺遺跡 金属製品・石器	68

用語	解 説
山城	山地の天険を利用して山上に築かれた城。戦国時代に築かれた主な城は山城である。平坦面が狭いため、多くの兵員を置くことができない。
曲輪 (郭)	平坦地、階平地を土塁・堀・切岸などで区画した防衛空間を曲輪と呼び、郭とも書く。近世城郭では、本丸・二の丸・三の丸と呼ばれたが、戦国期の城は、本曲輪(主郭)あるいは一の曲輪・二の曲輪・三の曲輪といった方がいい方がなされていた。
帯曲輪 腰曲輪	上部にある主たる曲輪(本曲輪や二の曲輪など)から一段下がり、周囲を取り巻くような幅の狭い帯状の階平地を帯曲輪と呼び、小規模なものを腰曲輪と呼ぶ。
土 塁	土を盛り上げ、敵の侵入を防いだり、矢・弾丸よけにした防衛施設。基本的には、空堀を掘った時の土が土塁に用いられた。
空堀 水堀	城の周囲には堀が掘られている。山城に見られるように水が入っていない堀を空堀、水を流しているものを水堀(濠)という。また、堀の断面形状によりV字型の「薬研堀」、コの字型の「箱堀」などに分類される。
堀 切	堀の一種で、曲輪に縦く尾根の稜線を横に切断し、敵の侵入を防ぐ溝。
竪堀 横堀	山城の斜面に掘られた堀のうち、等高線に対して直角に掘られたものを竪堀、等高線に対して平行に掘られたものを横堀という。竪堀には軌状に連続するものもある。
切 岸	曲輪の周りを堀の斜面を、より急峻に削って敵の侵入を防いだ防衛施設。戦国期の山城のなかには、空堀や土塁がなく、切岸のみのものもある。
虎 口	城内や曲輪への出入り口の区画を指す言葉。虎口は、敵の攻撃が最も集中する場所であるとともに、味方にとっては、反撃のため城外へ出撃する際の出口でもあった。したがって、防衛を固めるべき最重要な場所として城門が設けられ、折形や馬出が築かれるなど、様々な工夫が行われた。
石 垣	石を積み上げて城壁としたもの。戦国時代の城では、石垣の使用は部分的かつ小規模なもので、むしろ石積に近いものであった。織田信長や豊臣秀吉の時代に築かれた機軸系城郭では、石垣が多用されている。石の積み方によって「野面積み」「打ち込みハギ」「切り込みハギ」などがある。
居 館	中世の鎌倉時代以降、領主が政治と日常生活の拠点とした場所・建物を指す。一辺が100メートル前後の方形の館(居館)であった。
砦	一般的には、城よりも小規模な防衛施設を意味する。城との明確な区分はないが、城は恒常的な施設であるのに対し、砦は臨時的な感覚。同じような施設として烽火(煙)台がある。



〔探訪 信州の古城 一城跡と古戦場を歩く―〕 郷土出版社 2007 部分掲載

#### 山城用語解説

# 第 I 章 調査経過

## 第 1 節 調査の経緯

長野県松本地方事務所（以下、「県」という。）は、平成15年着工事業として、松本市入山辺から里山辺にかけての山間地に、県営畑地帯総合土地改良事業の一環で幹線農道を建設することを計画した。この計画路線には、中入城址、寺所遺跡、海岸寺遺跡、上金井遺跡が存在し、また桐原城址、東桐原遺跡、西桐原遺跡、天神海道遺跡が近接していた。この内、西桐原～東桐原区間の一部に当たる桐原城址は当時の市遺跡地図では範囲外であったが、宮坂武男氏作成の桐原城縄張り図によれば計画路線に近接して空堀が記されていたため、現地確認を実施して調査の可否を判断する必要が生じた。そこで、松本市教育委員会（以下、「市教委」という。）は、県の担当である農地整備課基盤整備係と長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下、「県教委」という。）ほかの関係部署を交え、平成14年度以降、これらの遺跡の保護協議を行ってきた。

### 1 桐原城址

桐原城址は松本市入山辺に所在する室町～戦国時代の山城として知られ、信濃守護小笠原氏関連の山城群（林大城、林小城、埴原城、山家城、桐原城）の一つとして、県史跡（小笠原氏城跡）に指定されている。

平成14年6月5日に現地協議を行なった際の踏査の結果、県史跡の範囲には含まれないが、遺構が計画事業により破壊されてしまうため、路線を変更する協議が必要であることを確認した。同16年12月には、県教委との協議で桐原城址に関わる遺構が存在する可能性は非常に高いものの、人家・神社・墓地等の立地条件から路線変更は極めて困難な状況にあると判断された。

平成17年11月17日に実施した県、県教委、市耕地林務課、市教委の4者協議において、県から農道全線が21年度完成予定とする事業計画が示された。そこで、農道建設箇所について試掘調査・発掘調査を実施することとなり、市教委は調査期間を延べで1年間は確保したいと要望した。同18年11月29日の4者協議で、市教委は19年秋以降に桐原城址の発掘調査に着手するため、用地内の葡萄棚移設・立木補償等の事前調整を県に要望した。

前回の保護協議を受けて、平成19年1月5日に城郭研究者の長野県埋蔵文化財センターの河西克造氏を招いて、市教委が把握していた桐原城址の遺構の現地確認を行なった。その結果、農道計画地内の2本の堅堀と人為的可能性がある平坦な地形、海岸寺沢右岸にある石堤を改めて確認し、これら遺構の発掘調査方法について、以下の指導を受けた。

- ① 事業地は、桐原城の前面部の裾に当たり、正面入口に関わる遺構の存在が予想される重要な地区であり、保護方法の見直しが望ましいこと。
- ② 最初に調査前の現況地形を等高線25cm間隔の平面測量図を作成すること。
- ③ 測量図と目視観察から予想される遺構を中心にトレンチ調査を実施すること。
- ④ 発掘調査に際しては、土木工事や現場安全管理の専門的な技術・知識が求められることが、指摘された。

平成19年2月14日の4者協議では、桐原城址の重要性から事業計画の変更を含めて協議したが、最終的に発掘調査による記録保存を実施することとなった。同年5月以降、県教委との発掘調査方針及び方法等についての現地協議で、用地が狭長な急斜面という地形的制約から、調査地の全面発掘は困難であり、遺構に該当する箇所周辺の発掘調査を実施することとした。19年度は立木伐採、工事区間内の詳細な地形測量を行な

うこと、事業対象地中央部（中区）のトレンチ調査を実施し、遺構が確認された場合は全面調査を検討し、無い場合には20年度に東西の堅堀、石堤等を調査することとした。調査区選定と発掘手順については、建設機械等による用地外への伐採木、排土の搬出が困難なため、遺構が無い場合に排土処理場所とすることも念頭に置いて、用地外の人為的と思われる平坦地形に接する中区の発掘調査を先行することとした。

発掘調査は、県から松本市が委託を受け、市教委が行なうこととし、平成19年11月5日から地形測量を開始、並行して中区のトレンチ調査を実施した。平成20年2月8日の4者協議では、トレンチ調査を実施した中区について遺構が確認されなかったため、次年度の発掘調査は不要と判断した。これにより、平成20年度は堅堀部分と石堤を発掘調査し、平成21年度に整理作業と報告書刊行を行なうこととした。

## 2 海岸寺遺跡

海岸寺遺跡は松本市入山辺東桐原に所在する遺物散布地として知られ、海岸寺沢の左岸に位置する。旧海岸寺上方の尾根筋から経塚遺物が発見されており、また平安時代中期と伝えられる旧海岸寺の木造千手観音立像がある。前述の幹線農道建設ルートのうち東桐原工区の一部が海岸寺遺跡にかかるため、市教委は県と保護協議を行ない、試掘調査を実施して再度協議することにした。

試掘調査は平成20年2月5・6日に事業地内に3本のトレンチを設定して行なった。その結果、平安時代の土器を包含する土層を確認することができた。試掘結果に基づき、県と市教委は協議を行なったが、建設ルートの変更や設計変更が困難であることから発掘調査による記録保存を図ることとした。

## 3 天神上遺跡

今回の海岸寺遺跡の発掘調査実施中に、農道計画路線範囲を踏査している際に、巨石を用いた高さ約3m、長さ約10mに及ぶ石垣を発見し、天神上（てんじんうえ）遺跡として、新規登録した。石垣は、山腹の等高線に沿って5段築かれていることが確認でき、このうちの2段が路線内にかかっていた。石垣の間は人為的と思われる平坦な地形であったため、市教委では県にその事実を報告し、石垣の状態と遺跡の性格を明らかにするのに必要な試掘を計画路線内で行なった。

## 4 中入城址

中入城址は松本市入山辺に所在する室町～戦国時代の山城で、桐原城址と同様、県史跡（小笠原氏城跡）に指定されている。県は、県営中山間地総合整備事業「山辺地区」の一環で上手町東の農道改良を実施することを計画し、この一部が中入城址にかかっていた。平成14年6月5日に現地で実施した中入城址の保護協議で、遺構破壊の恐れのない南側への路線変更を要望した。

平成20年1月7日に現地で県、市耕地地務課と協議を行なった結果、事業地は中入城址に該当するものの工事が既存農道の改良工事で山城に伴う遺構が破壊される恐れが少ないことから、平成20年度に工事立会で対応することとした。

## 5 文書記録

平成19年度

8月27日 「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書（桐原城址）」（19松地農整第112号）

8月27日 「桐原城址に関わる保護意見書」（J630-0827-0001）

9月19日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」（19教文第18-87号）

9月20日 「委託契約書」

業務：発掘調査

期間：平成19年9月20日～平成20年2月29日

- 11月5日 桐原城址（中区）発掘調査（～12月20日）  
2月8日 「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書（中入城址）」（19松地農整第167-1号）  
2月8日 「契約の変更について（通知）」（19松地農整126号）  
2月20日 「変更委託契約書」  
2月29日 「発掘完了報告書」（J631-0229-0001）  
2月29日 「完了検査結果通知書」（19松地農整第126号）  
3月4日 「中入城址に関わる保護意見書」（J630-0304-0001）  
3月7日 「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」（19教文第18-252号）

平成20年度

4月22日 「委託契約書」

業務：発掘調査

期間：平成20年4月22日～平成21年3月10日

- 4月28日 桐原城址発掘調査（～21年1月26日）  
9月22日 海岸寺遺跡発掘調査（～12月2日）  
12月2日 「発掘調査終了報告書の提出（海岸寺遺跡）」（J631-1202-0002）  
12月2日 「埋蔵文化財発見届及び埋蔵文化財保管証の提出（海岸寺遺跡）」（J631-1202-0003）  
12月12日 「海岸寺遺跡埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）」（20教文第26-101号）  
1月26日 「発掘調査終了報告書の提出（桐原城址）」（J631-0126-0003）  
1月26日 「埋蔵文化財発見届及び埋蔵文化財保管証の提出（桐原城址）」（J631-0126-0004）  
2月4日 「契約の変更について（通知）」（20松地農整第20号）  
2月13日 「桐原城址埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属について（通知）」（20教文第26-132号）  
2月20日 「変更委託契約書」  
3月5日 「発掘完了報告書」（J631-0305-0004）  
3月12日 「完了検査結果通知書」（20松地農整第11-22号）

平成21年度

6月29日 「委託契約書」

業務：発掘調査学術報告書作成

期間：平成21年6月29日～平成22年3月19日

- 8月4日 「出土文化財譲与申請書の提出（桐原城址）」（J631-0804-0008）  
9月11日 「出土文化財譲与申請書の提出（海岸寺遺跡）」（J631-0911-0001）  
9月30日 「出土文化財の譲与について（通知）」（21教文第21-7号）  
1月29日 「契約の変更について（通知）」（22松地農整第34-14号）  
2月4日 「変更委託契約書」

## 第2節 調査体制

---

調査団長：伊藤 光（松本市教育長）

平成19年度（発掘調査）

調査担当者：関沢 聡、内田陽一郎

調査員：笹本正治

発掘協力者：荒井留美子、小岩井 洋、福島 勝、藤田昌幸、布野和嘉夫、道浦久美子、村山牧枝、  
本木修次、百瀬二三子、渡辺順子

平成20年度（発掘調査）

調査担当者：（桐原城址）関沢 聡、宮島義和、内田陽一郎、石井佑樹  
（海岸寺遺跡）関沢 聡、吉井 理、石井佑樹

調査員：桐原 健、笹本正治、宮嶋洋一、森 義直

発掘協力者：井口方宏、石川一男、大滝清次、折井完次、加藤朝夫、上條泰宏、小岩井 洋、河野清司、  
小林和山、澤柳 博、塩原甲助、下条ちか子、杉田勲彦、瀬川修一、曾根原 裕、高澤秀明、  
高山知行、竹内直美、茅野信彦、中嶋 健、中村 明、西村一敏、野路重男、福島 勝、  
布野和嘉夫、古屋美江、前沢里江、待井正和、御小柴 淳、道浦久美子、村山牧枝、  
本木修次、八板千佳、渡辺啓之助、渡辺順子

平成21年度（報告書刊行）

報告書作成：久保田 剛、内田陽一郎、吉井 理

調査員：宮嶋洋一、森 義直

整理協力者：荒井留美子、白鳥文彦、竹内直美、竹平悦子、前沢里江、中澤温子、三澤栄子、村山牧枝、  
八板千佳

事務局：松本市教育委員会文化財課

宮島吉秀（課長 ～H20.3）・小穴定利（同 H20.4～）、横山泰基（埋蔵文化財担当係長 ～H20.3）、  
大竹永明（同 H20.4～）、直井雅尚（主査）、関沢 聡（同 ～H21.3）、小山高志（主任 H20.4～）  
櫻井 了（主事 ～H21.3）、柳澤希歩（嘱託）

## 第Ⅱ章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

#### 1 桐原城付近の地形と地質の概観

桐原城は松本市街地に接する東部山地の先端の尾根にある。この尾根は西に開けた山辺の谷の入口付近にあり、追倉沢と海岸寺沢にはさまれ桐原山とも大倉山とも呼ばれている。城の中心部はこの尾根の標高948m付近で山麓との比高は約200mである。城からは西方に広がる松本盆地が一望できる。

この松本盆地や周辺の山地は、新生代第四紀更新世中頃から激しくなった地殻変動により、地塊のブロック化が進み、それぞれ独自の動きをしたため、現在見るような変化に富んだ複雑な地形を形成するに至った。即ち、北部フォッサマグナ地域中央部のうち、

- (1) 上田盆地と松本盆地の間にある山地が筑摩山地で、これを更に2つに区分して、武石峰（1972m）を中心とした山地を武石山地とし、桐原城はその西端にある。今1つは刈谷原峠付近より西側の傾動地形の山地を城山と呼んでいる。
- (2) 筑摩山地の南は山辺構造谷をはさんで鉢伏山地と、それに接して西には中山丘陵がある。
- (3) 武石山地の南東は美ヶ原ブロックである。
- (4) 武石山地の西は約1200mの落差を持って深志盆地ブロックに接し、このブロック地塊は松本構造盆地の形成後、更に盆地の東縁部が陥没的に沈降してできた局部的盆地であり、その一部は沼渚となっているとみられ、深志淵と仮称している。

このように狭い地域内でのブロック毎の変動により形成された地形である。

#### 2 武石山地の地形と地質

桐原城のあるこの山地は、旧松本市周辺部の北・東部を屏風を立てたような急斜面で囲み、南側は薄川が流下する山辺構造谷に向かって伸び、尾根は三角末端面をなしている。このことは、この谷が構造性（断層）であることを示し、更に薄川による右岸の扇状地上に幾筋もの沢による崖錐や崖錐性の小扇状地を載せている。

この薄川扇状地は、薄川の山水率が大きいため歴史時代以降も洪水が絶えず、そのため、浸食堆積が激しく段丘面の数は正確にはわからないが、700m～757m付近に複数あり、山地からの崖錐性堆積物により南に大きく傾斜している。この扇状地のうち、上部面の礫層は更新世末の森口礫層に対比されている。

武石山地ブロックは武石峰（1972m）・袴越山（1752m）・焼山（1907m）等からなり、市街地とはおよそ1200mの比高をなしている。地質は新生代第三紀のグリーンタフと呼ばれる凝灰岩質を含む海底堆積物の内村層に石英閃緑岩や珩岩が貫入して内村層を押し上げ、軟らかい堆積岩は浸食され、後に残った硬い火成岩類が残丘状の地形を形成したとみられる。

なお、武石峠付近は旧河川による陸成の堆積物もみられ、塩川累層と呼ばれている。これは浸食作用で準平原化されるとき、旧河川により運ばれた土砂の堆積によるものとみられる。

この準平原化後もこの地塊は隆起を続け、その結果山腹に幼年期の谷が幾筋もでき、これが桐原城築城時に堅堀に利用されている。

### 3 発掘地点の地形と地質

発掘地点は桐原城の南西山麓にあり、武石山地ブロック西南端の南西に伸びる尾根の端に位置し、東側は海岸寺沢、西側は追倉沢が流れている。この尾根筋の948m付近に桐原城本体があり、尾根筋にあった内村層は浸食され貫入した石英閃緑岩が露出し、その上を風化した閃緑岩質粘土とロームが薄く覆っている。この尾根を含み薄川に臨む尾根の末端は、前述した如く山辺構造谷による断層で切られ三角末端面をなし、その面にも幼年期の谷ができておき、今回発掘した堅堀はこの谷を利用し、更にV字形に掘削している。しかし岩盤は非常に硬い石英閃緑岩のため、掘削は難しく、東区の堅堀では、幼年期の谷の片側（西側）のみを削り何とかV字形にしている。谷の少し曲がっている所は真直ぐにすべく削ってはみだが歯が立たず、曲がったままV字形にしてある。

近世以降と推測される海岸寺沢の護岸用の石積み（東区の石堤）を築くため、堅堀を利用して上部から石を落として運んだ痕跡が残っていることから、敵の攻撃に際してもこの様な使い方を想定していたものとみられる。

### 4 まとめ

桐原城では、山腹斜面の幼年期の谷を利用し、堅堀をV字形に掘削したり、繋げたり、延長したとみられるが、岩盤が非常に硬く掘削に困難を極めたものと推定される。

また、調査地中央の750m～757m付近に、755mの等高線に沿って続くテラス状の地形は、今回6本掘削した中区トレンチの観察により、ロームを載せていることが判明した。このことから部分的に残る最上部の段丘面と段丘崖を防御用に利用したものとみられる。

## 第2節 歴史的環境

桐原城址と海岸寺遺跡が所在する入山辺地区は松本市の東端に位置する。西側を除く三方を山に囲まれ、西北に面した溪谷の地で、95%が山林原野である。入山辺の中央を東から西に薄川が流れ、西は里山辺地区に接する。地名は、古代の山家郷に由来している。

入山辺地区は、平地が少ない谷間のため、他の地区に比べて大きな遺跡は無いものの、諏訪・小県地方との交通路に当たるため、古くから人々の往来があったことを示す小さな遺跡が、点々と谷間に連続している。山辺谷に端を発する薄川の流れに沿い、入山辺地区から里山辺地区に分布する遺跡について、歴史的環境を概観する（第4図）。なお、煩雑を避けるため、遺跡名はゴシック体で表示し、「遺跡」は省略して記載する。

### 縄文時代

薄川上流の入山辺地区から辿ると、小仏、厩所、一ノ海山の神、一ノ海、石柱、駒越、中入、寺所、天神上、東桐原、西桐原、入山辺南方、横倉と分布するほとんどの遺跡で縄文土器や石器等の遺物が確認されているが、入山辺南方以外に発掘例はない。里山辺地区に入ると、石上、里山辺鎌田、薄町、針塚、上金井、上金井矢崎、堀の内、林山腰、御符、林、惣社がある。このうち、薄川右岸の石上、里山辺鎌田、薄町、針塚と左岸の林山腰で前期末から中期初頭の住居址が発見され、後者では、後期前葉の柄鏡形敷石住居が調査された。薄川河岸の山麓緩斜面から扇状地扇尖部に、この時代の遺跡は分布しているが、中期中葉から後葉にかけての遺跡はほとんどない。

### 弥生時代

里山辺地区に堀の内、針塚、里山辺鎌田、惣社地区に宮北がある。薄川右岸の河岸段丘上にある針塚で

は、昭和57年の調査で前期末の再葬墓群が発見され、堀の内、里山辺鎌田からは後期の集落が見つかった。さらに薄川の下流に目を向けると、中期から後期にかけての大集落である黒町がある。

#### 古墳時代

薄川右岸では、弥生時代後期から継続する堀の内で前・中・後各期の住居址と前期の方形周溝墓1基、里山辺鎌田では中期の集落が、さらに西側では下原、里山辺から惣社にかけての宮北で後期の住居址が確認されている。左岸では千鹿頭北で前期・後期の集落が発見され、市道建設に伴う平成19年調査の小松下では後期の住居址を発見した。

古墳は、薄川の河岸段丘上と扇状地両端の山麓部に分布している。前者では右岸の薄町から荒町にかけて積石塚古墳群が知られ、中期の針塚、後期の大塚、古宮がある。針塚では竪穴式石室から船載鏡の内行八花文鏡、鉄斧・鉄鏃等が出土している。石上では周溝が検出されているが、積石塚古墳であるかは不明である。山麓部では、里山辺地区の藤井沢沿いに里山辺丸山、山田入、藤井1～3号、入山辺地区の追倉沢沿いに人穴1・2号がある。このほか実態が明らかではない入山辺1・2号がある。左岸には南方、巾上などの後期古墳があり、南方では横穴式石室から金銅装の圭頭太刀、銅柄・承盤、鉄製壺鍔などが出土した。山麓部には御符がある。

#### 奈良・平安時代

薄川の扇状地上に広範囲に遺跡が分布している。左岸には、小松下、林、林山腰、千鹿頭北、神田があり、集落を確認している。右岸には、上流域から東桐原、西桐原、石上、薄町、藤井山田、藤井、堀の内、兎川寺、針塚、新井、下原、荒町、北小松がある。このうち、石上、薄町、堀の内、兎川寺、針塚、新井、下原の調査で9世紀代、10世紀末から11世紀の集落が発見されている。下流域の黒町や宮北でも集落を調査確認している。

#### 中世以降

薄川右岸に上金井矢崎、追倉、天神海道、海岸寺経塚があり、左岸では林山腰、御符、大嵩崎、わび沢がある。これらの遺跡は山城の麓や周辺に存在しているが、発掘例が非常に少ない。林山腰では平成14年の2次調査で礎石建物が発見されているが、林城に伴う館跡なのかは特定できなかった。これ以外では、堀の内、石上、針塚で火葬墓、薄町で土坑が確認され、青磁や白磁などの遺物も得られている。入山辺南方では平安末から中世にかけての住居址が発見され、また、宮北では平成21年の6次調査において中世と思われる竪穴状遺構が検出されたが、該期の集落は明らかになっていない。

本節で取り上げた山辺の城館址は桐原城のほか、林城（大城・小城）、水番城、霜降城、中入城、宮原城である。三島正之氏は『中世城郭研究』第2号（1988）で山辺谷山城群について述べられた。その後、三島氏、福原圭一氏による縄張り図が『松本市史 第2巻歴史編Ⅰ』（1996）に掲載されている。また、宮坂武男氏は氏の著書『図解 山城探訪 松塩筑資料編』（1998）、『図解 山城探訪 第5集 改定松塩筑資料編』でそれぞれの縄張り図を公開している。発掘による詳細な調査は行われていないが、各氏による縄張り研究がなされている。

### 第3節 文書史料

桐原城に関連する史料について、年代順に提示した。原本は縦書きだが、ここでは便宜上横書きとし、該当部分はゴシック体で表記している。また、古体・異体・略体文字については正字の現代表記とし、変体仮名も現代仮名遣いとす。略す場合には（中略）、（以下略）と表記した。元号（西暦）を補った。

## 1 桐原城

桐原城については、信虎の代からの武田家臣である駒井高白斎が著した『高白斎記』に桐原城落城時の様子が書かれており、享保9（1724）年12月松本藩主水野忠恒の命によって家臣鈴木重武・三井弘篤が編纂した『信府統記』には桐原城の立地や規模が記されている。

【高白斎記】 天文19(1550)年（『信濃史料』第11巻468頁）

七月小、朔日癸巳、三日乙未、御出馬、若神子ニ御着、十日屋形様村井へ御着城、十三日乙巳、孫五郎未刻始テ出陣、酉刻駒井へ着、十五日丁未、御備場へスクニ参ル、酉ノ刻イヌイノ城ヲ攻敗リ勝鬨御執行、戌刻村井ノ城へ被納御馬候、子ノ刻大城・深志・岡田・桐原・山家五ヶ所ノ城自落、鳥立・浅間降参、仁科道外出仕、十七日八月節、十九日辛亥、深志ノ城酉ノ刻高白欽立、向戌亥歟五具、屋形様深志へ御出、廿三日惣普請、

【信府統記】第18 松本領古城記目録（『新編信濃史料叢書』第6巻373頁）

一桐原山ノ古城地桐原村ヨリ寅ノ方五町二十一間、

本城ノ平東西十六間、南北十五間、桐原大内藏真智寛正元庚辰年此城ヲ築ケリ、同市正真実、同藏人真真、同織部真基、此時天文二十二癸丑年五月落城、武田家ノタメニ没ヒタリ、其跡ヲ遠山長左衛門ト云フ人ニ晴信ヨリ關リテ領セリト云フ説アリ、此制原ト云フ所、昔ハ牧アリテ、駒出タリ、是レ大藏山ノ内桐野ト云フ所ナリ、今ハ其場ヲ馬久保ト云フ、当国名所ノ内ニテ古歌モ多シ、名所歌寄ニ載ル、

此城ノ東ニ霧降ノ城トテ取出ノ跡アリ、谷崖ヲ隔テリ、中ニ堀切モアリ、

## 2 桐原氏

武田信玄が小笠原長時を攻め破った際、桐原氏のとった行動が、小笠原家臣の二木斎翁が著した『二木家記』に記されている。なお、笠原大成附録『増補二木家記』に同様の記述があり、若干表現が異なるため、参考として併記した。

【二木家記】（『信濃史料』第11巻469頁）

一某二十歳の時、四月末に晴信公御働、村井に陣を取被申候、長時公も御出陣にて合戦被成候、其日の軍、村井と林の間に敵切崩し候得ハ、味方も又崩れ申候、其後互に旗本を以て、追つ返しつ入乱合戦御座候、其軍に草間肥前・泉の石見討死仕候、此泉の石見は、長棟様御代より度々の軍仕候侍、精兵強弓の大團の者にて御座候、土射すと皆人申候、勝負の矢ハ不及申、鳥を射申にはつれると云事なし、土を射不申候とて、皆加縁に申候、本ハ須澤清左衛門と申候、泉の小四郎末にて候とそ、泉の石見とハ長棟様御意にて名乗申候、加縁の者の討死仕候に付て、林の弱りに罷成候、其外御味方多く討れ申候ニ付、長時公林の城に被成御引籠候、其時長時公を背き、晴信公の方へなる衆、山邊・洗馬の三村入道・赤澤・深志の坂西・鳥立殿・西牧、各長時公の内にて五千貫・三千貫取候侍衆なり、御味方の大身衆ハ、犬甘殿・平瀬殿・刈屋原・麻績、其外御旗本の衆計にて候、長時公御内、能者ハ討死仕、家老の者皆逆心仕候得は、難叶て、林の城を御あけ可被成候へとも、何も道ふさかり候ニ付、十方無御座候処に、桐原御味方を申候、坂西と申深志の城主ハ、桐原が為にハ伯父にて御座候、桐原に申候ハ、長時の方人申さんより、長時公を討奉り、晴信への忠節に仕候へとも、桐原少も同心不仕、つよく御味方を申、長時公へ申上るは、何も御内の家老・譜代の者御敵と罷成、我等伯父の坂西迄逆心故、結句拙者にも逆意仕候へのよし異見仕候間、少もはやくしほたへ御退被成、村上を御頼御本意被成候得と申候て、桐原妻子を長時公への人質に出し、己か居城へ引取申、夫より御

供申、村上へ長時公御退被成候事、村上殿如在なく被存、頓て長時公を林へ御本意させ可申と被申候て、清野と申侍に被仰付、御馳走被申候、

【増補二本家記】（『信濃史料叢書』第8巻74頁）

一某二十歳の時、天文十八年己酉四月末に、晴信公御働、村井に御陣取被成候、長時公も御出陣にて合戦有之候、其日の軍村井と林の間にて敵を切崩し、味方も又崩され、其後互に旗本を以て追つ返しつ入乱合戦御座候、其軍に草間肥前・和泉石見討死仕候、此和泉石見ハ、長棟公御代より度々手柄仕候侍、精兵強弓大剛の者にて御座候、其頃何も土石射と申候、勝負の矢は不及申、鳥を射申に外る、と云事なし、夫故土不射と申候、初ハ須澤清左衛門と申、是も和泉小次郎か子孫にて候とて、和泉石見とハ長時公御意にて名乗申候、か様の者討死仕に付て、林の弱りに罷成候、其外御味方多く討レ申候故、長時公林の城へ御引籠候、其刻長時公を背、晴信公へ降参の衆、赤沢・西牧・麻績・青柳・塔ノ原・瀬黒・村井・山辺・洗馬の三村・島立・坂西の太郎、何も長時公御内にて、五百貫千貫被下候大身の侍也、相残り長時公の御味方申候、大身なる者ハ犬甘・平瀬・かりや原、其外御旗本衆はかり也、能者は数多討死仕り、家老の者大勢逆心仕候へハ、難計候て、林の城を御あげ可被成と思召候へ共、追奪り、因方無御座候処に、桐原ハ二心なく御味方申上候、其子細ハ深志の城主坂西太郎は桐原か伯父也、坂西方より桐原へ申越候ハ、長時公の方人申さんより、長時公を奉討、晴信公への忠節に仕候へと申越す、桐原少も同心不仕、強く御味方を仕、長時公へ申上るハ、御内の家老御譜代の者共何も怨敵と罷成、刺某伯父坂西逆心故、某にも逆意仕候へのよし異見仕候間、少もはやくしほたへ御退被成、村上義清を御頼、御本意被成候へと申上、桐原妻子を長時公へ人質に出し、主か居城へ引移し申、夫より御供仕、村上へ御退被成候、村上義清無如在被存、頓て林へ御本意させ可申との事にて、清野と申侍に被仰付、御馳走被申候、

3 桐原（地名、人名）

桐原の地名や人名は、鎌倉時代末期に成立した『吾妻鏡』、江戸時代前期の『武家事紀』等に載っている。このほか、諏訪大社関連の文書にも花会や御射山祭の頭役等の記載がある。

【吾妻鏡】6 文治2（1186）年（『信濃史料』第3巻380頁）

三月十二日、庚寅、○中略、又関東御知行国々内乃貴未済庄々注文被下之、今日到来、召下家司等可加催促給之由云々、

注進 三箇国庄々事下給・信濃・越後等国々注文

合

下総国○庄名ヲ略ス、

信濃国（中略）

相（桐イ）原庄（中略）

右注進如件、

文治二年二月 日

【諏訪御符札之古書】 康正3（1457）年（『信濃史料』第8巻369頁）

康正三年丁丑花会

一桐原、府中、山家為家、御符之札一貫八百文、（以下略）

【諏訪御符札之古書】 寛正4(1463)年(『信濃史料』第8卷460頁)

寛正四年癸未花会

一官頭、桐原、府中、山家和泉守為光、御符之礼一貫八百文、頭役拾貫文、使与五郎、(以下略)

【諏訪御符札之古書】 文明17(1485)年(『信濃史料』第9卷345頁)

文明十七年乙巳

一五月会左頭、須田、信濃守滿信、御符札三貫三百文卅三文、(中略)、

一流鑄馬、符中桐原・神田、小笠原中務源光政、御符一貫三百、桐原次郎三郎有知代初、御符札一貫三百、使二郎五郎、(以下略)

【諏訪大社文書】 永祿9(1566)年(『信濃史料』第12卷643頁)

諏方上宮末社、同祭祀退転之儀、尋搜旧規、興其百座、然ニ社司等所望之意趣者、令帶來所之古文ニ加判形者、為社家之青紙、於後代可守此規則之由、任子請者也、

茲時永祿九丙寅年九月三日

信玄(花押)

一宝殿往古筑魔・安曇兩郡之郷村より七年に一度宛造替之儀、文書歴然候之處、近年者難決、甚自由之至也、向後攀旧例、從彼郷中可相勸、

卷貫七百元 大村之郷 (中略)

是者貴大工請取地也、

拾貫文 桐原南北兩郷

右如此可相償者也、

【御頭役請執帳】 元龜元(1570)年(『信濃史料』第13卷378頁)

午七月廿五日御頭

廿五日

御頭前二兩少ふる、前々七十貫文、当年者廿五貫文、

酒室 河源勤之、井上之庄

御代官參、栗原大寺殿

卷之御手幣 篠讚勤之、真嶋郡

くもる、

くもる、

式之御手幣 河源勤之、安嶋郷

くもる、晚ニハ天氣よし

三之御手幣 篠讚勤之、桐原郷

甲州より御代官參、今井新左衛門尉殿

【武家事記】 天正5(1577)年(『信濃史料』第14卷208頁)

定

嫡子藤九郎、於三州長篠討死、誠忠節之至、無是非次第也、雖然整傷誠察候、仍遂嫡庶之差別、此度本領当地行領分残而、中河原瑪貳百貫文九百文之所、為隠居分相渡候、其方及没後之刻、孫子之内、礼孝行優秀、可被讓與者也、仍如件、

天正五年七月九日

勝頼

近松齋

定

任老父近松齋訟、桐原郷定納千貫文之所出置候、向後為直參奉公、畢竟、如定法武具等嚴重、急度可被勤軍役、猶依忠節功可令重恩者也、仍如件、

天正五年七月九日

勝頼

山家左馬允殿

【上諏訪造宮帳】 天正6(1578)年(『信濃史料』第14卷272頁)

「天正六年戊寅二月吉日

上諏方御柱 大鳥居 御宝殿 御門屋 廟 末社 造宮帳

清書帳」

(中略)

一上諏方大宮御宝殿信府筑魔・安曇兩郡之郷村より出造宮錢之次第

壹貫七百文 大村之郷(中略)

拾貫文 桐原南・北両郷

合百七貫九百文

取手 春芳軒

小使 拍手之大夫

右之入目春方江御尋可有候、

【小野文書】 天正10(1582)年(『信濃史料』第15卷353頁)

於桐原之内、百貫文所可宛行候、并林之郷可預置候、納所等奇麗可走廻、殊武具・馬具等嗜可豫者也、仍件如、

玄徹(花押)

壬午七月廿七日

小野内記助殿

#### 4 海岸寺

【木造棟札】 元和3(1617)年(『信濃史料』第22卷453頁)

元和三年丁巳三月十八日

桐原山海岸寺本尊千手觀音堂從奥院当所へ安銀奉造立、當場並田地下々田五畝四歩許共寄進に付置者也、施主 桐原興會衛門

【桐原村海岸寺焼失再建願控】 享和元(1801)年(『松本市史』第4卷 旧市町村編Ⅳ 433頁)

奉願口上覚

山家組桐原村海岸寺之儀、去ル寛政十年焼失仕候処、此度村方相談之上建立仕度奉存候、尤壹晝間間口八間ニ、裏行四間ニ仕、仏間之裏式間三尺之間、卷尺五寸之出しニ仕度、尤組物等一切無御座候、則別紙新古墨引仕奉掛 御日ニ候、此段 御許容被成下置候様奉願上候、以上、

海岸寺無住ニ付本寺

山家組兔川寺村

願主 兔川寺

桐原村

組頭 平右衛門印

享和元辛酉年

同 重左衛門印

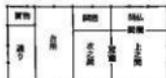
三月

庄屋 作右衛門印

同 条右衛門印

藤井佐左衛門殿

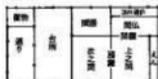
桐原村海岸寺燒失仕候古寺之墨引左之通



右間口八間三尺、裏行四間

此坪三十四坪

海岸寺建立奉願新墨引左之通



右間口八間、裏行四間 但シ仏間之裏

貳間三尺之間

壹尺五寸之出

此坪三十二坪六分貳厘五毛

萱葺立前墨引



右之通海岸寺建立奉願、新古墨引仕差上申處、相連無御座候、以上、

海岸寺無住ニ付本寺

山家組兔川寺村

願主 兔川寺印

桐原村

与頭 平右衛門印

享和元辛酉年

同 重左衛門印

三月

庄屋 作右衛門印

同 条右衛門印

藤井佐左衛門殿

## 第三章 桐原城址

### 第1節 調査の方法

**調査区の設定** (第6図) 本調査は幹線農道建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。計画道路は桐原山(大倉山)の北東から南西方向に傾斜する山麓斜面の末端付近を通ることになっている(第2図)。調査対象地(県有地内)は、西側舗装道路から海岸寺沢までの地形の起伏に富んだ長さ約189m・幅約13mの区間で、面積2573㎡を測る。

調査対象地には事前踏査で東西両側に2本の堅堀が確認されたほか、時期不明の道(道1～6)・石垣・石堤・造成地形などが存在していた。発掘調査は堅堀に加えてこれらの地物も対象とし、3調査区に分けて実施することにした。以下では、各調査区の概要を述べる。

**西区** 調査対象地の西側、堅堀が所在する南西下がりの尾根末端部を西区とした。堅堀がのる山麓斜面を掘削状に削平して造られた道1があり、舗装道路から東へ15m付近の道1上側が堅堀の最下端になっている。この下方には道1と舗装道路に囲まれた2段の平坦面が造成されていた。調査対象地は上段の平坦面に当たるが、現況では道1の下方に堅堀の痕跡は確認できなかったため、道1・平坦面の造成によって堅堀は削平されている可能性も考えられた。そこで、造成面下部の堅堀痕跡の有無について確認するため、現存する堅堀の延長線上に位置する平坦面を中心に調査区を設定した。調査面積は232.64㎡である。

**東区** 調査対象地の東側、道4から海岸寺沢までを東区とした。調査前の踏査で道4から東側には、堅堀がのる南下がりの尾根・道5・土手・平坦面(川裏堤内地)・石堤などが確認されていた。このうち、石堤については地形測量と裏法立面図を作成することとし、構築時期を確認するため平坦面にも調査区を設定した。堅堀はその周辺を含めた尾根全体を調査区に設定した。調査面積は420.48㎡で、内訳は堅堀調査区344.10㎡、平坦面調査区40.93㎡、石堤35.45㎡である。

**中区** 西区と東区の間位置する本区は、事前の踏査では山城関連の遺構は確認されていなかった。ただし、調査対象地よりも下方になるが、幅(奥行き)10m前後・長さ57mにわたる平坦な地形とこれに続く急傾斜面が確認されており、山城の郭や切岸の可能性も考えられた。このため、平坦地形の人為性を確認することと、遺構の有無を確認することを目的として、本区内に6本のトレンチを設定した。実際の調査面積は118.60㎡である。

**調査手順** 調査対象地の両側に山城の堅堀が確認されたため、当初は全面調査を検討した。しかし、対象地は山麓斜面を通る狭長な農道建設予定地であることに加えて、西端の舗装道路が狭く大型車両の通行ができないこと、東端は海岸寺沢があることから、発掘に伴う排土置き場を確保することが難しい状況にあった。また、堅堀が調査対象地の両端にあるため、立木を伐採しても搬出時に遺構を破壊する可能性があり、全面調査は困難であると判断した。

そのため、今回の調査は排土置き場の確保と、伐採木の搬出による堅堀の損傷防止に配慮しながら2年次にわたって実施することにした。

1年次は、調査対象地周辺の地形測量と中区の調査を実施した。調査時点では立木の伐採・搬出ができないため、林間を縫うように6本の遺構確認用のトレンチを設定した。調査の結果、中区には戦国時代を遡る遺構は無いことが確認できたため、この場所を西区・東区の排土置き場とすることにした。

2年次は、西区を先行して調査することとし、調査終了後に東区堅堀のある尾根筋から西区までの間の立木を伐採・搬出することにした。東区は、堅堀の掘り下げで生じる排土置き場を確保するため、石堤と平坦

面調査区を先行して調査し、調査終了後に堅堀のある尾根から海岸寺沢までの立木を伐採・搬出することにした。なお、調査対象地内の伐採については、希少野生動物が調査地周辺に生息していることが判明し、繁殖活動に影響を与えないよう伐採時期を急遽遅らすことになり、東区堅堀の調査開始が遅れてしまう結果となった。

各区の発掘調査期間は以下のとおりである。

中区 平成19年11月5日～平成19年12月20日

西区 平成20年4月28日～平成20年10月15日

東区 平成20年5月15日～平成21年1月26日(石堤：5月15日～7月9日、平坦面調査区5月26日～7月14日、堅堀調査区：9月22日～1月26日)

**発掘調査** 各区共通で、最初に調査区内の灌木伐採、下草刈り、落ち葉の除去を行い、調査前写真を撮影した。その後、調査区内にトレンチを先行して設定し、土層の堆積状況を確認した後に面的な掘り下げを行った。検出された遺構は原則掘り下げて図面・写真等の記録をとったが、塩化ビニール製の管(塩ビ管)・石綿管埋設溝などの現代の構築物は完掘せずに検出状況の平面記録にとどめたものもある。

遺構検出・遺構の掘り下げは人力で行ったが、西区では堅堀検出面の上部に厚さ約50cmの造成土層が確認されたため、小型バックホーを導入して造成土を除去した。

遺構番号は各調査区毎に設定したが、中区については各トレンチ毎に遺構番号を付している。なお、本来ならば「海岸寺沢右岸石堤」とすべき石堤は、1箇所だけの調査であることから遺構番号は付していない。また、堅堀は2本を調査しているが、「西区堅堀」・「東区堅堀」として遺構番号を付していない。これは桐原城址全体の測量調査が今後予定されており、桐原城址全体の中で堅堀の番号を付すことが望ましいと判断したからである。

出土遺物は、原位置が特定できた場合は調査区毎に番号を付して三次元記録をとって取り上げた。

**測量** 発掘調査前に、調査地周辺約6700㎡を対象に地形測量(縮尺1/100・等高線間隔20cm)を業者委託により実施した。また、石堤の裏法立面図(縮尺1/20)を業者委託による写真測量で作成した。

発掘調査では、用地・工事測量で設定された測量用基準杭を使用し、世界測地系平面直角座標・標高の基準点とした。平面図・断面図は原則1/20で作成し、詳細図が必要なものは1/10で作成した。平面図は主に光波測距儀を使って測量しているが、状況に応じて簡易遣り方測量も併用した。

西・東区については、発掘完了後に等高線測量(縮尺1/40・等高線間隔20cm)を業者委託により実施した。

**写真撮影** 遺跡の景観、土層・遺構の状況・遺物の出土状況等は35mm一眼レフカメラ(カラー・白黒フィルム)とデジタルカメラで撮影した。また、西・東区は調査完了時にラジコンヘリコプターによる航空写真撮影を業者委託により行った。

**整理作業** 発掘終了後に写真・図面類の整理を行った。図面類は平面図・土層(断面)図の点検・照合を行い、報告書に掲載するものについてはトレース作業を行った。遺物は洗浄・クリーニングした後、接合作業を行い、遺存度の良好なものの特徴的な遺物について実測・拓本・トレースを行った。

**調査成果** 発掘と整理作業の結果、以下の遺構が確認された。その概要は、巻末の発掘調査報告書抄録に掲載している。

西区 堅堀 1本、土坑 18基、石積 1基、集石 4基

中区 土坑 21基、溝 8本

東区 堅堀 1本、石堤 1本、土坑 1基、石積 1基、炭面 2枚

## 第2節 遺構

### 1 西区(第7～10図)

本区は道1・2と平坦面の造成によって、堅堀がある山麓斜面が改変されていた。現況の堅堀は調査区外となる道1の上端までしか確認できなかったので、造成面下の堅堀痕跡を確認することを調査目的とした。

道1は、西端の舗装道路から南東方向に向かう幅1～1.5mの未舗装の道である。舗装道路から南東30m付近までは山麓斜面と堅堀を掘割状に大きく掘り込んでおり、山側で最高4m、平坦面側で最高2mの比高差を測る。道と両側の切り通し面から、19世紀代の陶磁器(8・30)、近現代のガラス(3)が出土している。

道2は、道1との合流点から北西に延びる幅1～1.5mの未舗装の道である。山側の道際には幅50cm、深さ60cm以上の溝1があり、深さ50cm付近に直径25cmの石綿製導水管が埋設されていた。道2は30m程で山の斜面上で行き止まることから、道2は畑灌漑用の導水管を埋設するために造られた新しい道と推定される。この道の表土中からは19世紀後半以降を主とする陶磁器片(9～14)が出土している。

平坦面は、現存する堅堀の下方に位置し、南西調査区外に1.2mの比高差で一段低い別の平坦面がある。現況は灌木と雑草が繁茂する荒蕪地であったが、土地所有者によると40数年前には畑として利用されていたようである。この平坦面と道1の境には閃緑岩質の地山面を掘り残した高さ80～100cmの土手がある。平坦面の南東は造成に伴う比高差約4mの法面があり、法面の途中に幅約50cmの犬走り状の平坦部が確認された。平坦面からは19世紀以降の磁器(1～4)、瓦(4)、ガラス(4・5)等の出土があり、近現代にわたる遺物が出土している。また、法面から瓦(5～8)が出土している。

以上のことから、道1・平坦面については近世末～近代以降には確実に存在し、現代にいたるまで機能していたものだが、造成時期は特定できなかった。造成後の遺構として平坦面上に石積1・集石1～4・土14・15・17・18がある。

### (1)土層(第9・10図)

本区は北東高～南西低の斜面地形で、土層は基本的に閃緑岩質岩盤層の上に黄褐色～明黄褐色砂質土(T1～3・4層、T2～9・11層、T6～8・11層)があり、褐色土(T2～8層、T6～7層)、表土(腐葉土)の順に堆積している。黄褐色～明黄褐色砂質土は部分的に細分可能であり、各層の厚さは地点により異なる。また、褐色土は調査区南東部で確認できるもので耕作土の可能性がある。

基本土層の堆積時期は遺物が出土していないため不明であるが、土坑は褐色土層を掘り込むものが多い。

### (2)遺構(第7図)

#### ア 土坑(第7・8図)

土坑は18基あり、平坦面南東の造成を受けていない緩斜面上に14基、平坦面上で4基が検出された。

平面形は、直径25～40cmの円または不整形円形を呈する小形の土3～12、直径40cm以上の不整形円形を呈する大形の土13～16がある。小形の土坑は2、3基が近接して分布している。なお、土2・17・18はT6・8の土層観察壁で確認されたもので、平面形状は不明である。

土坑の多くは表土直下で検出され、覆土の色調・土質は表土に似てしまりが無いもの、下層土にブロック状の土を含むものが多い。なお、土14の南西には幅110cmにわたって約8cmの落差をもつ段が隣接する。

土1・5・6・7・9・14で微量の炭化物片、土10で黒色ビニール片(マルチ)が検出されたが、土坑からの遺物出土は無い。土坑の時期は不明であるが、いずれも平坦面造成以降、近現代の農業関連または自然に形成されたものと推定される。

## イ 石積 (第8図)

平坦面の北東端で集石1を除去後に確認できたものを石積1とした。道1と平坦面の間に位置した石積み  
が崩落した残存部と推定される。石積みは現存で幅約2m、高さ約90cmを測り、20~40cm大の自然礫が乱積  
みされていた。石積みに向かって右側で7段、左側で2~3段を確認でき、最下段の石積みは左側に高く傾  
斜している。本社の背後(山側)は礫が多量に混ざる土層があり、本社の裏込めと推定される(集石2)。

なお、道1の上方に現存する堅堀内には、本社と類似する3基の石積みが構築されている(道1から水平  
距離で7・11・16m地点)。これらの構築時期は不明であるが、堅堀の覆土が下方に流出することを防ぐた  
めに造られたものであり、本社も同様な機能をもっていた石積みの可能性がある。

## ウ 集石 (第7・8図)

本地区は閃緑岩質岩盤層から表土まであまり礫を混じえない土層であるが、調査の段階で礫がまとまって  
出土した地点を便宜的に集石として捉えた。集石は4箇所があり、集石1・2は石積1に伴うものと考えら  
れる。

**集石1** 石積1の前面に位置し、表土の除去中に一部の礫は地表に露出していた。石積1の底部から中央や  
や上寄りに石積1を覆うように20~40cm大の礫が260×120cmの範囲に集中していた。これらの礫は前述の石  
積1が崩落したものと推定される。

遺物は礫間から瓦8点・陶器1点が出土している。また、本社に近接して磁器の人形(7)が出土してい  
る。

**集石2** 石積1の裏に140×140cmの範囲に礫が散乱するもので、土層観察から石積1の裏込めと推定され  
る。

**集石3** 平坦面下部の堅堀を確認するために設定した小トレンチの表土直下で検出され、81×24cmの範囲に  
礫が集中していた。削平された堅堀上面または平坦面造成に伴うものだが、一部を調査したのみである。

**集石4** T8掘り下げ時に平坦面の南端付近で検出された。拳大から人頭大の礫10数点が集中していた。

## エ 堅堀 (第10図)

現況では調査対象地内に堅堀が確認できなかったため、道1上方に現存する堅堀の軸線上にあたる平坦面  
部分を主な調査範囲とした。最初に、土層観察用のトレンチを設定し、T6・T8の土層観察から堅堀が平  
坦面の下部に残存していることを確認した。調査は平坦面の造成土を重機で除去した後、人力で堅堀の検  
出・掘り下げを行った。

**形状** 堅堀は平坦面の造成によって、上方にいくに従って大きく削平されており、本来の平面形状はう  
かがえない。堅堀は移植ゴテで削ることが可能な比較的軟質の閃緑岩質岩盤層を掘り込んで構築されてい  
る。

堅堀は断面形がV字状を呈する葉研堀である。法面の傾斜は場所によって異なるが、最下段のT8で左法  
51°と右法45°を測り、左側がより傾斜がきつくなっている。

堀底は上方が道1・石積による破壊で不明な点が多いが、概ね幅20~60cmを測る。堀底のラインはごく緩  
やかに湾曲し、堅堀下半で主軸W-18°-Sを測る。また、調査区最下段(T8)では、堀底に幅60cm、比高  
差50cmの段差が設けられていたが、調査区外にかかるため全容は不明である。

堀底から右法面にかけて岩盤層中の硬質閃緑岩礫が塊状に露出している部分があり、堅堀を掘削する際  
に硬質礫を掘り切れずに残したものと考えられる。また、左法面には傾斜角度が変換するラインが部分的に観  
察できるが、堅堀完成から埋没に至る過程で斜面が崩落してできた痕跡と推定される。

**長さ** 実際に調査した範囲で検出した堅堀は長さ8.2mを測り、南西調査区外に続いている。

**幅・深さ** 道1際は石積1による破壊もあり、その規模を明らかにしえない。本社の土層観察を行った2地

点での堅堀の幅・深さ(堀端-堀底高)は以下の通りである(第10図)。

T8 (E-E')	堀幅：381cm	左堀端-堀底高：193cm	右堀端-堀底高：187cm
F-F'	堀幅：164cm	左堀端-堀底高：65cm	右堀端-堀底高：60cm

**土 層** 堅堀の埋没過程を確認するため、土層観察を2箇所で行った(第10図)。

F-F' 道1から3.4mの地点で、平坦面の造成を大きく受けており、堀底から65cmを確認しただけである。堅堀の覆土は3層(1～3層)を確認した。覆土は褐色～黄褐色砂質土を主体とするが、木根による攪乱が多く判然としにくい。

T8 (E-E') 堅堀が最も良く残っていた地点で、堅堀の覆土は37層(10～46層)に分層される。覆土は褐色～黄褐色砂質土と、角礫・粗砂が主体を占める砂礫層が観察された。46・45層は堀底の段差部分に該当し、角礫と粗砂・砂質土が主体を占める砂礫層である。37～26層は礫をほとんど含まない層厚5～10cmの黄褐色砂質土で、粘性のある層とやや砂質の強い土層が交互に水平堆積している。比較的安定した状況で自然堆積した土層と推定される。23～17層間は砂礫層(23・21・19・17層)と褐色～黄褐色砂質土(22・20・18層)が観察される。これらの層中には幅10～40cmの大形礫が含まれている。これらの礫は堅堀が埋没する過程の堀底や法面付近からまとまって出土しているが、自然堆積か人為的な礫の投棄によるものかは判断できなかった。さらに、15・16・20層の黄褐色～褐色砂質土の間層を挟んで、砂礫層の13層が厚く堆積している。この上に12～10層の黄褐色砂質土があるが、10層より上層は平坦面の造成によって失われている。

以上の土層観察から、大形礫の出土状況にいささか疑問の残る層もあるが、堅堀は概ね雨水による堆積と浸食を繰り返しながら自然埋没していったものと推定される。

**遺 物** 桐原城に伴う遺物は出土していない。平坦面の造成土直下の堅堀覆土から土器1点(26)、漆黒釉の陶器1点(27)が出土しているがいずれも混入品である。

## 2 中区(第18～23図)

西側舗装道路から南東42～51m付近の道1に接して、L字状の石垣が2段構築されている。この石垣周辺から道4までを中区とした。現況では、この石垣から調査地中央付近までの道1下側は楡が植林されている。この植林帯の中にはスプリンクラーの散水栓や番線が張られており、さらに縁辺部にはコ字状にコンクリート製の支柱がほぼ等間隔に倒れており、この場所が以前は葡萄園であったことがわかる。また、L字状石垣から北西側にも木製支柱が散在していること、西区になるが道1の南西法面で葡萄棚支柱を固定するためのワイヤー埋設坑(第7図)が4基あることから、この一帯は現代の果樹栽培、林業によって土地の改変を受けていることが判明した。また、植林帯から道4の間は栗・胡桃等の雑木帯となっている。

金山社社の北側から西側50m付近にかけて、標高754～756m付近を境に地形の傾斜が緩やかになる幅(奥行き)10m前後・長さ57mの平坦地形と、その下方に急傾斜面が事前踏査で確認されている。これらの地形については山城に伴う郭・切岸の可能性も指摘された。本区は平坦地形の上方斜面に位置しているが、この平坦地形の人為性と、戦国時代以前の遺構確認を目的として、等高線に対して直交するトレンチを6箇所に設定した。

### (1)土層

中区は南西に下る斜面上に位置する。T1～3はトレンチの斜面上方で、やや軟質の閃緑岩質岩盤層が確認された。その上に黄褐色～褐色粘質土と表土がのっている。T4～6は岩盤層が確認されず、10cm前後の角礫が比較的多く含まれるにぶい黄褐色～褐色粘質土の上に表土がのっている。

## (2)遺構

### トレンチ1 (第18図)

2段の石垣の北西5m付近に設定した9.2×2.0mのトレンチで、平坦地形の西端付近上方に位置する。溝が3本検出された。いずれも塩ビ管が埋設されており、畑灌漑用の送水管である。遺物は表土とその下層(5層)、溝1の埋土から土器・陶磁器(32~40)、瓦、金属製品が出土している。磁器は19世紀代のものがほとんどだが、黒色土器Aが1点出土している。

### トレンチ2 (第19図)

石垣の南東6m付近に設定した11.6×1.8mのトレンチで、平坦地形の中央よりやや西側の上に位置する。土坑5基、溝2本が検出された。土1は覆土から19世紀代の神酒徳利の口縁破片(41)と珎岩の剥片2点が出土している。土3はコンクリート製支柱の埋設坑である。溝1は塩ビ管が埋設されており、溝2は覆土からガラス製の目薬容器(7)が出土した。表土とその下層から18~19世紀の磁器(42~45)が出土している。

### トレンチ3 (第20図)

平坦面地形の中央付近上方に設定した11.3×2.0mのトレンチである。土坑4基、溝2本が検出された。溝1からは白ビニールを被覆した針金が出土し、溝2では塩ビ管が埋設されていた。土坑は溝1・2と同じ面で検出されている。本トレンチから土器・陶磁器等の遺物は出土していない。

### トレンチ4 (第21図)

トレンチ3の東側8mに設定した10.2×2.0mのトレンチである。土坑8基、溝1本が検出された。土1は調査前から窪んでいたもので覆土は腐葉土のみである。土2からは底面に針金がまとまって出土し、土3・4からはビニールを被覆した針金が出土している。T3・4の遺構から出土したこれらの針金類はいずれも葡萄園に伴う現代の遺物である。溝1はコンクリート製支柱とスプリンクラーの送水管が立ち上がっており、T1溝3-T2溝1-T3溝2と続く畑灌漑用の塩ビ管埋設溝である。本トレンチから土器・陶磁器等の遺物は出土していない。

### トレンチ5 (第22図)

金山神社の背後、平坦地形の東端付近の上方に設定した10.5×2.0mのトレンチである。本トレンチでは遺構・遺物は出土していない。

### トレンチ6 (第23図)

金山神社の東側、平坦地形の東端から南東16m付近に設定した8.4×1.9mのトレンチである。土坑が4基確認された。土1は4層上面、土2・4は2層上面で検出されている。土3は調査前から表面が窪んでおり、風倒木痕の可能性が考えられる。トレンチ西側の1層中で瓦1点が出土している。

## 3 東区 (第11~16図)

道4から海岸寺沢までを東区とした。本区は事前踏査で、南に張り出す尾根筋の東側に堅堀、海岸寺沢右岸に接して石堤が確認されている。石堤の川裏堤内地(平坦面)は北東高-南西低に緩く傾斜し、調査範囲内では1箇所 segments が見られた。道5と堤内地の間には土手が構築されている。現状では尾根斜面は赤松・桐等の山林、土手-石堤間の川裏堤内地は灌木や雑草が繁茂する荒蕪地であった。

調査は堅堀と石堤を主体とし、道4と道5に囲まれた堅堀を含む尾根全体を堅堀調査区、石堤の川裏堤内地に設定した8.2m×3.8mを平坦面調査区とした。石堤は裏表立面図を作成した。

石堤・堅堀の調査に付随して、堅堀調査区から炭面1枚、平坦面調査区から土坑1基・炭面1枚が検出されたため、併せて調査を実施した。なお、堅堀調査区の南西端で、道4の山側の路肩に石積1が確認された。現在の道4に伴うものであり詳細な調査は実施していない。

## (1)土層 (第14・15図)

塹堦がのる尾根は、尾根筋から西側が急斜面になっており、東側は海岸寺沢へ向かい南に下る斜面になっている。尾根西側の急斜面では基盤が閃緑岩質岩盤層で、その上に風化して脆くなった岩盤層 (T2-18層、T1-21層)、にぶい黄褐色砂質土層 (T2-17層、T1-19・20層)、表土 (暗褐色土) が順に堆積している。各層の厚さは地点により異なるが、この層序は基本的に同じである。

尾根上はほとんど堆積が見られず、薄い表土の直下に風化して脆くなった閃緑岩質岩盤層が確認できた。

塹堦の東側斜面では、閃緑岩質岩盤層の上に黄褐色砂質土 (T1-25~22・2層)、表土 (暗褐色土) が順に堆積している。この斜面は道5付近で傾斜が緩く変換するため、T4を設定し土層観察を行った。

T4付近は尾根斜面を切り崩して道5との間に平坦部が造成されている。T4の1~22層は造成後の土層である。そして、この層下では23~28層と33~43層の間に不整合面が観察された。このうち23~28層は道5を挟んで造成されている土手の構築に伴う土層と推定される。また、33~43層は砂質の強いにぶい黄褐色砂質土が縮状に水平堆積していた。調査範囲では基盤の閃緑岩質岩盤層は確認できなかった。なお、調査員の森義直氏から、この不整合面が海岸寺沢による浸食でできた不整合面の可能性が高いとの指摘を得ている。また、海岸寺沢に浸食されたと考えられる面は、T5東壁 (F-F') の5・6層間でも観察されている。

平坦面 (川裏堤内地) の土層については、石堤の項で記載する。

## (2)遺構

### ア 石堤 (第15・16図)

海岸寺沢は桐原山の山裾を北東高-南西低に流れる小河川で、右岸は河川の氾濫により山裾が浸食されている。現在の海岸寺沢は昭和59年に砂防工事が実施され、幅1.5m、深さ1mのコンクリート枠で護岸されている。石堤はこの海岸寺沢右岸に構築されているもので、調査地の北東15m地点を始点として下流側に約140mが現存する。また、そこから主要地方道松本和田線までの区間でも同様の石堤が海岸寺沢の両岸で確認されている。本址は当初「石積遺構」として調査を行ったが、調査の結果、近世に築かれた川除普請の石堤 (堤防) と推定された。県内では本址に類似する遺構として、長野県埋蔵文化財センターが調査した乳川石堤 (大町市) があり、報告書が刊行されている (『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書3-大町市内 その2-』2004 長野県埋蔵文化財センター)。本書ではこの報告書に準拠して、本址の名称に「石堤」を使用することにした。

調査は、石堤付近の地形 (等高線) 測量と、調査地を中心に幅22mの範囲で石堤の裏法立面図を作成した。海岸寺沢に接する表法は、石堤上の樹木伐採と礫の搬出が困難なことから、断ち割りせず現況写真の撮影にとどめた。また、構築時期を確認するため平坦面 (川裏堤内地) のトレンチ調査を行った。

**形状** 調査地内の石堤は、横断面が概ね台形で天端幅1.2~2.1m、敷幅5~6mで、天端と川裏堤内地との比高差2.0~2.6mを測る。

**礫の種類** 石堤を構成する礫は、裏法では20~60cm大の自然礫 (角礫) が主体を占める。石材は閃緑岩・珩岩・安山岩・砂岩・硬質泥岩等があり、閃緑岩・珩岩が主体を占める。いずれも桐原地区周辺で採取可能な石材である。

**裏法** 石堤を覆う落ち葉・腐葉土を除去した段階で、裏法の7箇所を礫をほぼ垂直に積み上げた面 (以下、「石積面」とする) を確認し、石積面 A~G とした。これらはいずれも両側や上端が崩落したり、石堤上に育った樹木の根で大きく攪乱を受けていた。以下、各石積面の概要を述べる。なお、海岸寺沢・石堤ともに北東-南西方向に主軸をもつが、文章の煩雑さを避けるために以下では、上流側を「東」、下流側を「西」

として記載している。

**石積面 A** 調査対象地の西側外に接する石積み。最大幅318cm、高さ153cmを測る。石積みの上端は天端の端部とほぼ一致している。この石積面の手前(川裏側)に石積面 B が構築されている。礫は厚みのある盤状礫と板状礫を水平に積んで横目地が通る部分と、礫を斜めに積んでいる部分が観察される。

**石積面 B** 調査対象地の西端に位置し、最大幅410cm、高さ114cmを測る。石積面 A・C の手前に構築されている。石積み上端は石堤の天端から1.8m 手前に位置し、その上面は5.2×1.5m のテラス状を呈している。西側は隅角部があり、石積面 A 側に幅110cmの石積面が観察された。根石部は平坦面(川裏堤内地)の地表に露出しており、その東側は崩落礫に覆われていたが、最終的に根石部は東側へさらに1.6m 続くことが確認された。東側は隅角部は確認できず、根石ラインの延長線上に石積面 E がある。本址周辺には、石積面の礫よりも明らかに小さな拳大前後の礫が多くあり、石積面の裏込め石と推定される。石積みは礫を斜めに積み上げる谷積の範疇に含まれるものと推定される。

**石積面 C** 石積面 B の東側に位置し、最大幅545cm、高さ179cmを測る。西側下端付近は崩落礫・石積面 B の裏込め石に覆われ、東側下端付近も崩落礫・石積面 E の裏込め礫に覆われている。崩落礫が少ない石積面の中央付近では、根石下端と平坦面の比高差が0.6m あり、その下は石積面 C の土台となる土が露出している。この土が自然堆積か人為的な盛土によるものかは明らかにできなかった。石積みの上端は天端とほぼ一致している。なお、伐採木搬出の際に石積みの一部が崩落したため観察したところ、石積みの内部は表面とほぼ同じ大きさの礫が詰められていた。石積みを構成する礫は他の石積面よりも大きいことが特徴で、石積面は厚みのある盤状礫と板状礫を水平に積み横目地が通る積み方である。

**石積面 D** 石積面 C の東上端の崩落部の続きにあたり、同一の石積面と推定される。最大幅84cm、高さ52cmを測る。

**石積面 E** 石積面 D の手前0.8m に位置し、最大幅183cm、高さ49cmを測る。西側は石積面 C・D の崩落礫に覆われ、東側は木根により崩落している。下側は石積面 G の裏込め石に覆われている。石積み周辺には石積面 B と同様の裏込め石が観察される。石積面は比較的小振りの礫を乱雑に積み上げている。

**石積面 F** 木根を挟んで石積面 E の東側にあり、最大幅218cm、高さ127cmを測る。石堤の天端から2.3m 手前に位置し、石積面 E と同一面と考えられる。下側は根石と推定される礫が平坦面に近い位置で観察された。石積み背後には裏込め石が観察される。石積面は比較的小振りの礫を水平に積んで横目地が通る部分もあるが、石積面 E 同様に礫を乱雑に積み上げている。

なお、石積面 F より以東では石積面は確認されず、本面以東の石堤は、裏法下端で石堤の天端から約3m、40°前後の傾斜を持つが、崩落礫を伴っているのでその詳細は不明である。

**石積面 G** 平坦面調査区の北トレンチで検出されたもので、石積面 E の手前1.4m に位置する。本址は石積みの根石部分で、幅147cmにわたって13個の礫が確認できただけである。根石の背後は土と小礫からなる裏込めが観察された。石積みは石積面 B 同様に礫を斜めに積み上げるもので、谷積の範疇に含まれるものと推定される。

上記の7箇所の石積面は、石積みラインの連続性、裏込め石の有無、石の積み方等から、3段階(時期)にわたって構築されていることが判明した。

**古段階** 石積面 A・C・D からなる。他の石積面よりも大形の礫を使用し、ほぼ垂直に1.8m の高さで礫が積み上げられている。石積み上端が石堤の天端とほぼ一致することから、石堤本体を構築した時期のものと考えられる。堤内の調査は実施しているが、石積面 C の観察結果から内側もほぼ同じ礫が積み上げられている可能性が高い。

**中段階** 石積面 B・E・F からなり、石積面 A・C・D の前面に位置する。東側は不明であるが、石積面 B を西端とする。石積面の裏込めは傘大前後の礫が使用されている。石積面は根石を斜めに積み上げる谷積の範疇になるものである。

**新段階** 石積面 G である。根石部分の一部を確認しただけで、規模や範囲は不明である。石積面 E・F の前面に構築されている。中段階同様に、小礫を裏込めとし、根石の積み方は中段階に類似する。

以上のことから、石堤は最初の構築時(古段階)以降、2 時期にわたって拡幅が行われたことが推定される。この拡幅規模は古～新段階の石積が残存している石積面 D・E・G の部分で、それぞれ敷幅 4.6m、5.5m、6.6m を測る。なお、この拡幅は石堤全体に及ぶものではなく、中段階では石積面 B 以東に部分的に付け足されたものと推定される。中・新段階の石堤の川表は、その上方で海岸寺沢が緩やかにカーブしており、海岸寺沢が増水して決壊した場合は水流の直撃を受ける地点に相当している(写真図版 24)。このことから、中・新段階の石堤は海岸寺沢の氾濫でいちばん負荷がかかると想定される部分の強度を増す目的で増設されたものと推定される。

**表法** 表法は詳細な調査を実施していないので不明な点が多い。石積面 F の川表にあたる地点と調査地東端にあたる地点で、古段階(石積面 A・C・D)に対応する石積面が確認されている(写真図版 25)。前者の石積面は下端に 1m 前後の 2 個の巨礫を配し、その上部も裏法の構成礫よりもやや大形の礫を積み上げている。後者についても石積みの中ほどに幅 1m を超える盤状礫が使用されている。表法には裏法でみたような石積面の拡幅は見られないが、石積みの下側に巨礫を使用することで氾濫時の水流の直撃に対応したものと考えられる。

**土層** 石堤の構築時期を確認するため、平坦面調査区の三辺にトレンチを設定して土層確認を行った(第 11・15 図)。その結果、各トレンチとも、腐葉土を含む暗褐色砂質土(1 層)、その下に褐色～暗褐色砂質土(2 層)が認められた。

北トレンチは、土手の南側から石堤の石積面 E に掛けて設定した。トレンチ西側では、旧地表の可能性がある黒褐色シルト質土(7 層)の上に、土手を構成する 6～3 層が順次堆積している。なお、この土手は平坦面との比高差が最大で 120cm 程あり、堤防(土堤)として造られた可能性も考えられるが、その背後には尾根斜面が控えていることから疑問が残る。

溝 1 は土手(3～6 層)を斜めに切るもので、上層(1-a、b 層)が直径 3～5cm の礫を多量に含むローム混じり黄褐色砂質土、下層が大形礫を含む礫層(2 層)で、洪水性の堆積層である。また、トレンチ東側の土層観察から、石堤の石積面 G はこの 2 層上に構築されていることが判明した。

南トレンチは、平坦面から石堤の石積面 B にかけて設定した。北トレンチでも、土色に僅かな違いはあるものの、北トレンチの溝 1 と一連になる洪水性堆積層が認められた。

以上のことから、土手を切る溝 1 は海岸寺沢の洪水による自然堆積層であり、これが契機となって石堤が築かれた可能性が考えられる。

**遺物** 石堤の天端や石積面 A 手前の崩落礫中から 19 世紀代の磁器、ガラス片が採集されている。

平坦面調査区の表土直下(2 層)からは灰釉陶器(51)、土器・陶磁器が出土している。また、南トレンチの溝 1 の表層(1-b 層)上面からは寛永通寶が 1 点出土している。なお、寛永通寶は完形品で、表面に磨耗がほとんど見られないことから、溝 1 に伴って上流から流出してきたものとは考えにくいものである。

**時期** 南トレンチの溝 1 表層から寛永通寶が出土していること、北トレンチの溝 1 と石積面 G の層位関係から古段階・中段階は近世以降の中で築造されたものと考えられる。さらに、平坦面調査区から出土した瀬戸・美濃産陶器のうち、灯明受け皿(52)は 19 世紀前半、徳利(54)は 19 世紀中頃～後半の年代が与えられており、石堤の存続時期の一端を反映している可能性がある。

## イ 土坑 (第11・15図)

平坦面調査区の西端で1基が検出された。本址は調査前から既にわずかな窪みが確認されていたもので、表土下の2層から掘り込まれている。調査区の南端にかかるため南西部を拡張して検出した。本址は長径150cm×短径112cm×深さ15cmを測る。覆土は炭混じりの黒～黒褐色土で、礫を含んでいる。底面にも炭面があり、法面の一部は被熱していた。底面直上で19世紀後半以降の瀬戸・美濃産の磁器(56)が出土している。本址は後述する炭面1との関係から炭焼き坑と考えられるものである。

## ウ 炭面 (第11・15図)

**炭面1** 平坦面調査区の西側に位置し、1層(腐葉土)除去後に楕円形状に炭が薄く堆積した範囲が確認された。中央部で最厚8cmを測る。ほぼ100%の炭粉が掘り込みをもたずに堆積しており、炭化材は一片も含まれていなかった。本址については、南側に隣接する土1で炭焼きが行われた後、炭の選別を行うために節分けした痕跡と考えられる。

**炭面2** 堅堀調査区の南東隅から調査区外にかけて、尾根斜面を削平して造成した5.3×2.3mの三角形の平坦部がある。この平坦部の表土直下で、3.2×1.5mの範囲にわたって最厚8cmの炭化物の集中がみられた。

## エ 堅堀 (第11～14図)

調査前の堅堀は、道1・道6の分岐点より南東8mの付近から尾根筋に平行して伸びており、道4・道5の分岐点より北側8mの地点まで確認できた。また、道1・道6付近では道の造成による影響を受けてはいるが、堅堀の痕跡がわずかに認められ、やや北東方向へ向きを変えながら斜面上方に続いている。

調査前から堅堀のくぼみは確認されていたが、実際の堅堀の幅・深さ等は不明なため、最初に土層観察用トレンチを設定することにした。トレンチは見かけの堅堀軸線に直交するようにして、上方からT3・T2・T1・T5を設定した。そして、各トレンチの土層観察後に、トレンチ間の掘り下げを行った。

なお、堅堀のある斜面上には桐・赤松の大木があり、地下には広く太い根が張っていることが予想された。特に、T2-T1間は堅堀内に大木があり掘り下げが困難であること、一定幅での排土運搬路の確保が必要であること、調査終了まで土層観察壁を残しておきたかったことから、この間は掘り下げはせずに残しておくことにした。

**形状** 堅堀は基盤の閃緑岩質岩盤層を掘りこんで構築されている。この岩盤層は西区の堅堀よりもさらに軟質な岩盤であり、ボロボロに脆く風化している部分もみられる。なお、T1から下方7.5mの範囲では、堅堀の右掘端から法面にかけての岩盤が、特に脆い上に黄褐色に変色していた(第13図・写真図版14)。

堅堀は、断面形が幅広のV字状を呈する菜研堀である。法面の傾斜は場所によって異なるが、掘端-掘底の比高差がもっとも大きいT1で、左法47°・右法52°を測る。

掘底は、明瞭な幅をもって捉えられる部分では幅20～60cmを測る。後述する掘底の屈曲地点から下方では岩盤層中に硬質閃緑岩礫が露出しているため、掘底が捉えられない部分がある。また、T2では掘底に比高差20cmの段差が確認されている。

法面は、岩盤が比較的軟質なため、堅堀完成から埋没に至る過程で何度も斜面が崩落しているようであり、尚法面には傾斜角度が変換するラインが数段にわたって観察される。

**長さ** 堅堀の長さは、実際に調査できたT3-T5間で全長21.9m、内訳はT3-T2間6.7m、T2-T1間4.8m、T1-T5間10.4mを測る。本址の最大の特徴は、この間が緩やかに蛇行していることである。特に、調査区南半のT1-T5間が顕著で、T7下側付近で掘底はN-25°-WからN-23°-Eへと、48°の角度で屈曲していた。また、T3-T2間は掘底の軸線がN-15°-Wで、T1-T5間の上方向と近似するが、堅堀の左掘端はごく緩やかに湾曲していると推定される(第13図)。

幅・深さ 壱堀はT1付近に最大幅があり、下方にいくに従い徐々に減幅している。上方(T3-T2間)は右堀端が不明であるが、同じく減幅していると推定される。なお、T3-T2間の北東7~8m斜面上方には道1と平坦部がある。この平坦部は、宮坂武男氏の縄張り図では輪郭線にケバ線が表現されており、小郭状の遺構として認識されている。この平坦部とT3の堀底の比高差は4.8mを測り、壱堀の右法面は平坦部からの急斜面を利用して積極的な掘り込みはされなかったものと考えられる。

各トレンチでの壱堀の幅・深さ(堀端-堀底高)は以下の通りである(第13図)。

T3 (A-A')	堀幅: 205cm	左堀端-堀底高: 68cm	右堀端-堀底高: 調査区外
T2 (B-B')	堀幅: 513cm	左堀端-堀底高: 162cm	右堀端-堀底高: 調査区外
T1 (C-C')	堀幅: 371cm	左堀端-堀底高: 173cm	右堀端-堀底高: 184cm
T5 (G-G')	堀幅: 176cm	左堀端-堀底高: 95cm	右堀端-堀底高: 52cm

このほかに、壱堀屈曲部の周辺3箇所エレベーション図を作成している。

D-D'	堀幅: 366cm	左堀端-堀底高: 110cm	右堀端-堀底高: 197cm
E-E'	堀幅: 336cm	左堀端-堀底高: 162cm	右堀端-堀底高: 120cm
F-F'	堀幅: 312cm	左堀端-堀底高: 180cm	右堀端-堀底高: 113cm

土層(第14図) 壱堀の埋没過程を確認するため、4本のトレンチを設定し、土層観察を行った。表層はいずれも現在の腐葉土層で、その直下から壱堀の覆土が確認されている。同じ尾根の斜面上に位置するT3~T1では、覆土の土色・土質・混入物がきわめて近似していた。

T3 岩盤から表土までの層厚が薄く分層が困難であったが、表土(1層)下の2~4層を壱堀の覆土として捉えた。にぶい黄褐色砂質土が主体を占める。1・2層の層界周辺に大形礫が包含されている。

T2 12・16層の層界を壱堀の法面と捉え、壱堀の覆土は、表土(1層)下の14層(2~15層)とした。覆土はにぶい黄褐色砂質土を主体にし、礫の粒径や量・地盤が風化して粒状になった閃緑岩質粒の多寡などによって分層できる。15層は堀底の段差部分に該当し、比較的大きな礫を多量に含んでいる。間層を挟んで11・7層と1~3層中に大形礫が包含されている。

T1 壱堀が最もよく残っている地点で、壱堀の覆土は16層(2・3・5~18層)に分層される。覆土の18~10層までは、T3・T2と同様ににぶい黄褐色砂質土が主体であるが、右法面側の11・10層上には他の土層と明らかに色調が異なる黄褐色砂質土層(9・8・2層)がのっている。この3層は前述の黄褐色に変色した脆い岩盤が崩落して堆積したものである。特に9・8層は右堀端から当時の堀底中央付近まで及んでいることから、壱堀が埋まっていく原因のひとつが、法面の崩落によるものであることが理解できる。7~5・3層はにぶい黄褐色または褐色の砂質土で、左堀端から堆積したものである。

特殊な層として、12層は左法から堆積した暗灰黄色砂質土で、炭化物を多く含んでいた。また、16・15層は大形礫、10層は中~大形礫を含んでいた。また、現状の堀底に相当する部分の1・3層の層界でも大形礫がまとまって認められた。

なお、壱堀の東側に接して幅140cm、深さ50cmの凹みを岩盤層上面で確認した。この凹みの性格を確認するため、T7を設定したところ、T1の続きと推定される凹みが確認された。このことから壱堀の東側に平行して溝状の地形があることが推定された。本址については部分的な調査にとどめたが、森義直氏から、閃緑岩質岩盤層が露出していた頃にできた幼年期の谷が埋没したもの(埋没谷)との見解を得ている。

T5 尾根斜面の傾斜が変換し、壱堀のくぼみは全く見られなかった地点で、壱堀の末端付近に該当する。壱堀の覆土は5~7層、10~15層と捉えた。覆土はT3~T1と異なり、褐色砂質土が主体を占めるが、左堀端から堆積する14層はにぶい黄褐色砂質土である。本地点では、左堀端-堀底-右法の立ち上がりまでは閃緑岩質岩盤層を掘り込んでいるが、右法は岩盤上の16層を掘り込んでいた。そして、16層を削り込むよ

うにして礫・粗砂を多量に含む褐色砂質土の9層が堅堀中央付近まで及んでいる。9層から上は堅堀の右法が確認できないことから、この9層は海岸寺沢に起因する水性堆積物である可能性が高く、堅堀の埋没していく段階で、海岸寺沢の氾濫が堅堀の右法面を破壊した痕跡と推定される。7～5層は、その後に堆積した堅堀の覆土である。なお、1層中に大形礫が含まれているが、堅堀の外にあたる部分に多く認められた。

**覆土上層礫群** 調査着手時に堅堀周辺の落ち葉を除去した段階で、堀底の中央付近に大形礫が点々と露出していることを確認した(写真図版14)。各トレンチの土層観察でも表層付近に大形礫が確認されたため、トレンチ間を掘り下げた結果、T3-T2間とT1-T5間の現状の堀底周辺から準大～人頭大を中心とする礫群を検出した(写真図版15・18)。礫群は堀底主軸よりもやや東寄り、幅0.8～1.2mの帯状を呈し、多量の礫が敷き詰められたように出土した。この礫群はT1-T5間ではわずかに蛇行しながら、尾根の斜面の傾斜が変換するあたりで急激に幅を広げており、T5周辺では幅3.1mを測る。この礫群については自然堆積とは考えられず、人為的に堅堀内に持ち込まれたものと推定される。堅堀下端を延長した位置にある、道4・道5が交差する周辺には土手がなく、石堤の川裏堤内地に続いていることから、これらの礫は石堤を拡張した石積面を構築する際の石材であり、堅堀のくほみを石材運搬路として利用した可能性が考えられよう。

なお、この礫群の下にも間層を挟んで礫が多量に出土している。T1の10層、15・16層に対応するものだが、礫の大きさに大小があること、礫間に粗密があることから、堅堀内に自然崩落した礫の可能性が高い。

**遺物(第11回)** T1-T5間の堅堀覆土から2点出土している。このうち、堅堀の屈曲部から2.3m下方では、堀底から65cmの覆土から内耳鍋の破片(46)が出土している。また、堅堀下端付近の表土直下から磁器の破片(48)が出土している。

堅堀周辺からは、T2の上方2mの尾根筋付近の表層から19世紀代の磁器(47)、T6から内耳鍋の胴部破片(49)、土器の皿(50)が出土している。また、調査区の南端付近から黒曜石の石核(3・4)が出土している。

これらのうち内耳鍋については、堅堀内の覆土や周辺からの出土ではあるが、桐原城に伴う可能性がある遺物である。

### 第3節 遺物

#### 1 土器・陶磁器・土製品 (第24回・第1表)

総数65点の土器・陶磁器片が出土した。多くが接合関係の認められない小片ではあるが、残存状態が良好な資料を中心に18点を図化・掲載した。19世紀中葉以降、近・現代に生産されたと考えられる瀬戸・美濃産磁器製品が中心を成しており、酸化コバルトや酸化クロム、正円子などによって絵付けされたものが多く見られる。絵付けの技法としては銅版転写、型紙摺りなどが多く、一部に上絵付けのものが確認される。器種は生活雑器である碗・皿類が多いが、一部神酒徳利などが確認された。

近世以前に属するものとしては51(1)・31(5)・14(8)・7(18)、18・28・42・46・49・53・57などが挙げられる。これらには特にまとまりも確認できず、小片での出土が多いため流入したものが多数を占めると考えられよう。

51(1)は灰釉陶器の碗である。高台は付け高台で底面は糸切りの後にナゲ調整されている。そのため10世紀代後半以降の東濃産であると考えられる。7(18)は磁製の人形である。白色の素地に透明釉が掛けられているが、下部の一部のみ無釉である。恐らく上絵付けが施されていたと考えるが、摩滅してしまっており詳細は定かでない。太鼓の撥を両手に持った人物であると考えられるため、玩具である可能性が高いように思

われる。53は小片での出土であるため器形の判別が難しいが、恐らく壺・甕類の胴部であろうと思われる。やや粗い灰白色の素地に鉄軸が施釉されており、内面には荒くヘラ削り痕が残されている。このため美濃地方で製作された古瀬戸系陶器甕であると考えられ、15世紀代に属するであろうと思われる。46・49は内耳鍋である。双方共に小片での出土であるため詳細の判別が難しいが、胎土や調整から中世から近世前半に属するものであると考えられる。

## 2 瓦 (第2表)

総数23点、総重量3874gの瓦が出土している。総じて黒色を呈するいぶし瓦であり、江戸後半期以降に焼成されたものであると考えられる。大半が小片であり詳細を判別し難いが、その形状から棧瓦もしくは平瓦と考えられるものが大半を占めていると思われる。1点のみ丸瓦と思われる個体(18)が確認された。体部のみの破片であり、コビキはBであると思われる。

## 3 ガラス製品 (第24図・第3表)

ガラス製品は8点確認された。総じてソーダガラスであるため明治期以降の製品であると考えられる。ビン類、目薬容器、尿瓶、板ガラスが確認され、ビン類が大半を占めている。

7(1)は両口点眼式の目薬容器であると考えられる。気泡が多く入る青色のガラス製品であり、胴部には縦に筋が入れられている。上部と下部にそれぞれ口があり、下部の口は点眼口であると思われる。上部の口は口径1.6cmで口縁下0.8cmの箇所突帯がつけられている。点眼口は口径0.6cmでやはり突帯が見られる。こうした形状の目薬の瓶は信天堂山田安民薬房(現ロート製薬)が昭和6年から昭和37年にかけて製造していた。7(1)にはロート製薬のエンボスは確認できないが、このロート目薬もしくはそれに類するものであると考えられるため、恐らくこの年代の中で製造されたものであると思われる。

3(2)、1・2・5・6はビン類である。内3(2)、1はビール瓶であると考えられる。1には胴部に「キリ」の刻印が見られるためキリンビールの瓶、3(2)には「サクラビール」の刻印が見られるためサクラビールの瓶であると考えられる。キリンビールのブランドは1888年から現在に至るまで、サクラビールのブランドは1918年から1943年にかけて使用されていたので、この頃に製造された瓶であると考えられよう。双方共に茶色で厚手のガラスで成形されている。その他のビン類は2・5・6である。2は水色、6は赤色を帯びたガラスであり、5は無色透明である。5・6は気泡があまり見られないため昭和以降の、2は気泡が顕著に見られるため明治以降昭和初期までのものと考えられる。

## 4 金属製品 (第24図・第4表)

金属製品は銭貨1点を含む3点が出土している。これらのうち銭貨のみ拓本掲載した。

**寛永通寶** 東区の平坦面調査区、南トレンチ内の溝1上層(1-b)から出土している。完形品であり、磨耗がほとんどみられないことから、海岸寺沢の洪水に伴う上流からの混入品である可能性は低い。「ハ貝寶」を基本とする新寛永と同様の字体が観察されたことから、寛文8年(1668)以降鑄造の新寛永銭かと思われる。

**不明鉄製品** 中区T1から出土している。全体的に錆膨れしている。両端部が欠損して残存形状は鉤形、断面は円形を呈する。欠損箇所の割れは新しく、本来の形状はU字形になる可能性がある。芯部は径3mm程度で中空である。

**薬莖** 西区平坦面の集石1の付近から出土している。猟銃用の散弾銃の撃ち殻である。日本国内において散弾銃の使用が始まったのは明治時代以降である。



第2表 桐原城址 瓦一覽表

No.	区	出土地	種類	寸法(mm)				重量(g)	備考	
				幅	長さ	幅	長さ			
1	西	道1	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	46	011	いぶし瓦
2	西	道1	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	92	012	いぶし瓦
3	西	平垣南出函	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	416	013	いぶし瓦
4	西	平垣南出函	平瓦	幅	長さ	幅	長さ	522	014	いぶし瓦
5	西	平垣南出函	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	368	016	いぶし瓦
6	西	平垣南出函	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	112	017	いぶし瓦
7	西	平垣南出函	椀瓦	幅	長さ	幅	長さ	128	018	いぶし瓦
8	西	平垣南出函	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	168	020	いぶし瓦
9	西	溝石1	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	194	026	いぶし瓦
10	西	溝石4	椀瓦	幅	長さ	幅	長さ	112	028	いぶし瓦
11	西	溝石1	椀瓦	幅	長さ	幅	長さ	82	030	いぶし瓦
12	西	溝石1	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	116	031	いぶし瓦
13	西	溝石1	不明	幅	長さ	幅	長さ	32	032	いぶし瓦
14	西	溝石1	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	74	033	いぶし瓦
15	西	溝石1	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	44	034	いぶし瓦
16	西	溝石1	椀瓦	幅	長さ	幅	長さ	18	035	いぶし瓦
17	西	平垣南出函	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	108	043	いぶし瓦
18	西	平垣南出函	平瓦	幅	長さ	幅	長さ	74	045	いぶし瓦
19	西	溝石	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	52	046	いぶし瓦
20	西	掘込	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	290	046	いぶし瓦
21	中	T1 溝1	椀瓦の平瓦	幅	長さ	幅	長さ	48	005	いぶし瓦
22	中	T1	不明	幅	長さ	幅	長さ	10	008	いぶし瓦
23	中	T6	椀瓦	幅	長さ	幅	長さ	500	018	いぶし瓦

第3表 桐原城址 ガラス製品一覽表

No.	区	出土地	種類	寸法(mm)			重量(g)	備考
				幅	長さ	厚さ		
1	西	道1	ビン類				1888	009
2	西	道1	ビン類	(6, 3)				010
3	西	平垣南出函	ビン類					1918~1943
4	西	平垣南出函	瓶ガラス					昭和以降
5	西	平垣南出函	ビン類					昭和以降
6	西	道2	ビン類	4.8				明治以降
7	中	T2 溝2	日蓮宗瓶	2.4	7.9	1.6		524~80年代末
8	東	石堤	尿瓶	7.4				大正~昭和初期

第4表 桐原城址 金属製品一覽表

No.	区	出土地	種類	材質	寸法(mm)			重量(g)	備考
					最大径	最大径	最大径		
1	中	T1	不明	鉄	33.2	29.0	8.6	5.4	
2	東	南トレンテ	寛永通寶	銅	24.1	24.1	1.0	2.4	近寛永
3	西	平垣出	葉巻	真鍮	69.5	22.2		9.2	数珠紐用 プラスチック

第5表 桐原城址 石器一覽表

No.	区	出土地	種類	石材	寸法(mm)			重量(g)	備考
					最大径	最大径	最大径		
1	中	T2 土1	銅片	燧岩	(181)	(107)	81	978.8	単面削れ
2	中	T2 土1	銅片	燧岩	(135)	95	60	664.2	打面・背面磨面
3	東	検出函	石核	黒曜石	21	12	10	2.9	
4	東	検出函	石核	黒曜石	23	15	9	1.5	刮片素材

## 第Ⅳ章 海岸寺遺跡

### 第1節 地形・地質

---

薄川は三峰山を源流に扇状地を形成して流れ、桐原の追倉沢と海岸寺沢により形成される小扇状地を取り込み、里山辺に至った後に田川に合流する。薄川はV字谷を形成するように下刻侵食し、両側は崖錐堆積物の岩屑や崩土の落下によって崖錐性の斜面が形成されていった。特に右岸の南向き斜面の発達は著しく、日当たり・水はげがよい等の立地条件を生かして現在は山辺ぶどうの主産地になっている。

海岸寺遺跡は薄川右岸、平安時代に建立された可能性がある旧海岸寺周辺にあたり、海岸寺沢流域の崖錐性小扇状地に立地する。今回調査地を含む遺跡周辺は葡萄畑として利用されているが、以前は水田として利用されていた。

### 第2節 調査方法

---

調査対象地は幹線農道の予定地であるため狭長であり、事前に対象地内3箇所を試掘調査している。その結果1箇所から平安時代の遺物が確認されたため、この地点を中心に調査区(A区)を設定した。

A区は西側に墓地、東側に現代の石垣があるため、短軸は農道竣工予定範囲からそれぞれ50cm内側に設け、長軸は南側に位置する農道と北に位置する墓前に調査区がかからない様に設定した。

A区の調査終了後、近隣住民より耕作の最中に発見したという縄文土器を提供いただいた。このため、提供者の証言をもとに、B区を設定した。

調査面積はA区74.83㎡、B区10.63㎡、計85.46㎡である。

測量方法については、用地・工事測量で設定した測量用基準杭を基にA・B区それぞれ基準点を設定した。そこから任意グリッドを設定し、簡易遣り方測量を用いた。測量基準点及び水準点は以下の通りである。

A区基準点(X=25950.500, Y=-42750.500)、B区基準点(X=25974.537, Y=-42766.055)、A区水準点(754.400m)、B区水準点(755.500m)である。

発掘は、表土除去と石垣の一部撤去は大型建設用機械バックホーを使用し、遺構検出面の直上まで掘り下げ、その後は人力による遺構の検出・掘り下げを行なった。

### 第3節 調査地基本土層

---

**A区(第26図)** 1～3層は昭和に造成された水田に伴う層であり、肥料袋やビニール袋などが多数検出された。4～6層は遺物包含層である。4・5層から土師器、灰胎陶器が出土しており、平安時代の堆積と推測される。4層以下は東高～西低の緩やかな傾斜をもっている。検出された土坑はこの層に帰属するものが多く、集石も同様である。8層は無遺物層であり、斜面が形成されたときの風化礫が大量に検出されている。8層以下は縄文時代以前の堆積であると推測される。風化礫は集石遺構の礫と比較すると脆弱で黄みを帯びていたため、両者の区別は容易であった。

**B区(第26図)** 1・2層は葡萄畑造成後の耕作土である。また攪乱と判断したa～cからは、多量の石灰やアンカー設置時の礎石等が検出されている。3・4層からは風化礫が大量に検出されており、A区8層以下に対応すると推測される無遺物層である。

## 第4節 遺構

調査地は江戸時代に旧海岸寺から南方へ移った海岸寺の寺域北側に位置する。調査の結果、平安時代の土坑1基、集石遺構1基、中世の堅穴状遺構1基が検出された。現代の耕作により造成された水田跡・棚田に伴う暗渠1条、葡萄畑に伴う暗渠1条、耕作の際に埋めたと考えられる集石遺構1基、散水用の塩ビ管が数本確認されたことから、A区北側の中世以前の遺構は近現代の攪乱によって壊されている可能性が非常に高い。

以下特筆すべき遺構について述べる。

**土9** (第28図) A区南端に位置する。長2.4m×幅0.6~1.0mの隅丸長方形を呈すると推測される。試掘トレンチ及びST2・3によって土坑の大半は認識がまま掘削した部分もあるが、調査区西・南壁で遺構覆土が検出されなかったことから、平面プランを推定した。遺構内から灰釉陶器、土師器、角釘が出土している。その形態・規模・出土遺物から土坑墓の可能性が考えられるが、断定はできない。

**土11** (第28図) A区集石2の南に位置する。西半部をST2によって掘削してしまったため、本来の形状は楕円形を呈すると推測され、検出規模は長・短軸ともに1.0mを測る。本址と周辺には炭・焼土の散らばりが顕著にみられたが、性格は不明である。火葬に伴う土坑墓とも考えられるが、埋葬施設に認定し得る痕跡は検出されなかった。同時期であると推測される集石2に接しているが、本址と集石の関係は不明である。

**集石1** (第26図) A区中央西壁に位置する。長辺5.0m、短辺1.8m以上を測る。水田に伴う集石で、水田を埋める際に不要な礫を投げ込んだものである。

遺構の上層にはA区一面に広がる水田層があり、礫除去後の下層からも水田の層が検出された。集石2の上層に確認された水田とは約60cmのレベル差があることから、調査地内に少なくとも2枚の水田が存在していたことが確認できた。

**集石2** (第27図) A区中央に位置する。範囲は4.0×2.4m以上で、北部を溝2によって切られている。直径5~80cm以上の礫が200個以上検出された。最大のものは長1.5m幅1.0mを測る閃緑岩の巨礫が検出された。巨礫の形状から石碑の可能性を考慮して調査を進め、除去する際に裏面を確認したが、文字の痕跡は認められなかった。本址の断面観察の結果、巨礫の下には板石がいくつかまかせてあり、巨礫直下にもほぼ同一の大きさの巨礫が検出され、二つの巨礫は同一個体であることがわかった。上石と下石の間には厚さ10cmの土が充填しており、下側の石を除去したところにも同様の土が確認できた。集石の正確な機能は判然としませんが、巨礫については水平を保つために2ヶ所に土が置かれていたものと考えられ、台座として利用されていた可能性が高い。

集石内からは遺物の出土はなかったが、層的に平安時代以降に帰属すると推測される。

**溝1 (暗渠)** (第28図) A区北側に位置する。葡萄畑に伴う暗渠である。基本土層第2層を掘り込んでおり、底面は砂利混じりの土である。排水用の空間をあげ、礫を組んだ上に土砂の流入を防ぐための肥料袋が並べられていた。昭和中期に造成されたものである。

**溝2 (暗渠)** (第28図) A区集石2の北に位置する。A区一面に広がる水田に伴う暗渠である。本址を境に南北で横相が異なり、北部は攪乱の影響が強い。調査区壁の観察から本址を造成する際に北部は大規模な攪乱を受けたと考えられる。

**水田** 時代は明確ではないが、少なくとも2回は造成しており、A区中央~南部にかけて機能していた面が1面、その後A区全域に及ぶ大きな水田へと移り変わっている。2枚の水田面の間には集石1や肥料袋等のビニール片等が多数出土している層がある。

**壁1** (第26図) B区中央に位置する。その大半は調査区域外にあり、検出された調査区内においても葡萄畑造成に伴い1/3ほど削り取られていた。長軸2.5m以上の大形の穴で方形または長方形を呈すると推測

される。遺物は内耳鍋の破片、火打ち金具、板状鉄製品、つき臼の出土が認められた。遺構と認識できなかつた位置からも内耳鍋の破片がまともに出土していることから、本址の本来の規模は大きくなる可能性がある。本址の時期は内耳鍋から、15～16世紀と推定される。

第6表 海岸寺遺跡 遺構一覧表

〈数値〉は検出規模

遺構 No.	区	平面形	規模 (cm)			新旧関係	遺構・遺物・備考
			長軸	短軸	深さ		
土1	-	A	円形	80	35	17	浅い土師器
土2	-	A	方形	92	84	18	集石2
土4	-	A	円形	〈82〉	64	9	浅い 磁集中
土9	28	A	長楕円形	240	100	40	土坑蓋か・角釘 土師器 灰釉陶器
土11	28	A	楕円形	〈100〉	95	16	土坑内外に炭・焼土の範囲が広がる
土12	-	A	円形	65	42	9	
溝1	28	A		310	50	16	昭和40年頃の甕崎畑に伴う障壁
溝2	28	A		280	42	14	集石2 水田に伴う障壁
集石1	-	A		500	〈180〉	-	水田造成に伴う、纏捨て場
集石2	27	A		〈400〉	〈240〉	-	土2・溝2
竪1	26	B	方形	〈230〉	〈120〉	60	中世の遺構 内耳鍋 火打ち金具 つき臼

## 第5節 遺物

A区からは土師器・灰釉陶器、角釘、黒曜石製の石鏃・チャートの剥片が出土している。B区では竪1から内耳鍋、灰釉陶器、つき臼、火打ち金具等が出土している。特に、内耳鍋は柯原城の時代に重複する時代の遺物であり、破片ではあるが関連性を窺える貴重な資料である。このほかに、黒曜石・チャートの剥片が出土している。以下、種類毎に記すことにする。

### 1 土器 (写真図版37)

#### (1) 縄文時代

B区の前土地所有者から8点の縄文土器を提供いただいた。時代は中期後葉が主体で、主な土器型式は加曾利EⅢ・Ⅳ式、曾利Ⅰ～Ⅱ式である。それぞれの個体には摩耗痕はあまり見受けられなく遺存状態は比較的良好であり、破片自体が大きいため上方からの流れ込みであったとも考え難い。本遺跡内に縄文時代に帰属する集落がある可能性は高い。

#### (2) 平安時代～中世

今回の調査で出土した土器・陶磁器は総数220点を数え、総重量1216gを量る。平安時代が主体である。器径・器高を推定できるものは僅かであり、摩耗を受けた小破片がほとんどを占める。個々の観察が困難な土器が多く、出土地点と器種内訳を一覧表に示すにとどめている。以下、時代別・器種毎に記述する。

#### ア 平安時代の土器

総数129点が出土している。土師器は105点出土している。底部や口縁部の破片が認められるものの、摩滅や小破片であることなどから図示可能な資料は皆無である。また、黒色土器Aが3点出土しているが、いずれも体部小破片である。灰釉陶器は21点あり、Ⅲ・Ⅳそれぞれ1点が確認されている。須恵器は壺片がA区周辺から表採されているだけに過ぎない。これらの出土遺物から勘察して検出された遺構等は平安時代後期に位置すると考えられる。

#### イ 中世の土器

内耳鍋が67点出土している。口縁部や耳部などの型式差の判別が可能な部位が出土しているが、小破片の

占める割合が多い。出土地点と胎土や器面の調整・色調から5個体を数える。内訳は壺1から2個体、遺構外から3個体である。個体数の割合と比べると破片の数は少ない。他にカワラケと考えられる土師質土器片・青磁片・灰釉陶器が内耳鍋と共に出土している。

第7表 海岸寺遺跡 土器・陶磁器一覧表

No.	区	出土地点	出土施設	遺構 (No.)	個 数	内 訳
1	A	土1	一拵		4	1土師器(胴部)
2	A	土9	一拵		24	7土師器(底部・胴部)×6、灰釉陶器(胴部)
3	A	土9			38	13灰釉陶器(口縁)×2、土師器(胴部)×11
4	A	第1検出面	S18-S2~S16-S2		6	2土師器片×2
5	A	ST3	南壁下トレンチ内		4	1土師器杯(口縁)
6	A	ST3	西端壁(L=80cm)		2	1灰釉陶器(胴部)
7	A	ST7			8	1土師器杯(口縁)
8	A	西壁	No.1		4	1土師器(胴部)
9	A	第1検出面	一拵GL=55cm		6	1土師器(胴部)
10	A	第1検出面	北部		6	1灰釉陶器(口縁)
11	A	第1検出面	南部一拵		10	2土師器(胴部)×2
12	A	第1検出面	南部一拵		8	2土師器(胴部)、灰釉陶器(胴部)
13	A	第1検出面	南部一拵		38	2土師器(胴部)、灰釉陶器(口縁)
14	A	第1検出面	南部		2	1灰釉陶器(口縁)
15	A	第1検出面	北部		4	1陶器片(近現代)
16	A	第1検出面	南部一拵		12	8黒色土器A(体部)×2、土師器(口縁・胴部)×6
17	A	ST5以南	一拵		104	47土師器片×46、陶器(近現代)
18	A	ST5以北	一拵		32	8灰釉陶器(口縁・胴部)×3、土師器(底部・胴部)×5
19	A	ST6以南	一拵		22	20土師器杯(胴部)×18、灰釉陶器(口縁)、不明土製品
20	A	第2検出面	南部一拵		6	1灰釉陶器(胴部)
21	A	第2検出面	No.3		10	1灰釉陶器(口縁)
22	A	北部西壁	一拵		4	1黒色土器A(体部)
23	A	表探			10	1土師器片
24	A	表探			10	1陶器片(近現代)
25	A	表探			8	1須恵器甕
1	B	壺1	拡張区		38	4内耳鍋(胴部)×4
2	B	壺1			4	1土師質土器(カワラケ?) (胴部)
3	B	壺1	拡張区		2	3内耳鍋(胴部)×2、陶器片(近現代)
4	B	壺1	拡張区		6	1内耳鍋(底部)
5	B	壺1	No.1		42	1内耳鍋(口縁)
6	B	壺1			60	6内耳鍋(胴部・底部)×6
7	B	壺1			14	2内耳鍋(胴部)×2
8	B	GL=60cm	一拵		86	6内耳鍋(口縁・耳部)×5、土師質土器(胴部)
9	B	GL=0~50cm	一拵		28	9灰釉陶器(口縁・胴部)×2、陶磁器(近現代)×6、磚7片
10	B	南西副機中	一拵		8	2灰釉陶器(口縁)、土師質土器(カワラケ?) (胴部)
11	B	GL=20~35cm	一拵		42	6内耳鍋(口縁・胴部)×3、灰釉陶器(口縁)、土師質土器(底部)、青磁(胴部)
12	B	区	一拵		204	16内耳鍋(口縁・胴部・底部)×15、瓦片
13	B	GL=0~15cm	一拵		72	9内耳鍋(口縁・耳部・胴部)×5、灰釉陶器(口縁・胴部)×2、陶器(近現代)、瓦片
14	B	区	一拵		8	3内耳鍋(胴部)×3
15	B	区・拡張区間	ベルト内一拵		174	24内耳鍋(口縁・胴部)×19、灰釉陶器(胴部)、土師質土器×2、陶器(近現代)×2
16	B	区・拡張区間	ベルト東端近		46	1内耳鍋(胴部口縁寄り?)

## 2 金属製品 (第29図・写真図版38)

4点が出土し、比較的残存状態が良好であったため3点を図示している。これらの出土地点・材質・寸法等については一覧表を参照されたい。

**角釘 1・2(1) 2(1)**はA区第2検出面からの出土で、出土地点から土9に帰属すると考えられる。原形は留めているが、頭部・胴部ともに銹化が進み芯部は空洞に近い状態である。頭部は長楕円形に変形していて、敲打によるものかと思われる。1は遺存状態が非常に悪いが、断面形が方形を呈するため、恐らく角釘だと思われる。両端部が欠損していて、一部曲がるように変形している。

**火打ち金具 3(2)** 壺1の隙間から出土している。断面は端部で方形、基部で長楕円形を呈し、若干の湾曲を持つ。基部中央の一部と両端部が欠けている。共存遺物として多数の内耳鍋の破片が出土していることから、周辺に調理施設があった可能性が考えられる。

板状鉄製品 4 (3) 堅1底部から出土している。若干の振れがあり、下端部の厚みが上部に比べて大きい。厚みの大きい部分は折り曲げられているというより、敲くことによって生じた変形かと思われる。また下端部右側が一部剥離していることから、敲打による振れだと推定される。

第8表 海岸寺遺跡 金属製品一覧表

No.	区	出土地点	種類	材質	寸法(mm)			重量(g)	備考
					径	幅	厚		
1	A	土9 No.1	釘	鉄	27.2	6.4	6.3	2.5	胴部(両端欠)
2	1	A 第2検出面 No.2	角釘	鉄	65.7	13.1	6.7	2.5	完存
3	2	B 堅1	火打ち金具	鉄	74.3	12.0	3.1	33.8	基部(両端欠)
4	3	B 堅1 底部	板状鉄製品	鉄	51.0	24.8	7.0	7.2	完存 用途不明

### 3 石器 (第29図・写真図版38)

今回出土した資料はA区2点、B区5点の計7点が出土し、このうち堅1から出土しているつき臼1点を図示している。出土地点・寸法・重量等については一覧表を参照されたい。石材は黒曜石・チャート各3点、安山岩1点で、器種内訳はつき臼1点、剥片5点、石鏃1点が出土している。

つき臼 3 (1) B区堅1から出土している。卵形を呈する楕円礫の片面に径60mm、深さ23mmの凹みがあり、裏面中央にも敲打による径38mm、深さ3mmの浅い凹みが観察される。

石鏃 1 A区第2検出面、土11南側から出土している。黒曜石製の凹基式である。先端・基部の一部が欠損しているが、摩滅はほとんどみられない。

第9表 海岸寺遺跡 石器一覧表

No.	区	出土地点	種類	材質	寸法(mm)			重量(g)	備考
					最大径	最大幅	最大厚		
1	A	第2検出面 No.1	石鏃	黒曜石	14.6	13.5	2.1	0.4	先端・基部欠損
2	A	6層 No.1	剥片	チャート	21.8	24.7	4.9	2.1	
3	1	B 堅1 No.1	つき臼	安山岩	112.5	85.2	64.7	767.9	完形
4	B	巨礫下	剥片	黒曜石	15.1	20.2	4.4	1.2	
5	B	拡張部GL-30~40	剥片	チャート	32.1	20.0	5.1	3.5	
6	B	拡張部GL-30~40	2次加工ある剥片	チャート	31.9	23.2	12.8	8.4	
7	B	拡張区	剥片	黒曜石	15.0	22.1	6.0	1.9	摩擦痕一部有

### 附 天神上遺跡 (写真図版39)

海岸寺遺跡の東方約270mの地点に、高さ約3m、長さ約10mの石垣を発見したため、3箇所を試掘調査した。東・西トレンチ(以下トレンチをTとする)は計画道路の中心線から約1m南側の杭を挟んでそれぞれ1mの位置に南北1.5m×東西1.0m、北Tは東Tの北側延長上で石垣の真下にかかるように0.5m×1.0mで設定した。東Tは57cm掘り下げて黒褐色～褐色の砂質土が確認された。4層からは20cm大の礫、5層上面付近から炭面が検出された。1層からは金属製品1点、1～2層中で黒曜石が2点出土した。西Tは47cm掘り下げて1～3層を確認した。1層は厚さ10cm前後、2～3層中で縄文土器片が出土した。南に向かって2～3層が厚くなるので、旧地形の切り盛りにより平坦にしたと思われる。東・西Tの掘削で、平坦面造成前の地山面は確認できなかった。北Tは湧水のため65cm掘り下げた位置で調査を止めたが、黒褐色～暗褐色の砂質土が確認された。2～3層から20cm大の礫が検出され、2層からは鉄分の集積も確認されている。表土から32cm下の2・3層境で石垣の底部を確認した。

今回は調査面積が限られていたため、本遺跡の性格は明確にできなかった。出土した縄文時代の遺物は整地によって混入したと考えられる。

## 第V章 総括

今回の調査は、県営畑地帯総合土地改良事業の山辺地区幹線農道建設に伴うもので、桐原城址・海岸寺遺跡とも遺跡のごく一部を調査したにすぎない。桐原城址は戦国時代～近現代の遺構、海岸寺遺跡は平安時代～近現代の遺構を確認した。このうち、近現代の遺構はいずれも農業関連のものとして推定される。本章では、両遺跡の古代～近世の特徴的な遺構を概観し、両遺跡の今後の課題を抽出することをもって総括とする。

### 1 桐原城址

武田家重臣の駒井政武が記した「高白斎記」によれば、天文19（1550）年7月の武田晴信による筑摩郡侵攻で、桐原城は林大城を含む4箇所の城と共に自落したとされる。松本藩主水野忠幹・忠恒の主命で享保9（1724）年に編纂された『信府統記』第18の「松本領古城記目録」には、桐原城の主要部の規模、歴代城主、霧降城が紹介されている。桐原城は県史跡小笠原城跡（昭和45年10月22日指定）の一環として、昭和55年9月8日に入中城と共に追加指定されている。桐原城址の研究史は本章では触れないが、本城の縄張り図を公表し、全体像について言及したものに、三島正之氏（文献5）と宮坂武男氏（文献6・7）の研究があげられる。

調査は桐原城南西端にハ字状に配された2本の堅堀の末端部を発掘した。その特徴は以下の通りである。

**西区堅堀** 本址は三島・宮坂両氏の縄張り図（第17図）に記載されているが、いずれも道1の上方で堅堀は取束して描かれている。現況では道1の下方に堅堀の痕跡は全くうかがえなかったが、調査の結果、堅堀は下方に続くことを確認した。調査範囲では堅堀が取束する様子はなく、おそらく堅堀は山裾まで続いていたと考えたい。なお、堅堀の最下端で確認した堀底の段差は、全容を明らかにできなかったが人為的なものであり、堅堀内に侵入してきた敵が登りにくくように段差を設けた可能性が考えられる。

**東区堅堀** 本址は三島氏の縄張り図にはないが、宮坂氏の縄張り図には描かれている（第3図）。縄張り図の最南端、道1下の堅堀が今回の調査範囲に該当する。宮坂氏は堅堀が道1・6にかかる部分を破線表現し、その東側にケバ線で囲んで小郭を描いている。今回実施した地形測量では、堅堀が道1付近で減幅していること、堅堀が交差する道1の東側が平坦状になっていること、この平坦部から堅堀のT3-T2間は切岸状の急斜面となっていることを確認した。T2から上方の右斜面はこの急斜面を利用して、堅堀の積極的な掘り込みはしなかったものと考えられる。また、堅堀が交差する道1の西側では、道下に帯状の平坦部が確認された。2箇所の平坦部（第11図）は調査範囲外のため地形測量しか行っていないが、山城に伴う遺構の可能性もあり、今後の研究課題である。なお、本址は宮坂氏の縄張り図では道を挟んで1本の直線状の堅堀として表現されているが、実際の堅堀は道6の上方でいったん取束した後、やや東にずれて再びまっすぐに伸びる堅堀があり、2本の堅堀が軸線をわずかにずらして上下に配されたと考えられるものである。

本址の特徴は平面がS字状を呈することで、T1-T5間で堅堀が48°屈曲し、T2より上方では左端が緩やかに湾曲していた。なお、T1下方から屈曲部付近の右端端～法面は、黄褐色を呈する非常に脆い岩盤層を掘り込んでおり、閃緑岩質岩盤層が露出してきた幼年期の谷状地形を利用して、堅堀掘削の効率化を測ったものと推測される。ただし、屈曲部から下方は変色岩盤層が見られないので、変色岩盤層の下端からは、意図的に堅堀を曲げたものとする。堅堀の堀底を屈折させる理由としては、堀内に侵入した敵の見通しを悪くさせる効果を期待したものと考えられよう。

**石堤** 海岸寺沢右岸に現存する全長約140mの石積み堤防の一部を調査した。調査地内では横断面が台形を呈し、天端幅1.2～2.1m、敷幅5～6m、川裏堤内地との最大比高差2.6mを測る。周辺で採取可能な閃緑岩・珉岩を主体に、安山岩・砂岩・硬質泥岩などの礫で構築している。

石堤の裏法では、礫をほぼ垂直に積み上げた石積面A~Gを確認し、石堤構築時と推定される古段階（石積面A-C-D）の後、中段階（石積面B-E-F）、新段階（石積面G）の2時期にわたる石堤の拡幅を確認した（第15・16図）。中・新段階の石積みは礫を斜めに積み上げる谷積と小礫を裏込めとしている点で、古段階とは明瞭に区別される。また、中段階は石積面Bに隅角部が確認されており、この拡幅は石堤全体に及ぶものではなく、局所的なものであったと推定される。新段階は根石の一部を確認しただけで、規模や範囲は明らかにできなかった。一方、表法は石積面Fの川表にあたる地点と調査地東端の2箇所で見積面を確認した。これらは裏法の古段階に相当するが、石積の下端や中程に1m前後の巨礫を配置し、その上部も比較的大形の礫を積み上げており、表法・裏法で礫の積み方を区別していたことがうかがえる。これは、海岸寺沢が氾濫した場合に、水流の直撃を受ける表法側に人形礫を意図的に配したものと考えられよう。また、中・新段階の石積面より上方で海岸寺沢が緩やかにカーブしていることから、石堤の拡幅は、海岸寺沢が氾濫した場合の洪水でいちばん負荷がかかると想定される地点を補強するために行われたと推定される。

海岸寺沢が氾濫した痕跡は、東区堅堀の末端付近に設定したT5で観察されている（第14図）。T5では堅堀が廃絶されて埋没していく過程で、堅堀の右法を壊して堀内に流入した洪水性堆積層（9層）があり、過去に海岸寺沢の氾濫が堅堀の末端付近にまで及んだことが確認できた。また、平坦面調査区の北トレンチでは溝1（洪水性堆積層）が土手を切っており、石堤の石積面Gはこの層上に構築されていた（第15図）。なお、T5-9層と平坦面調査区の溝1上面の標高は752~753m付近にあり、これらは同じ氾濫によって堆積した土層の可能性がある。上記の土手や堅堀の末端部を切る海岸寺沢の洪水は、おそらく堅堀のある斜面の裾を抜け、後述する桐原氏居館や桐原村の集落に及んだものと推定される。おそらくは、桐原城廃絶以降に桐原村の集落を直撃するような洪水が発生し、これを契機として石堤が構築されることになったのではないだろうか。この構築時期は、少なくともT5の堅堀の覆土10層が堆積した以降であり、南トレンチの洪水性堆積層の上面から出土した完形の寛永通寶から近世以降と考えられる。

以上のことを総合的に考えて、本址は江戸時代に川除普請によって構築された石堤と考えたい。なお、寛政10（1798）年11月の東桐原村「大火につき東桐原村御救願控」（文獻4：431-432頁）に、「当四月満水ニ付日々御普請相働」の記載があり、海岸寺沢または薄川の洪水で川除普請が行われたことがうかがえる記録がある。この洪水による被害がどこで、どの場所を普請したかは不明であるが、少なくとも18世紀末には桐原村で川除普請が行われていたことを証す史料である。海岸寺沢は昭和58年に約700mの区間が砂防指定地に編入されており、現在においても洪水災害の対策が必要な地域である。しかし、調査範囲では石堤が決壊した痕跡は認められず、近世の堤防構築技術の高さがうかがえよう。

## 2 海岸寺遺跡

海岸寺は創建の時期、園基・開山は明らかでない。海岸寺は当初、北方の山際にある弘法平に寺域があったとみられ、近世以降に南方に寺域を移したと考えられている。江戸時代には里山辺の兎川寺の一僧堂になり、明治初年の廃仏毀釈により廃寺となっている。今回の調査地は、近世～明治初頭の旧寺地の北縁付近に当たっている。調査は、長野県宝「木造千手観音立像（旧海岸寺）」の取藏棟の東側をA区、海岸寺沢に近いB区の計85.46㎡を調査した。

**A 区** 2時期にわたる水田層や現代の耕作関係遺構が主に検出された。土9は、土師器・灰釉陶器が出土した平安時代の土坑である。平面形が長2.4m×幅0.6~1.0mの隅丸長方形を呈し、釘が出土していることから墓坑の可能性がある。

**B 区** 前土地所有者より縄文土器の出土が伝えられた地点である。調査の結果、縄文時代の遺構は確認できなかったが、中世の堅穴状遺構を検出した。大半が調査区外にかかるため規模は不明であるが、内耳鍋・火打ち金具・つき白が出土している。なお、内耳鍋はB区から5個体分、67点の破片が出土している。

海岸寺の木造千手観音立像は内列を施さない一木造で、平安時代中期の作と推定されている。また、旧海岸寺の寺域から少し登った屋根上の平安時代後期～末期の経線から青銅製経筒・白磁合子・鉄製刀子が出土し、旧海岸寺経塚出土品として市重要文化財に指定されている。これらのことから、海岸寺の創建を平安時代にまで遡らせる考えがある。今回調査では、A区から平安時代の土坑が見つかったこと、桐原城址の中区T1から黒色土器A、東区の平坦面調査区から灰軸陶器が出土しているため、調査地周辺が平安時代の遺跡であることは確認できた。しかし、土坑1基を確認したに過ぎず、旧海岸寺との関係は不明である。

B区から見つかった内耳鍋を伴う竪穴状遺構は、桐原城址の東区堅堀に近接するとともに、中世の旧海岸寺へ向かう途上に位置しており、桐原城・海岸寺と同時代に存在した遺構である。内耳鍋がまとまって出土していることから、周辺に調理施設が存在していた可能性が高い。

### 3 『桐原古図(写)』・『桐原城古図』

松本市立博物館には、桐原城を描いた『桐原古図(写)』と『桐原城古図』の絵図が収蔵されている。両図には桐原城、追倉沢・海岸寺沢に加えて、現在の柴宮神社・天満宮に相当する「八幡(宮)」、「天神」等が表現されている。

**桐原古図(写)** (写真図版33・34) 『信濃史料』第18巻(350-351頁)に掲載された「南安曇郡穂高町 寺嶋今朝一氏所蔵」の絵図を写したものとみられる、27.8×40.2cmの小絵図である。左上に「慶長四年己亥六月三日」と記載され、桐原城(桐之原大藏殿城)と桐原村を中心に、現在の里山辺上金井付近まで描かれている。図中の「上金井村」は寛永6(1629)年に里山辺村が分村してできた村であり、慶長4(1599)年とは符合しない。本図は少なくとも17世紀前半以降に作成された絵図と考えられる。

**桐原城古図** (写真図版29-32) 金井圓氏が松本市立博物館に寄贈したもののだが、絵図の来歴は不明である。102×139cmの大絵図で、現在は軸装されている。本図は桐原城の郭・堀切・堅堀が詳細に描かれているほか、御くら沢(追倉沢)・海岸寺沢・海岸寺の名前が記されている。また、『桐原城古図』に描かれた人穴1号古墳の横穴式石室、蓮法寺の石積みは現在も確認できる遺構である。本図の特徴は、これらを結ぶ村内の道の多くが、現在の地図上の道と対応していることである(第5図)。

この2つの絵図から読み取れる桐原城の諸問題について述べることにする。

**桐原氏居館の位置** 『桐原城古図』では、桐原城に特徴的な郭背後の法面や主郭の土塁に構築された石積みが独特のタッチで表現されている。そして、絵図の八幡宮の南東には、この石積み表現を用いた方形区画の「御屋鋪」が描かれている。この場所は現在も「オヤシキ」と呼ばれており、桐原氏の居館があった場所と推定される。方形区画の東辺北端と南辺中央は開口しており、南辺にはさらに小形の方形区画が接続している。絵図では道に接する小形方形区画の西辺が開口しており、ここが居館の入口と考えられよう。

なお、海岸寺沢の東側にも方形区画の「御屋敷」が描かれている。桐原城を描いた絵図には別の1枚が知られているが(文献2:1100頁)、その絵図では「連歌屋敷」とされている。

**堅堀の配置** 『桐原城古図』では城の南側斜面、蓮法寺と海岸寺沢の間に3本の堅堀が描かれている。調査当初は、宮坂武男氏の縄張り図にある2本の堅堀を西・東区の堅堀として調査を行った。その後、発掘調査に併行して現場周辺の踏査を行ったところ、東区堅堀の東側で新たな堅堀を確認することができた。この堅堀は下端が海岸寺沢近くまで達しており、『桐原城古図』の南側3本のうち東端の堅堀に相当すると推定される。また、この堅堀から海岸寺沢に平行しながら上方に向かうと、さらに4本の堅堀を確認することができた。このことから、桐原城の海岸寺沢側の堅堀は、東区堅堀を含めて6本以上が存在することになる。

三島・宮坂氏の縄張り図では、海岸寺沢側の斜面にこれらの堅堀は一部しか描かれていない。両氏とも海岸寺沢側には比高差がある急斜面のため堅堀の掘り下げは少ないとしているが、本調査で海岸寺沢側にも堅堀が確認されたことにより、桐原城の防御の構えについては再検討が必要になったといえる。『桐原城古図』

では、堀切から追倉沢側・海岸寺沢側の両斜面に伸びる左右対称の堅堀が4、5本描かれている。実際の桐原城は、西区・東区堅堀を含む3本の堅堀が後述する桐原氏居館の背後に位置し、その上方から主郭へ向かう尾根筋では、堀切から両方の沢に向かって左右対称に堅堀が配置されていた可能性が高い。今回確認した5本の堅堀は図示していないが、今後予定されている桐原城址の全体測量で明らかにされるものである。

#### 4 近世史料

桐原城址に関連する2つの近世文書がある。享保3(1718)年4月1日付の「桐原村等大蔵山山論裁許状写」(文獻4:423-424頁)は、桐原村と薄町・兎川寺・上金井・荒町村の間で発生した大蔵山(大倉山)山論に際して、双方に申し渡された裁許状である。ここには桐原村が申立てた中に「此城二為要害四ヶ所に番所を居、其上大蔵沢之水以之城中之用水に用之候堰三筋共ニ其形今以儘有之」とあり、双方の立合いで大蔵山を検分した松本藩の役人は「城山之三方を取廻し惣方ハ霜鏡取出桐原之持分後横手ニハ土手堀切等有之要害四ヶ所可有之場所と相見江候」と記している。また、文中には「本城堀切」、「鐘掛ヶ番所」、「藤塚土手堀切」、「狼煙場」などの山城に係する名称が散見している。

『桐原城古図』には、武石道沿いに「富塚」、「番所」、「大坂番所」、「桐原屋番所」、「鐘掛番所」、3本の「城之用水」が描かれており、裁許状写の記載内容との重複が注目される。また、『桐原古図(写)』には番所に相当する場所に堀切が表現がされているほか、4箇所の番所間に「境掘り切り」・「境掘り上」の文字と記号が10数箇所もあり、武石道の番所に堀切と土塁状の防御施設が表現されている。絵図に描かれたこうした番所や堀切・土塁状構造物が実在するのであれば、これらは一般の通行を制限した番所というよりも、敵の侵攻に備えた桐原城に附属する防御施設と考える方が妥当と考えられよう。

なお、私的な調査であるが、『桐原城古図』の富塚(『桐原古図(写)』では「ふじつか」と)、北側の「番所」については、相当する場所に6基の塚と堀切が現存することを確認している。今後は2枚の絵図に描かれた番所等の遺構確認調査が必要になると思われる。

また、同年4月3日の「東・西桐原村大蔵山起請文」(文獻4:424-425頁)は、大蔵山山論の解決に伴う起請文前書である。文中に「絵図代」の記載があり、山論に際して桐原城がある大蔵山周辺を絵師に描かせていたことがうかがえる。『桐原城古図』には前述したように山論裁許状写の記載に対応する番所や城への用水等が記載されていることから、この絵図が大蔵山山論に際して作成された可能性も考えられる。

#### 5 まとめ

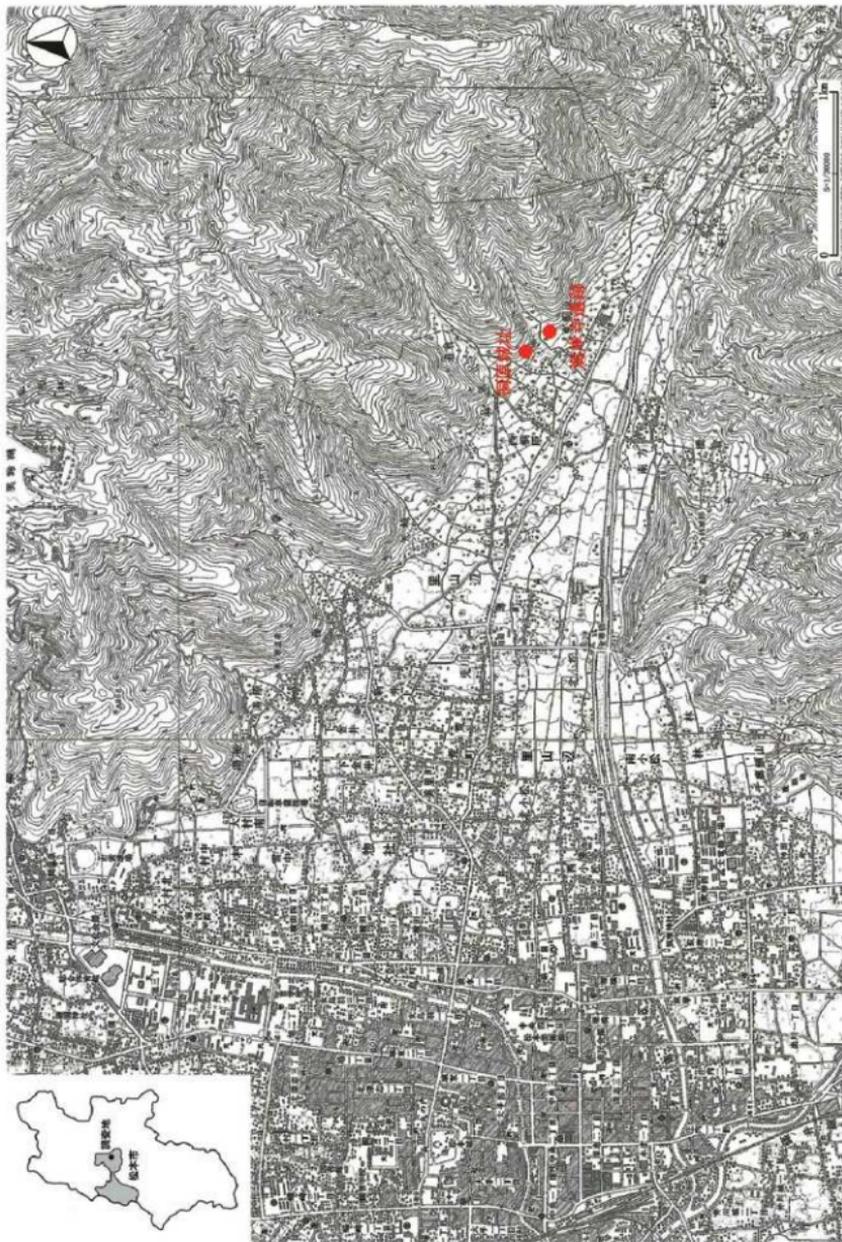
海岸寺遺跡から平安時代と中世の遺構が確認できたことにより、桐原地区の平安時代以降の開発の一端を捉えることができた。桐原城址では南側2本の堅堀末端部を調査した。堅堀の構築時期は確認できなかったが、現状の地形観察では捉えられなかった堅堀の構造(S字状堅堀・堀底の段差等)を明らかにすることができた。石堤は、東区堅堀の下端にまで及んだ海岸寺沢の洪水を契機に、近世に川除普請で構築された堤防と推定した。石堤の表法・裏法の石積みの違いや、裏法の堤防幅から、近世以降の治水・土木技術の実態・変遷を捉えることができたものと考えられる。しかし、今回は調査面積も限られ、発掘調査で遺跡全体の構造や性格にまで言及することはできなかった。今後は発掘調査で得られた考古資料だけでなく、桐原地区に関係する絵図や文書史料を含めた、総合的な地域史研究の展開が望まれる。

#### 文 献

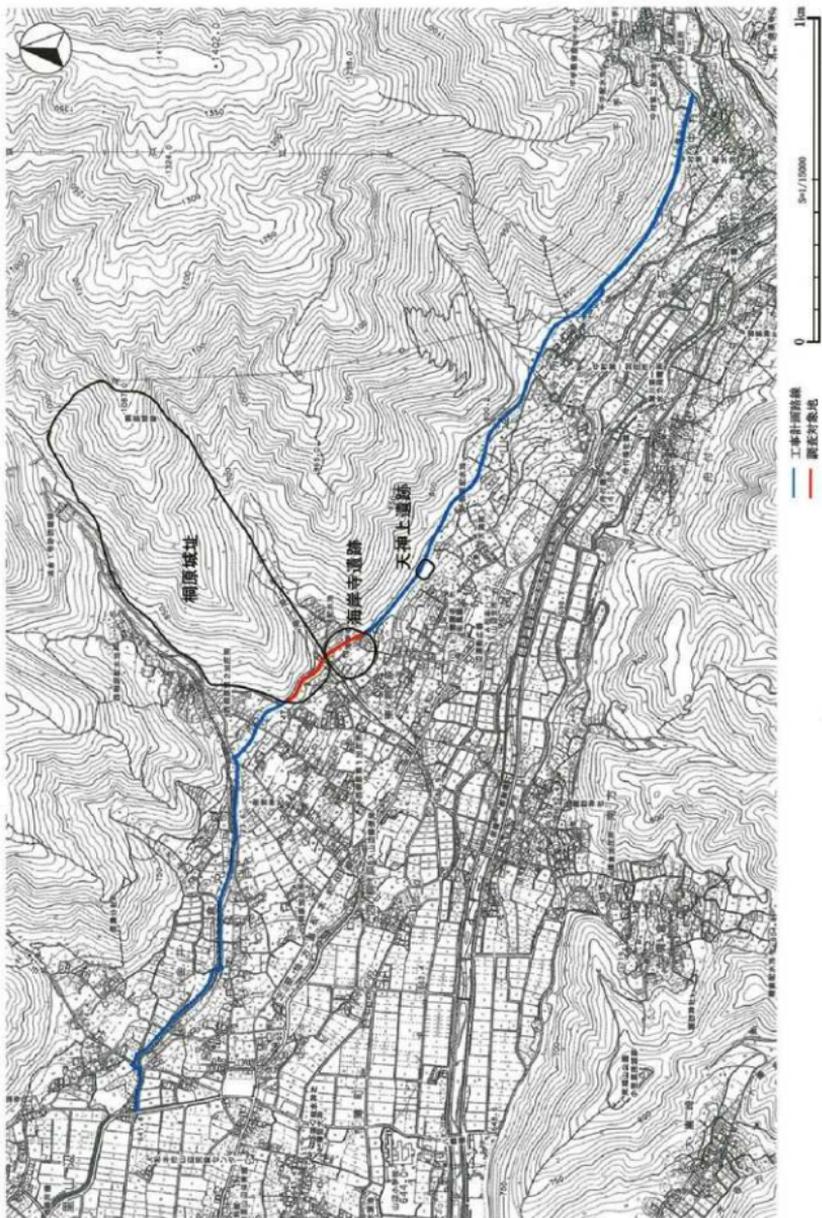
- 1 信濃史料刊行会 1962『信濃史料』第18巻
- 2 東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第2巻 歴史上
- 3 信濃史料刊行会 1973『信濃統記 下』『新編 信濃史料叢書』第6巻
- 4 松本市 1984『松本市史』第4巻 山形町村編IV
- 5 三島正之 1988『小笠原領域の山城と武田氏』『中世城郭研究』第2号
- 6 宮坂武男 1998『図解 山城探訪 松塩筑資料編』
- 7 宮坂武男 2008『図解 山城探訪 第5集 改訂松塩筑資料編』

# 圖 版

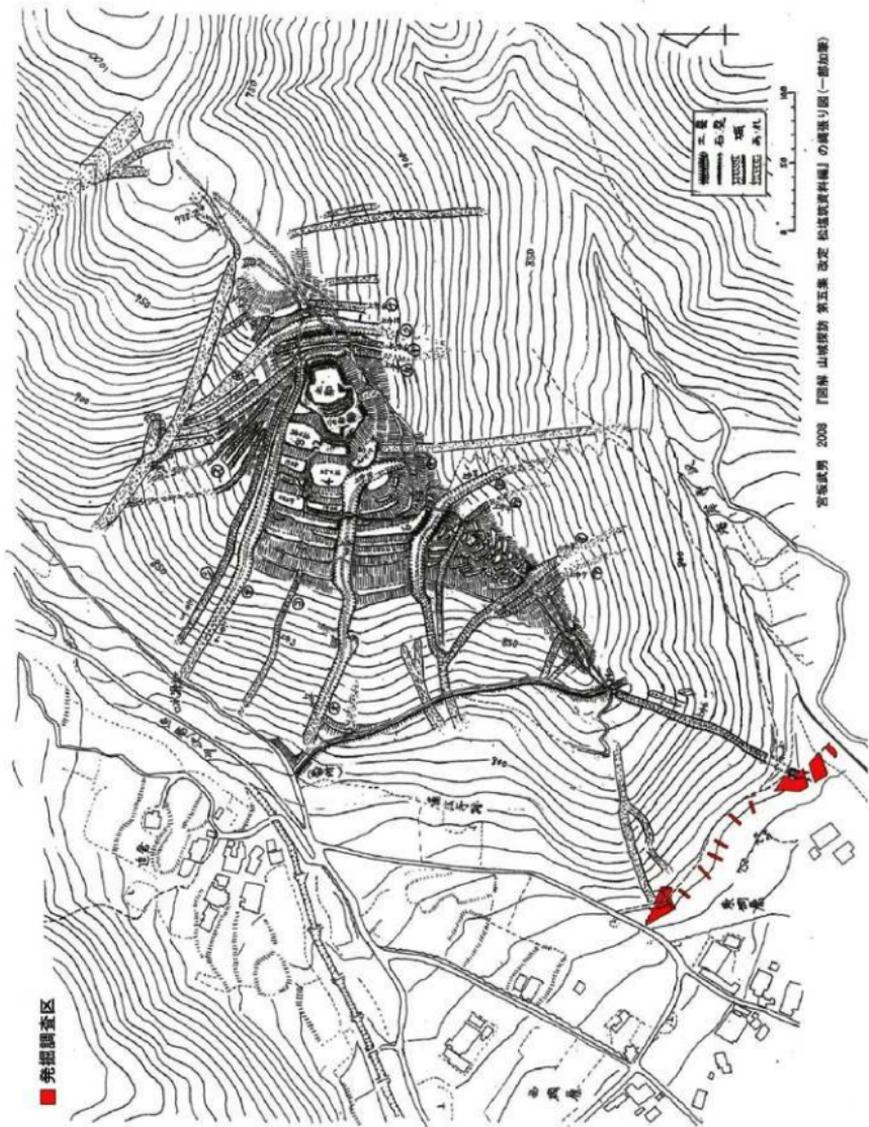
---



第1図 調査地の位置



第2図 工事計画路線・調査対象地



■ 発掘調査区

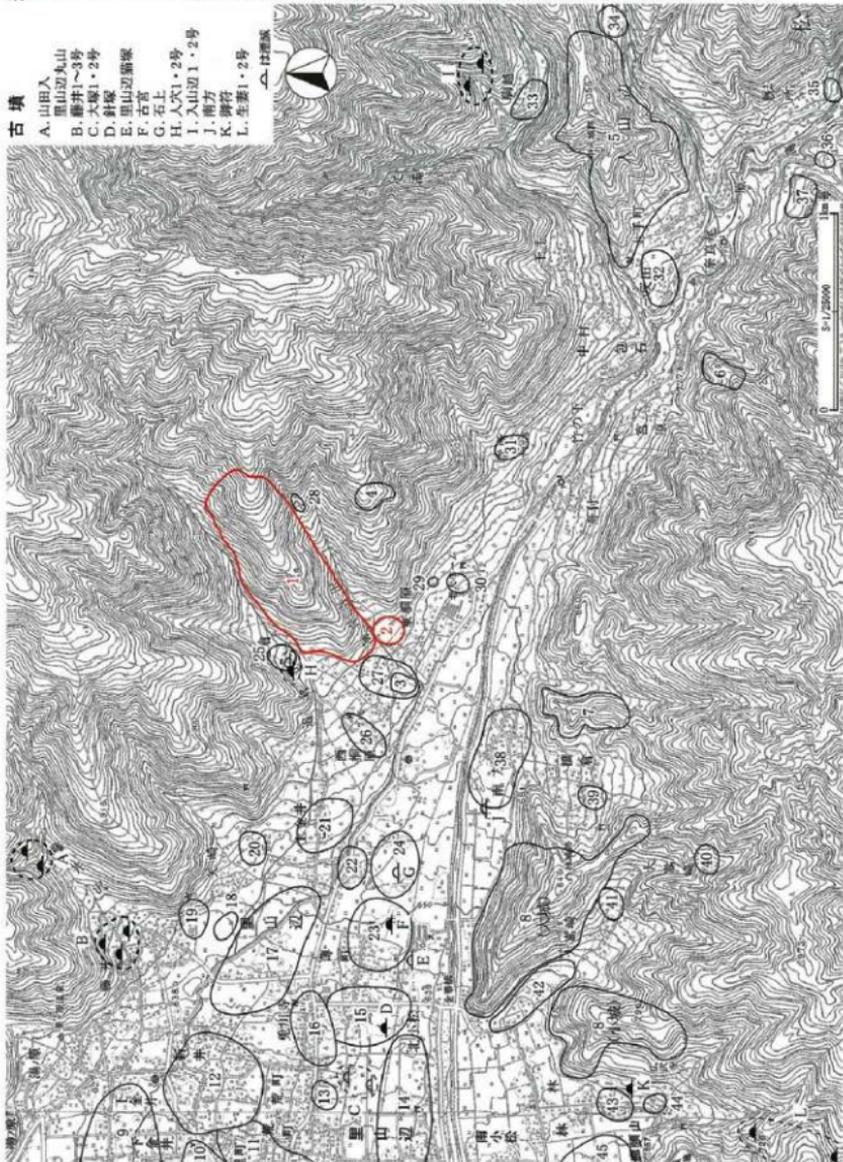
第3図 桐原城址 縄張り図と調査位置

遺跡・城館址

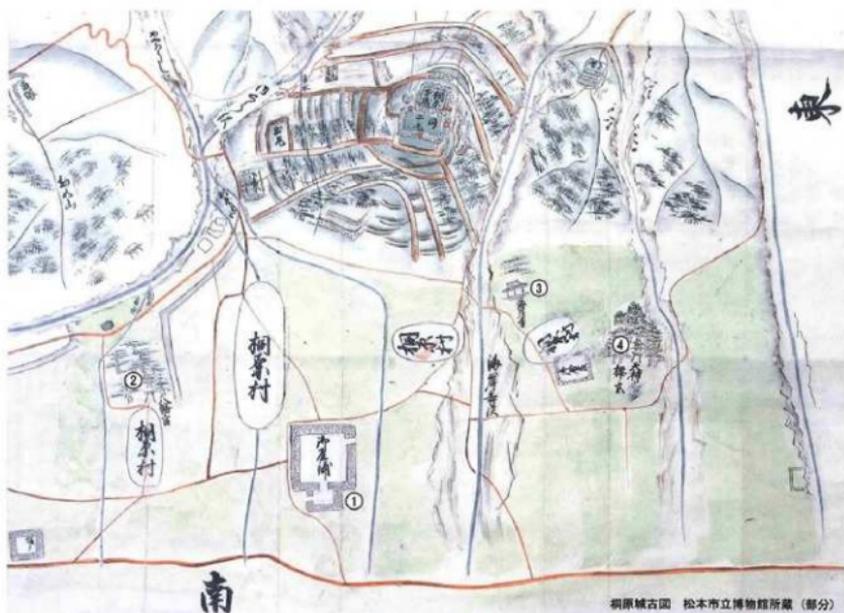
1. 柳原城址
2. 柳津寺
3. 柳原氏祖跡
4. 彌隆神社
5. 中入神社
6. 宮原神社
7. 水巻神社
8. 林神社
9. 柳社
10. 宮北
11. 下原
12. 新井
13. 新町
14. 北小松
15. 針堂
16. 荒川寺
17. 道の内
18. 藤井
19. 藤井山田
20. 上釜井天崎
21. 上釜井
22. 里山辺藤田
23. 神町
24. 石上
25. 追分
26. 西科原
27. 東科原
28. 海舟寺跡
29. 天神上
30. 天神街道
31. 寺所
32. 中人
33. 駒越
34. 石住
35. 厨所
36. 一ノ海
37. 入山辺南方
38. 入山辺南方
39. 鎌倉
40. わび沢
41. 大瀬崎
42. 林山園
43. 柳符
44. 林
45. 千鹿頭北

古墳

- A. 山田入
- B. 里山辺丸山
- C. 藤井1・3号
- D. 大塚1・2号
- E. 里山辺藤原
- F. 古草
- G. 石上
- H. 入山辺1・2号
- I. 入山辺1・2号
- J. 南方
- K. 柳符
- L. 笠巻1・2号



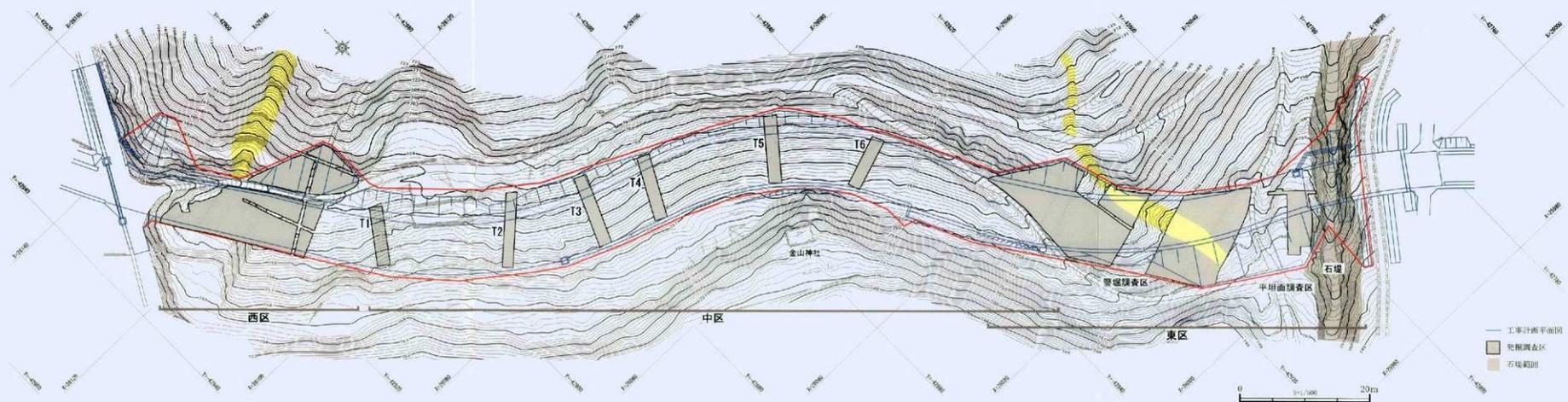
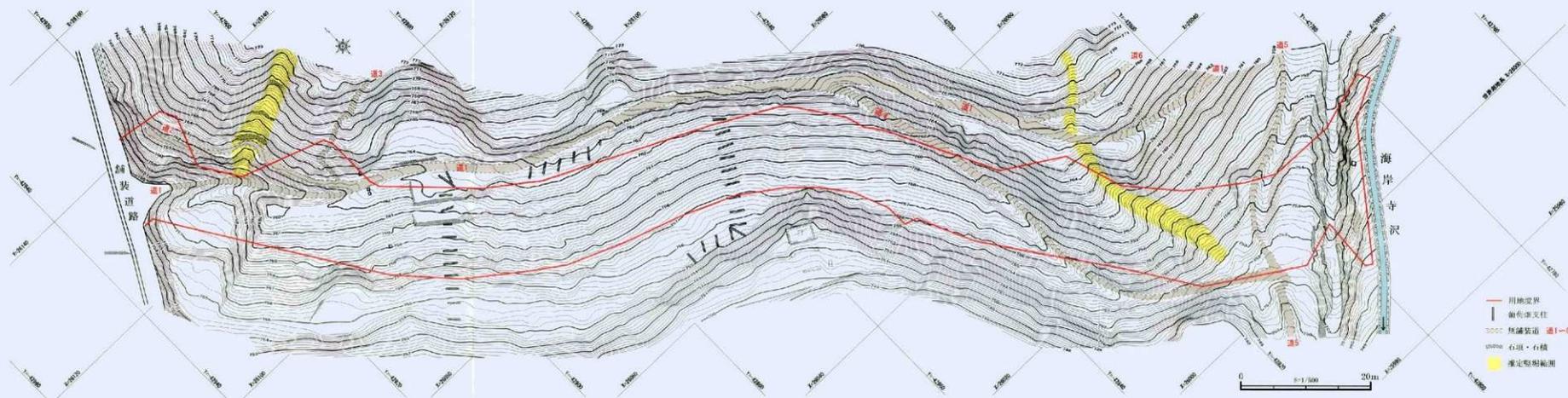
第4図 周辺遺跡



桐原城古図 松本市立博物館所蔵（部分）



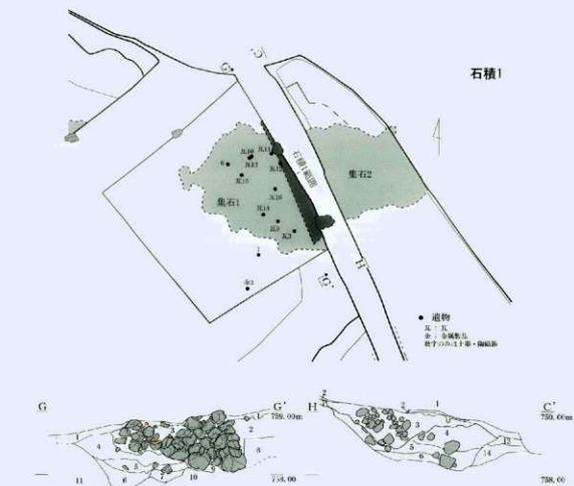
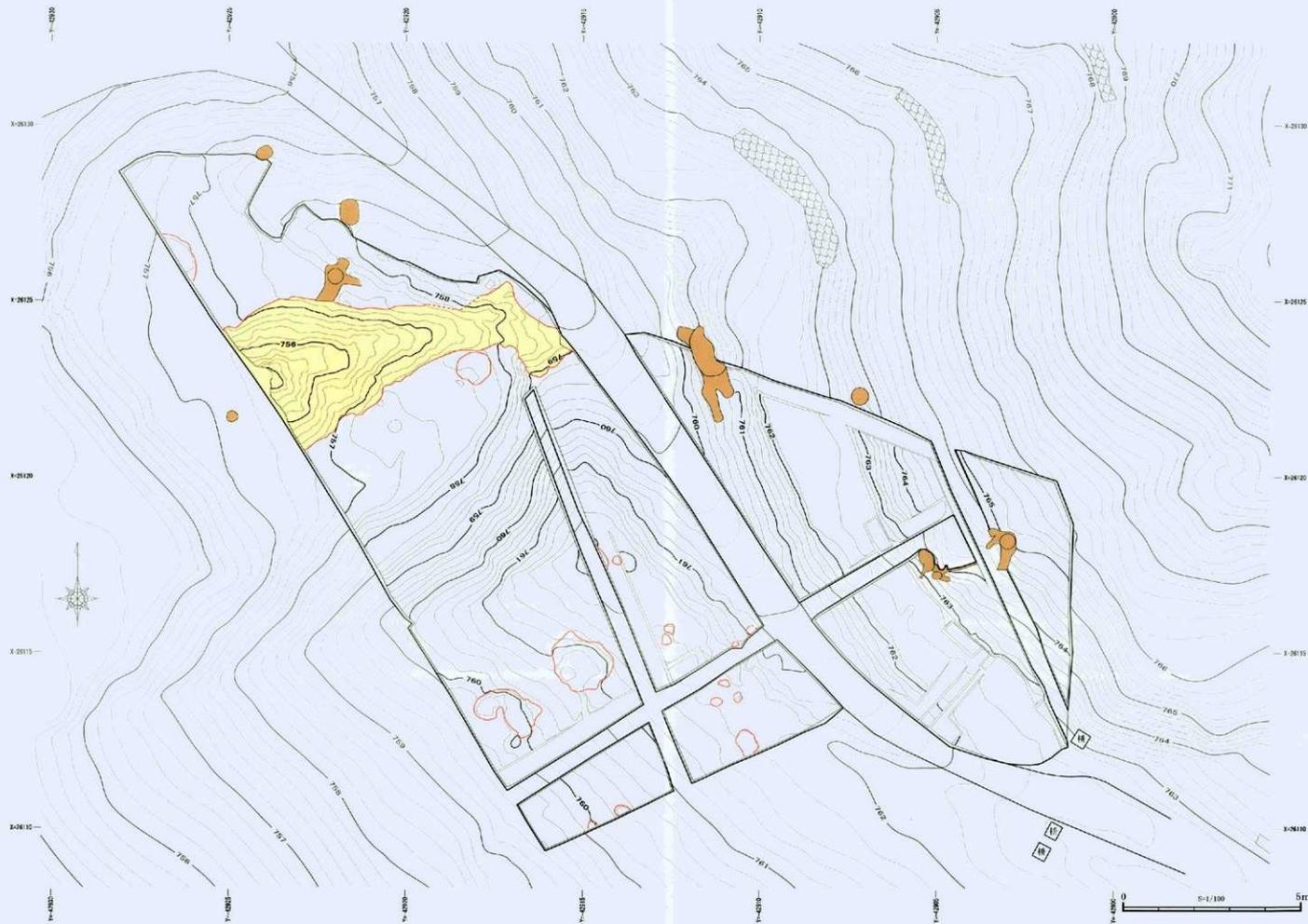
第5図 桐原氏館跡



第6図 桐原城址 調査前地形測量図(上) 工事計画・調査区配置図(F) - 45 -



- 46 - 第7図 桐原城址 西区 遺構配置図-近・現代- (左) 遺構配置図-発掘- (右)



石積1

- 1 土5~10cm厚の100%砂質土 (植物根多し、しまりなし)
- 2 明黄褐色100%砂質土 (φ2mm礫1%含む、しまりなし)
- 3 明黄褐色100%砂質土 (φ2mm礫1%含む、2層土の色調や中層、しまりなし)
- 4 黄褐色100%砂質土 (φ5mm礫1%含む、しまり)
- 5 褐色100%砂質土 (φ5mm礫1%含む、φ10mm礫1%含む、しまり)
- 6 褐色100%砂質土 (φ10mm礫1%含む、しまり)
- 7 褐色100%砂質土 (φ2mm礫1%含む、堅くしまり)
- 8 明黄褐色砂質土 (部分的に土性あり)
- 9 明黄褐色砂質土 (部分的に土性あり)
- 10 明黄褐色砂質土 (部分的に土性あり)
- 11 明黄褐色砂質土 (10層以上含む)

集石2

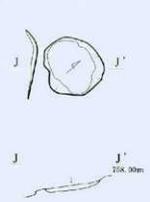
- 1 黄褐色100%砂質土 (堅くしまり)
- 2 明黄褐色100%砂質土 (緩急なし)
- 3 明黄褐色100%砂質土 (緩急なし)
- 4 黄褐色100%砂質土 (φ2~5mm礫化同層砂質土を含む、しまり)
- 5 黄褐色100%砂質土 (φ2~5mm礫化同層砂質土を含む、しまり)
- 6 黄褐色100%砂質土 (φ2~5mm礫化同層砂質土を含む、しまり)
- 7 褐色100%砂質土 (φ2mm礫1%含む)
- 8 明黄褐色砂質土 (土性あり)
- 9 明黄褐色砂質土 (土性あり)
- 10 明黄褐色砂質土 (土性あり)

土坑13



- 1 土5~10cm厚の100%砂質土 (φ5mm礫化物1%含む、しまりなし)
- 2 褐色100%砂質土 (礫化同層砂質土)
- 3 黄褐色100%砂質土 (7層のブロック、しまり)
- 4 明黄褐色100%砂質土 (緩急なし)
- 5 褐色100%砂質土 (緩急なし)
- 6 褐色100%砂質土 (緩急なし)
- 7 黄褐色100%砂質土 (中層砂質土あり)
- 8 明黄褐色100%砂質土 (部分的に土性あり)

土坑14



- 1 黄褐色100%砂質土 (φ2~5mm礫1%、φ2mm礫化物1%含む)

凡例

- 柱礎石
- 土・根
- 礎
- 遺構





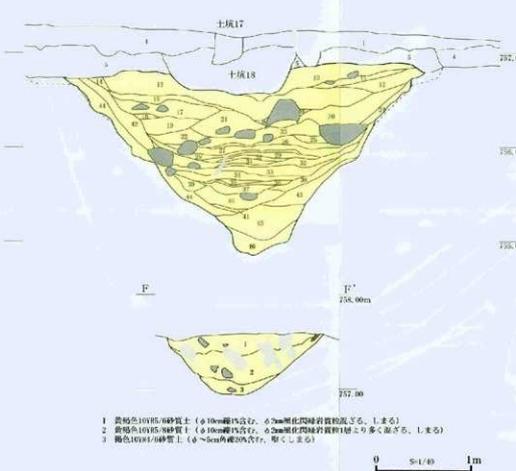
**トレンチ8**

- 1 褐色10YR4/4砂質土 (腐植体多い、ややしまる)
  - 2 褐色10YR4/4砂質土 (腐植体多い、ややしまる)
  - 3 褐色10YR4/4砂質土 (しまりなし)
  - 4 濃い黄褐色10YR4/2砂質土 (0.5mm風化物質、ややしまる)
  - 5 濃い黄褐色10YR4/2砂質土 (0.5mm風化物質、ややしまる)
  - 6 黄褐色10YR4/4砂質土 (0.2mm風化物質が多少多く含む)
  - 7 褐色10YR4/4砂質土 (腐植体多い、0.1mm風化物質が多少多く含む、しまりなし)
  - 8 褐色10YR4/4砂質土 (腐植体多い)
  - 9 褐色10YR4/4砂質土 (腐植体多い、しまりなし、人工土層(溝壁一面))
  - 10 褐色10YR4/4砂質土 (腐植体多い、しまりなし)
  - 47 黄褐色10YR6/4砂質土 (部分的に粘りあり、人工土層(溝壁一面))
  - 48 風化腐植体層 (土の付着)
  - 49 風化腐植体層
- 土坑15**
- 1 褐色10YR4/4砂質土(しまりなし)
- 土坑17**
- 1 黄褐色10YR6/4砂質土(しまりなし)
- 土坑18**
- 1 褐色10YR4/4砂質土(ブロックと黄褐色10YR6/4砂質土(ブロック)をほぼ均等に含む (0.5mm風化物質、0.1mm風化物質を含む))

**竖堀完掘状況**



**竖堀土層**



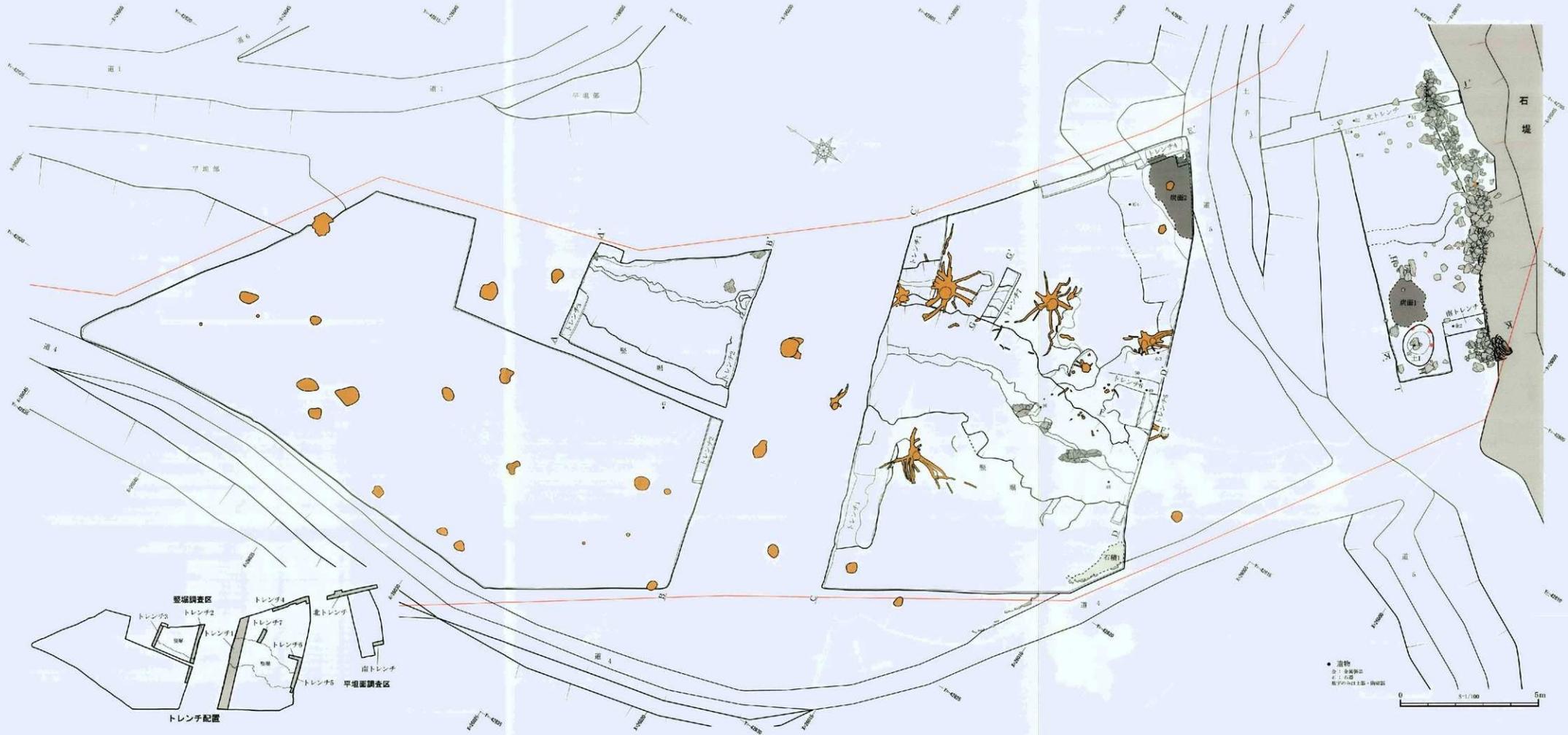
**平坦面造成土**

- 1 褐色10YR4/4砂質土 (腐植体多い、ややしまる)
- 4 濃い黄褐色10YR4/2砂質土 (0.5mm風化物質、ややしまる)
- 5 濃い黄褐色10YR4/2砂質土 (0.5mm風化物質が多少多く含む、ややしまる)

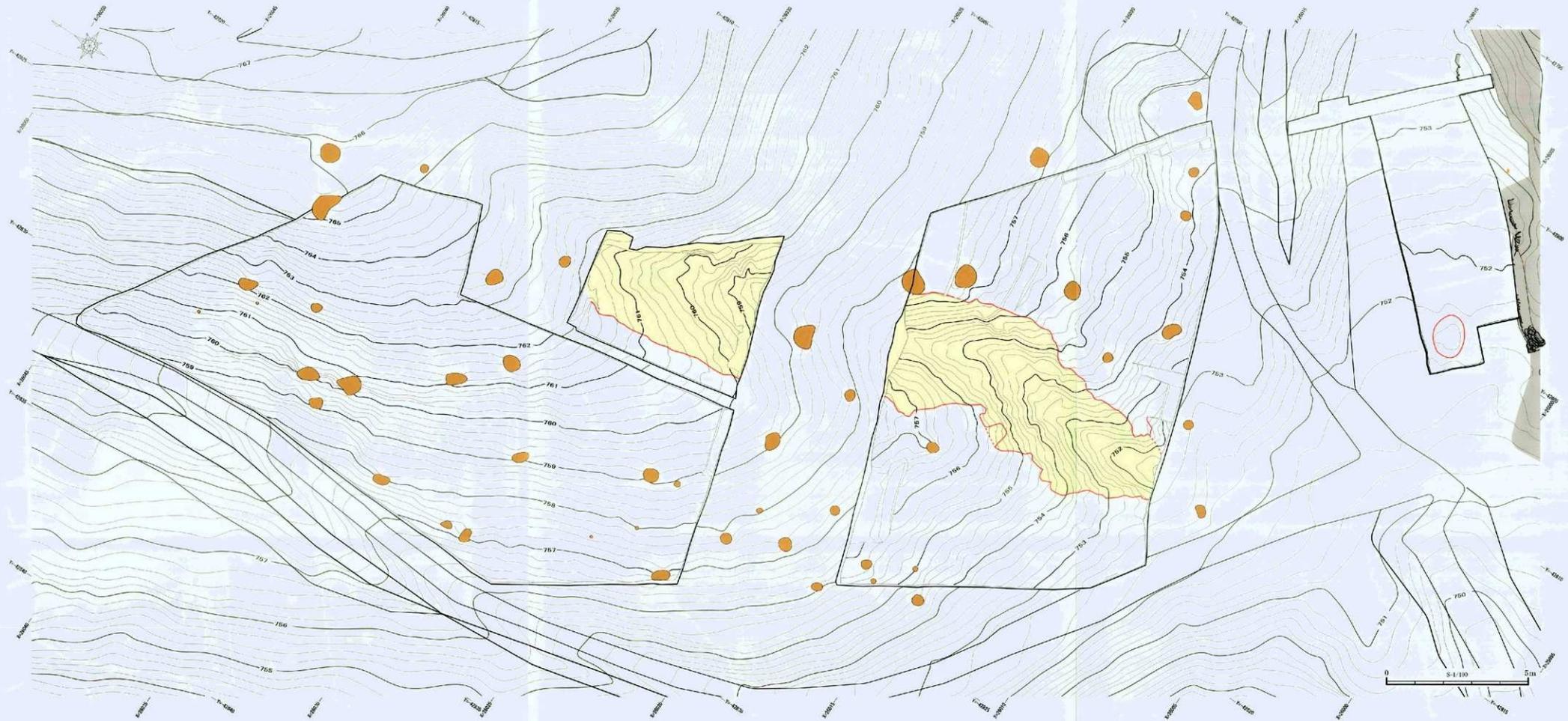
**竪堀**

- 16 黄褐色10YR6/4砂質土 (0.1mm風化物質、腐植体多く含む、しまりなし)
- 11 黄褐色10YR6/4砂質土 (0.5mm風化物質) (0.5mmより粗砂質)
- 12 砂礫層 (0.2~10mm径、1.5~2.0mm内径、粗砂質、腐植体多量10YR6/4砂質土が埋める)
- 14 黄褐色10YR6/4砂質土 (0.5mm黄褐色10YR6/4砂質土(ブロック)を含む、しまりなし)
- 15 黄褐色10YR6/4砂質土 (0.5mm風化物質を含む、しまりなし)
- 16 褐色10YR4/4砂質土(しまりなし)
- 17 砂礫層 (0.2~20mm径、粗砂質、埋める黄褐色10YR6/4砂質土が埋める)
- 18 黄褐色10YR6/4砂質土 (しまりなし)
- 19 砂礫層 (0.2~20mm径、粗砂質、埋める黄褐色10YR6/4砂質土が埋める)
- 20 黄褐色10YR6/4砂質土 (粗砂質を含む、埋める黄褐色10YR6/4砂質土が埋める)
- 21 砂礫層 (0.2~20mm径、粗砂質、埋める黄褐色10YR6/4砂質土が埋める)
- 22 黄褐色10YR6/4砂質土 (0.1~10mm径、0.5~0.8mm風化物質、粗砂質)
- 23 砂礫層 (0.2~20mm径、粗砂質、埋める黄褐色10YR6/4砂質土が埋める)
- 24 黄褐色10YR6/4砂質土 (風化腐植体が多量を含む)
- 25 褐色10YR4/4砂質土 (0.5mm風化物質を含む)
- 26 黄褐色10YR6/4砂質土 (やや粘りあり、0.2.5mm風化物質、粗砂質を含む)
- 27 黄褐色10YR6/4砂質土 (20mmより粗砂質、砂質土、0.2.5mm風化物質を含む)
- 28 黄褐色10YR6/4砂質土 (20mm径)
- 29 黄褐色10YR6/4砂質土 (20mm径、27層との層厚不連続)
- 30 黄褐色10YR6/4砂質土 (20mm径、27層との層厚不連続)
- 31 黄褐色10YR6/4砂質土 (27mm径、0.1mm風化物質を含む)
- 32 黄褐色10YR6/4砂質土 (28mm径、28層との層厚不連続)
- 33 黄褐色10YR6/4砂質土 (27mm径、31層との層厚不連続)
- 34 黄褐色10YR6/4砂質土 (28mm径、28層との層厚不連続)
- 35 黄褐色10YR6/4砂質土 (27mm径)
- 36 黄褐色10YR6/4砂質土 (28mm径、34層との層厚不連続)
- 37 黄褐色10YR6/4砂質土 (27mm径、28層との層厚不連続)
- 38 黄褐色10YR6/4砂質土 (28mm径、28層との層厚不連続)
- 39 黄褐色10YR6/4砂質土 (0.1mm風化物質を含む)
- 40 砂礫層 (0.2~20mm径、1.5~2.0mm内径、埋める黄褐色10YR6/4砂質土と粗砂質が埋める)
- 41 黄褐色10YR6/4砂質土 (やや粘りあり、0.5mm風化物質10YR6/4砂質土(ブロック)を含む)
- 42 黄褐色10YR6/4砂質土 (風化腐植体が多量を含む)
- 43 黄褐色10YR6/4砂質土 (風化腐植体が多量を含む)
- 44 黄褐色10YR6/4砂質土 (0.1mm風化物質を含む)
- 45 砂礫層 (0.1~10mm径、0.5~5mm内径、埋める黄褐色10YR6/4砂質土と粗砂質が埋める、砂礫との間に0.5mm径が多い)
- 46 砂礫層 (0.1~10mm径、0.5~5mm内径、埋める黄褐色10YR6/4砂質土と粗砂質が埋める、砂礫と大きな径の粗砂が多い)

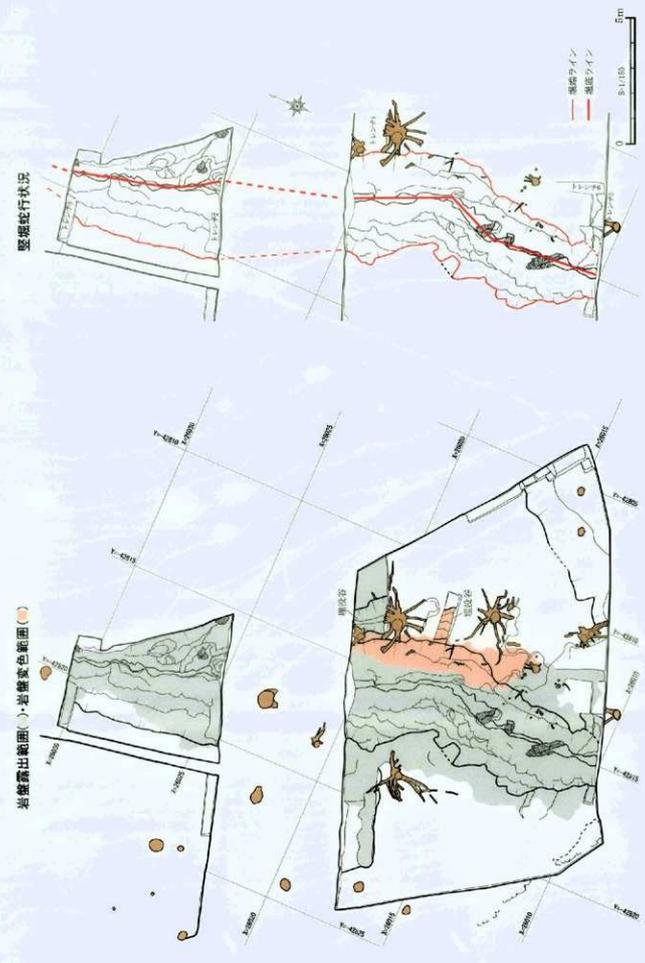
- 1 黄褐色10YR6/4砂質土 (0.1mm風化物質、0.5mm風化腐植体が多量を含む、しまりなし)
- 2 黄褐色10YR6/4砂質土 (0.1mm風化物質、0.5mm風化腐植体が多量を含む、しまりなし)
- 3 黄褐色10YR6/4砂質土 (0.5mm風化物質を含む、粗砂質を含む)



- 50 - 第11図 橿原城址 東区 遺構配置図



第12图 桐原城址 东区 完掘地形测量图 - 51 -

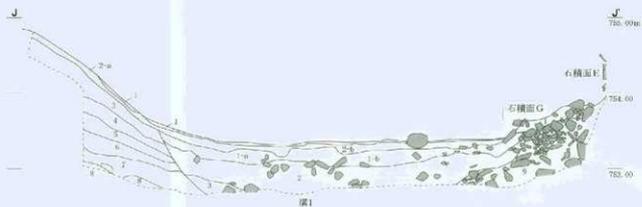
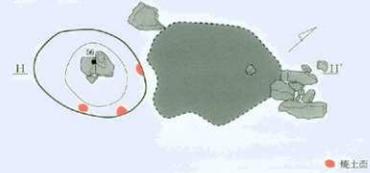


埋蔵コトバシ

埋蔵クワシ



土坑1 炭面1



北トレンチ

- 1 黄褐色10YR5/3腐葉土層 (砂混入)
- 2 黄褐色10YR4/6砂質土 (腐葉土混入)
- 3 黄褐色10YR5/3砂質土 (中砂混入あり、中砂はまる)
- 4 黄褐色10YR4/6土質土 (細小礫を含む、まる)
- 5 黄褐色10YR5/3砂質土 (40%中砂に含む、中砂はまるなし)
- 6 黄褐色10YR5/3シルト質土 (粘質あり、細小礫と一層の石灰土層を含む)
- 7 黄褐色10YR5/3シルト質土 (粘質あり、中砂を混入)、黄褐色10YR5/3シルトブロックを含む)
- 8 黄褐色10YR5/3シルト質土
- 9 黄褐色10YR4/7シルト質土 (準大へ人間大礫多量に含む)

溝1

- 1 黄褐色10YR5/4ローム混入りの砂質土 (40~50%礫多量に含む)
- 1-b 黄褐色10YR5/4ローム混入りの砂質土 (40~50%礫多量に含む)
- 2 黄褐色10YR4/7ローム混入りの砂質土 (40~50%礫多量に含む、大型の角礫を含む)
- 3 黄褐色10YR5/3シルト質土 (中砂粘質性あり)

石積面G

- 1 黄褐色10YR5/3腐葉土層 (礫多量に含む、黄粘め)

南トレンチ

- 1 黄褐色10YR5/3砂質土 (細小礫を含む、腐葉土がのる)
- 2 黄褐色10YR4/6シルト質土 (小礫を含む、腐葉土混入)
- 3 棕色・黄褐色10YR4/3粘質砂 (細小礫を含む)
- 4 棕色・黄褐色10YR4/3粘質土と黄褐色10YR5/3粘質砂〜細小の砂粒の割合 (ローム含む、準大へ人間の礫を多く含む、北トレンチ層に対応)

溝1

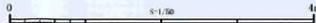
- 1-b 黄褐色10YR5/3粘質土 (ローム含む、角礫大礫を含む)
- 2 棕色・黄褐色10YR4/3粘質土 (ローム含む、準大礫を含む)

土坑1

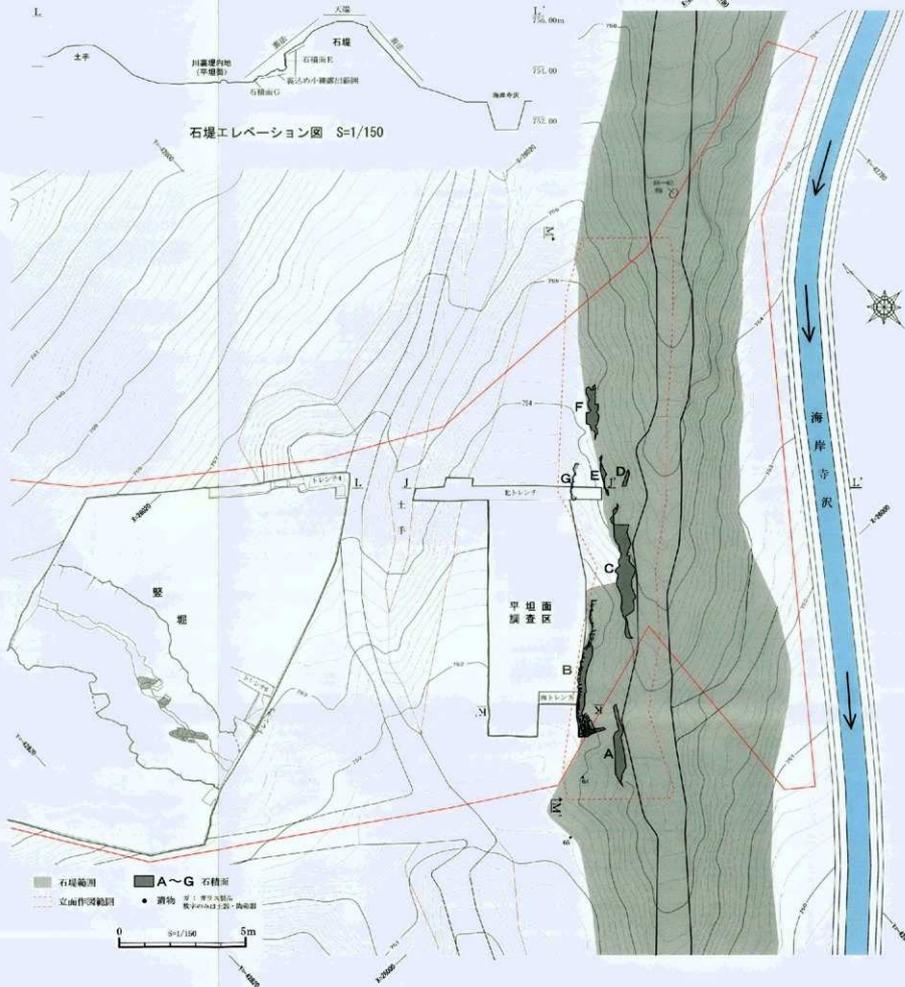
- 1 黄褐色10YR5/3シルト質土 (粘質あり、中礫を含む)

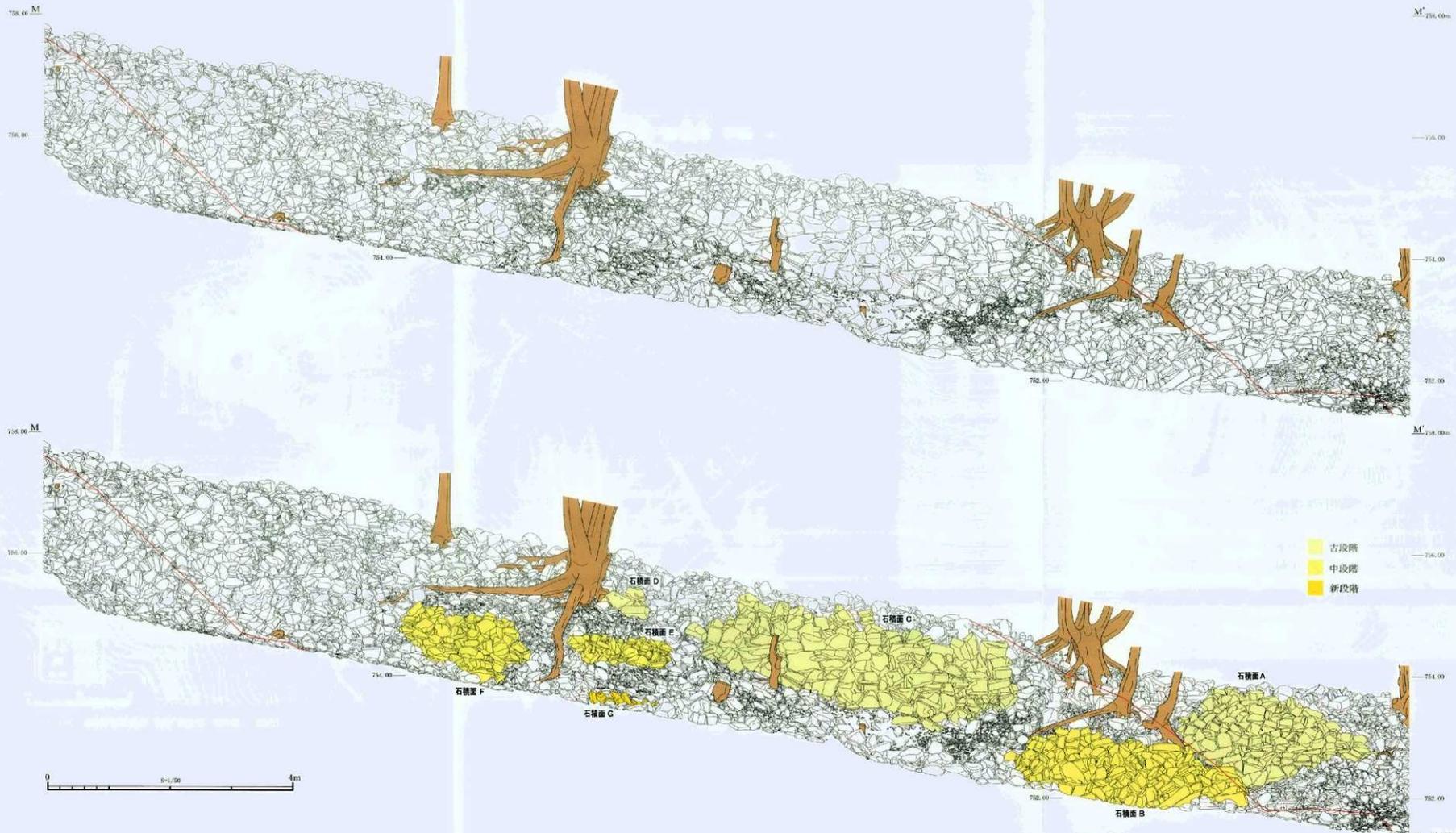
西壁

- 1 黄褐色10YR5/3砂質土 (細小礫を含む、土層に腐葉土混入)
- 2 黄褐色10YR4/6シルト質土 (粘質あり、腐葉土混入)

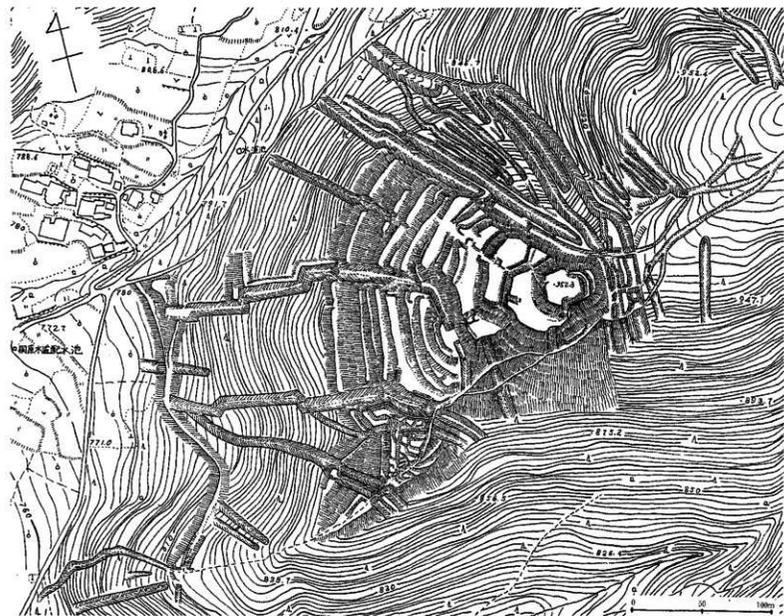


石堤エレベーション図 S=1/150



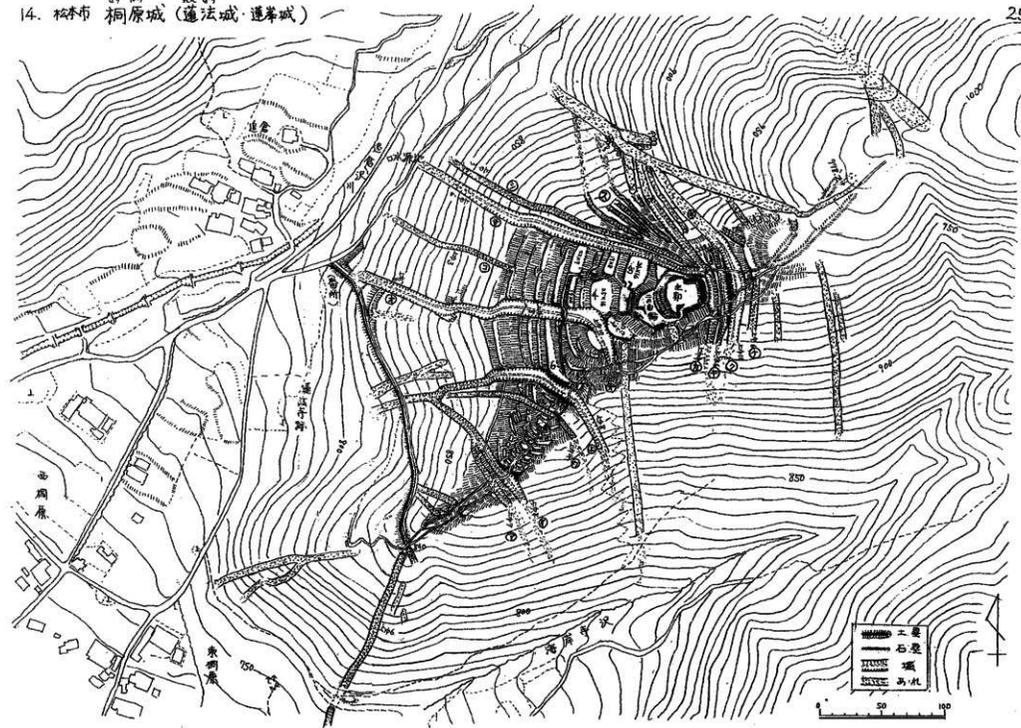


第16图 东区 石堤 裏法立面图 - 55 -

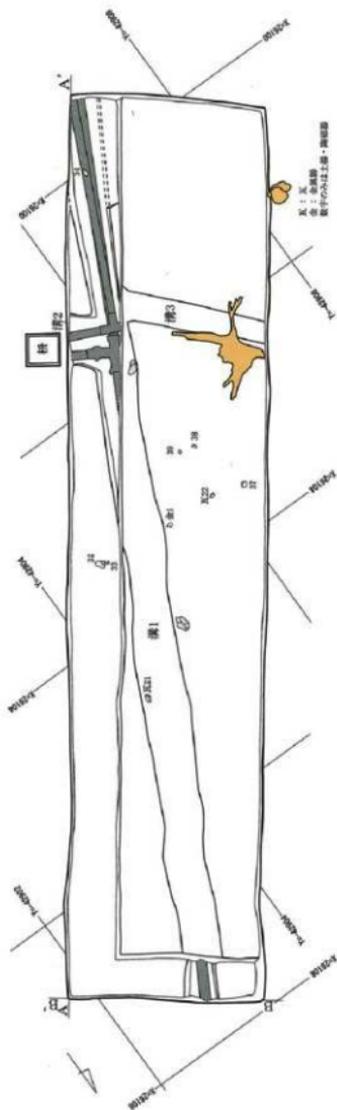


『松本市史 第二卷歴史編・原始・古代・中世』1996 (三島正之氏作図)

14. 松本市 桐原城 (蓮法城・蓮峯武)

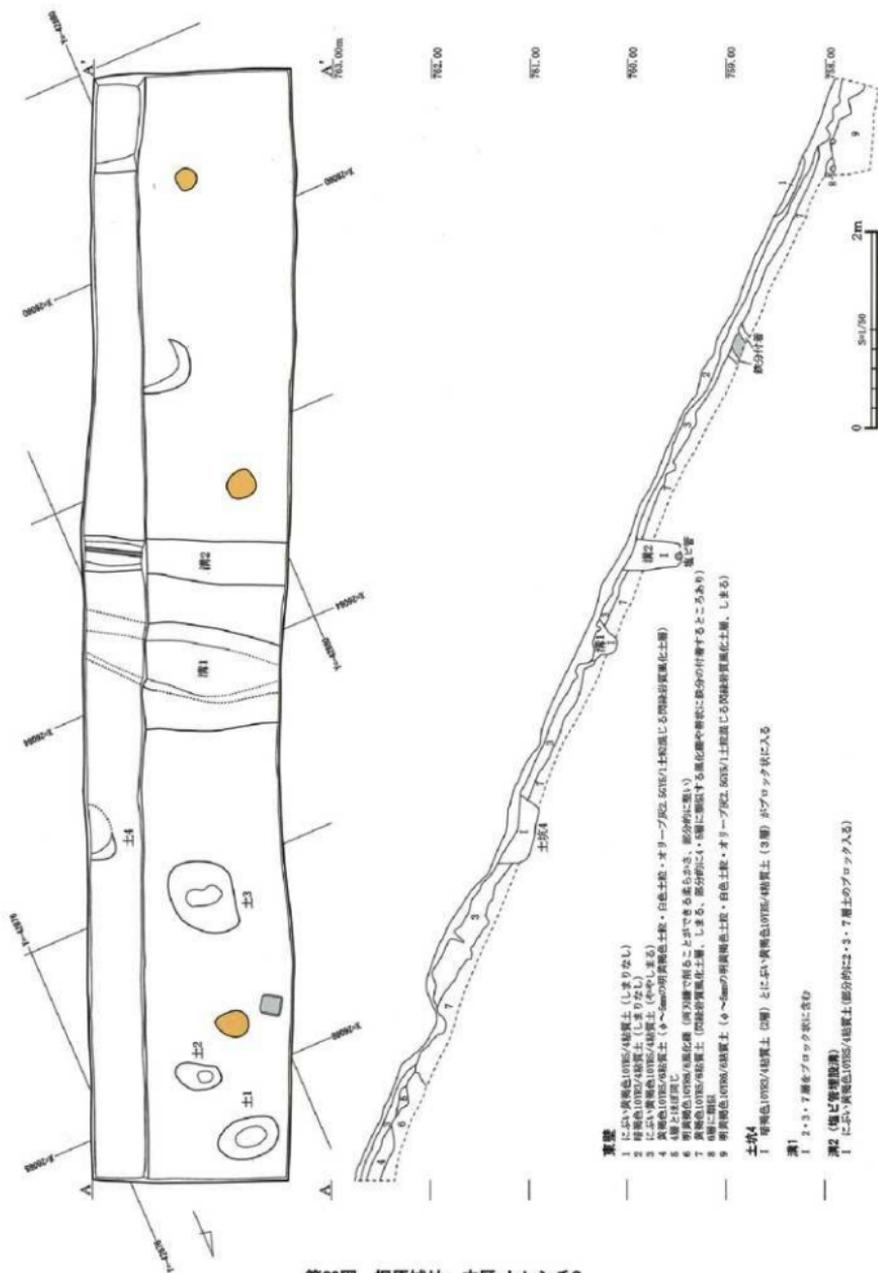


『図解 山城探訪 第五集 改定 松地筑資料編』2008 宮坂武男

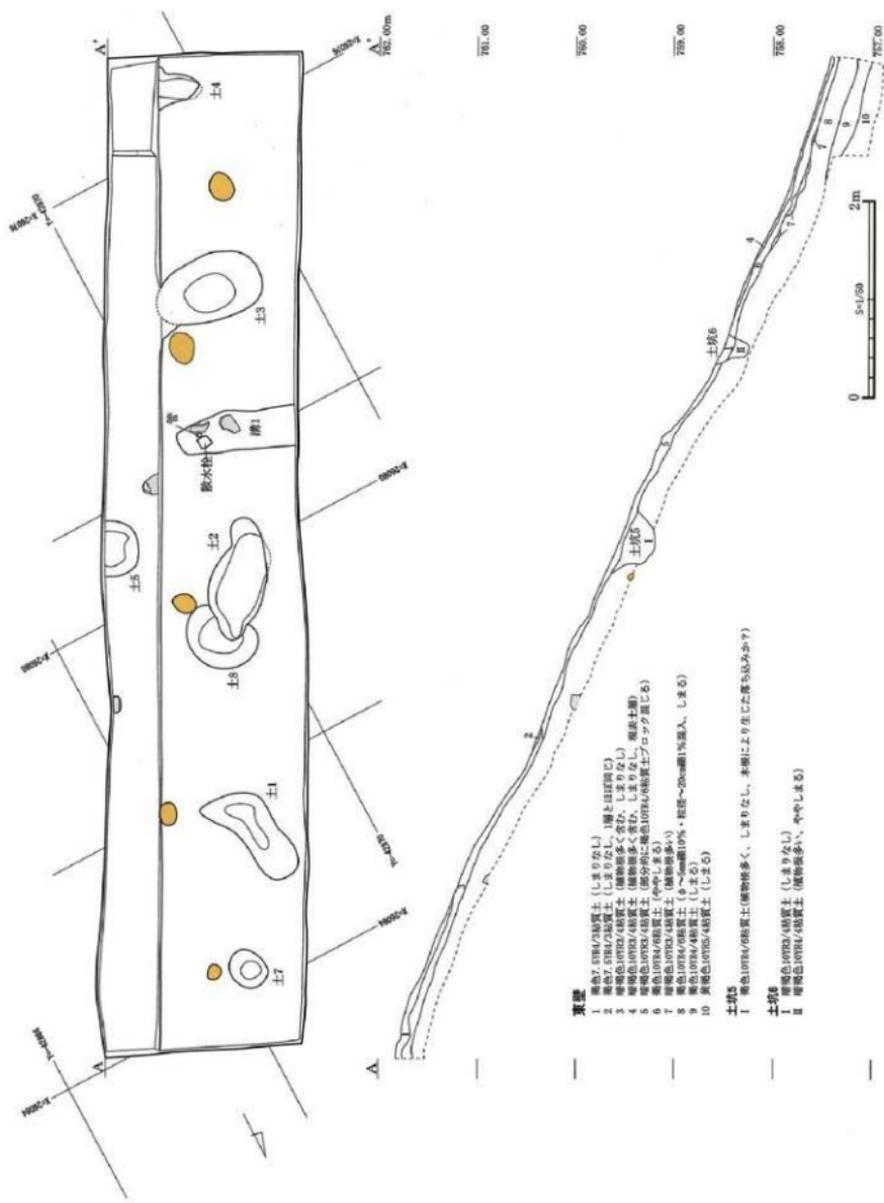


第18図 桐原城址 中区 トレンチ1





第20図 桐原城址 中区 トレンチ3



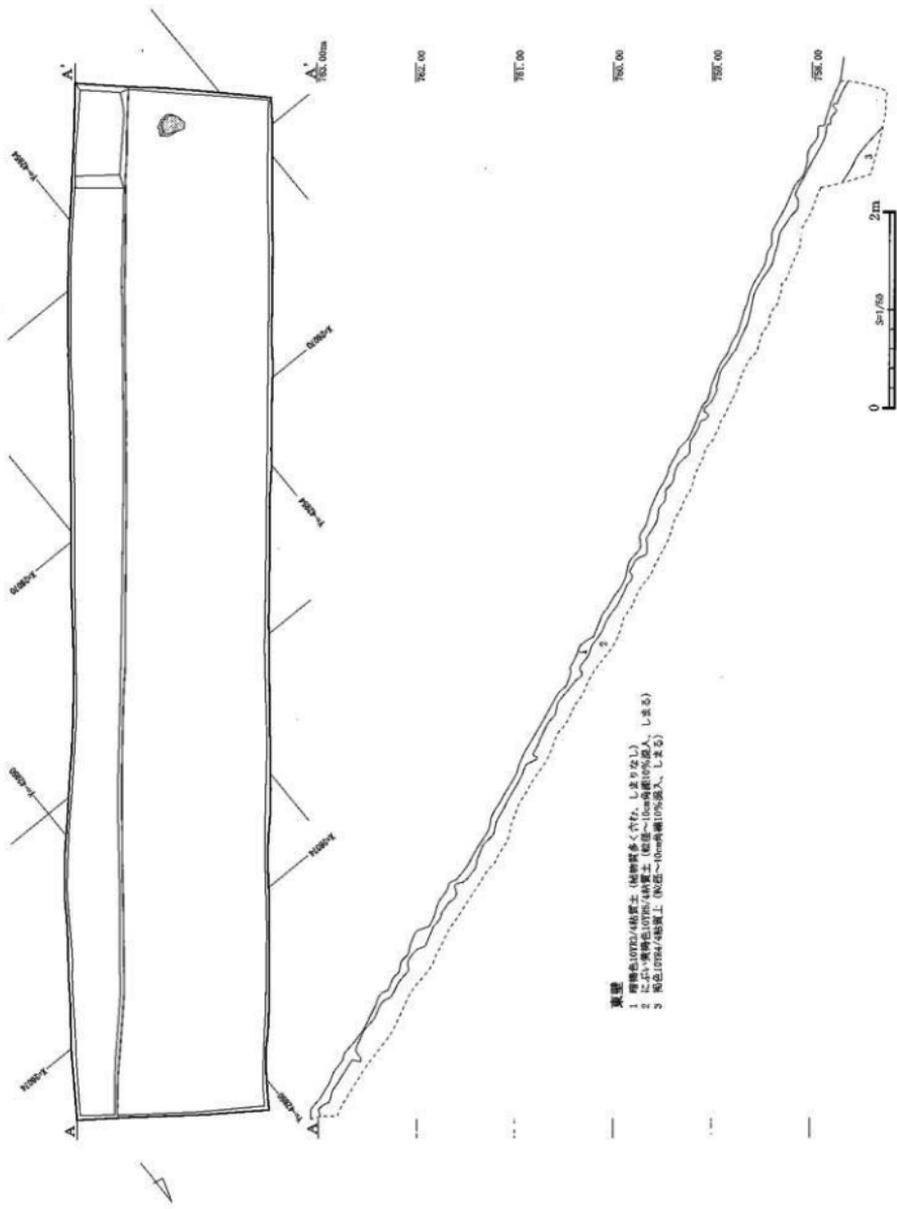
**実測**

- 1 褐色7.073L/4粘質土 (しまりなし)
- 2 褐色7.073L/4粘質土 (しまりなし、層とほぼ同じ)
- 3 褐色7.073L/4粘質土 (層物多量を含む、しまりなし、塊状土層)
- 4 褐色7.073L/4粘質土 (層物多量を含む、しまりなし、塊状土層)
- 5 褐色7.073L/4粘質土 (層物多量を含む、しまりなし、塊状土層)
- 6 褐色7.073L/4粘質土 (層物多量を含む、しまりなし、塊状土層)
- 7 褐色7.073L/4粘質土 (層物多量を含む、しまりなし、塊状土層)
- 8 褐色7.073L/4粘質土 (層物多量を含む、しまりなし、塊状土層)
- 9 褐色7.073L/4粘質土 (層物多量を含む、しまりなし、塊状土層)
- 10 褐色7.073L/4粘質土 (層物多量を含む、しまりなし、塊状土層)

**土坑**

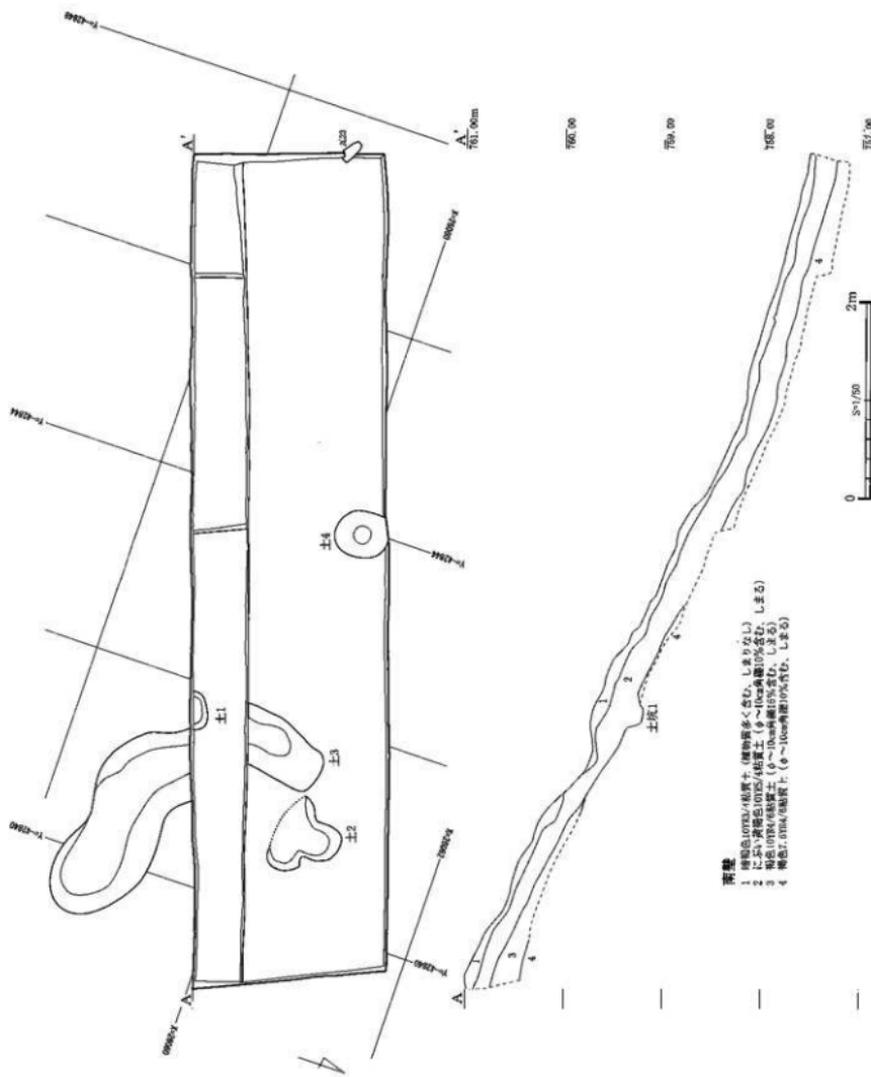
- 1 褐色7.073L/4粘質土 (層物多量を含む、しまりなし、本層により直した層とは異なる)
- 土坑6 褐色7.073L/4粘質土 (しまりなし)
- 土坑7 褐色7.073L/4粘質土 (層物多量を含む、しまりなし)

第21図 桐原城址 中区 トレンチ4



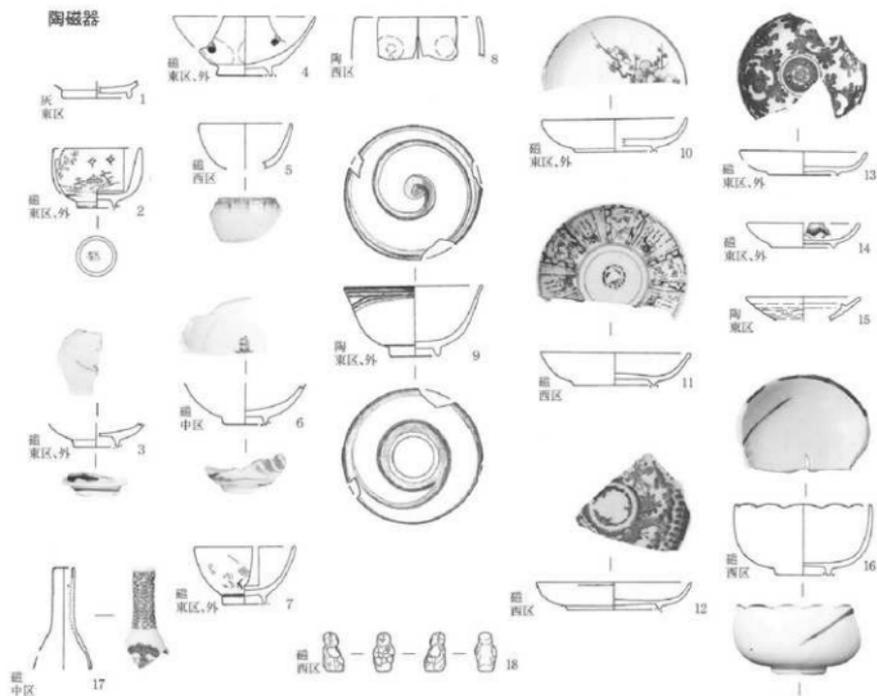
**断面**  
 1. 1075.4/4級質土 (粘粉質多く含む, しまりなし)  
 2. 1076.4/4級質土 (細粒~100μm程度10%混入, しまる)  
 3. 1078.4/6級質土 (灰石~100μm程度10%混入, しまる)

第22図 橿原城址 中区 トレンチ5

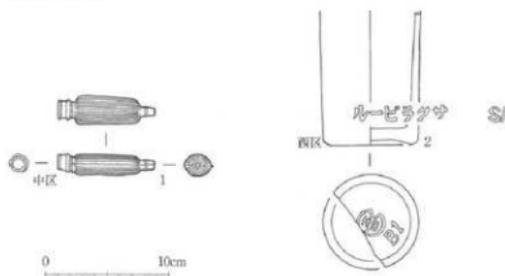


**附説**  
 1 褐色土 (D75A) / 粘質土 (粘土) (L, 土多)  
 2 灰土 / 赤褐色土 (D75B) / 粘質土 (粘土) (L, 土多)  
 3 褐色土 (D75A) / 粘質土 (粘土) (L, 土多)  
 4 褐色土 (D75A) / 粘質土 (粘土) (L, 土多)

第23図 桐原城址 中区 トレンチ6



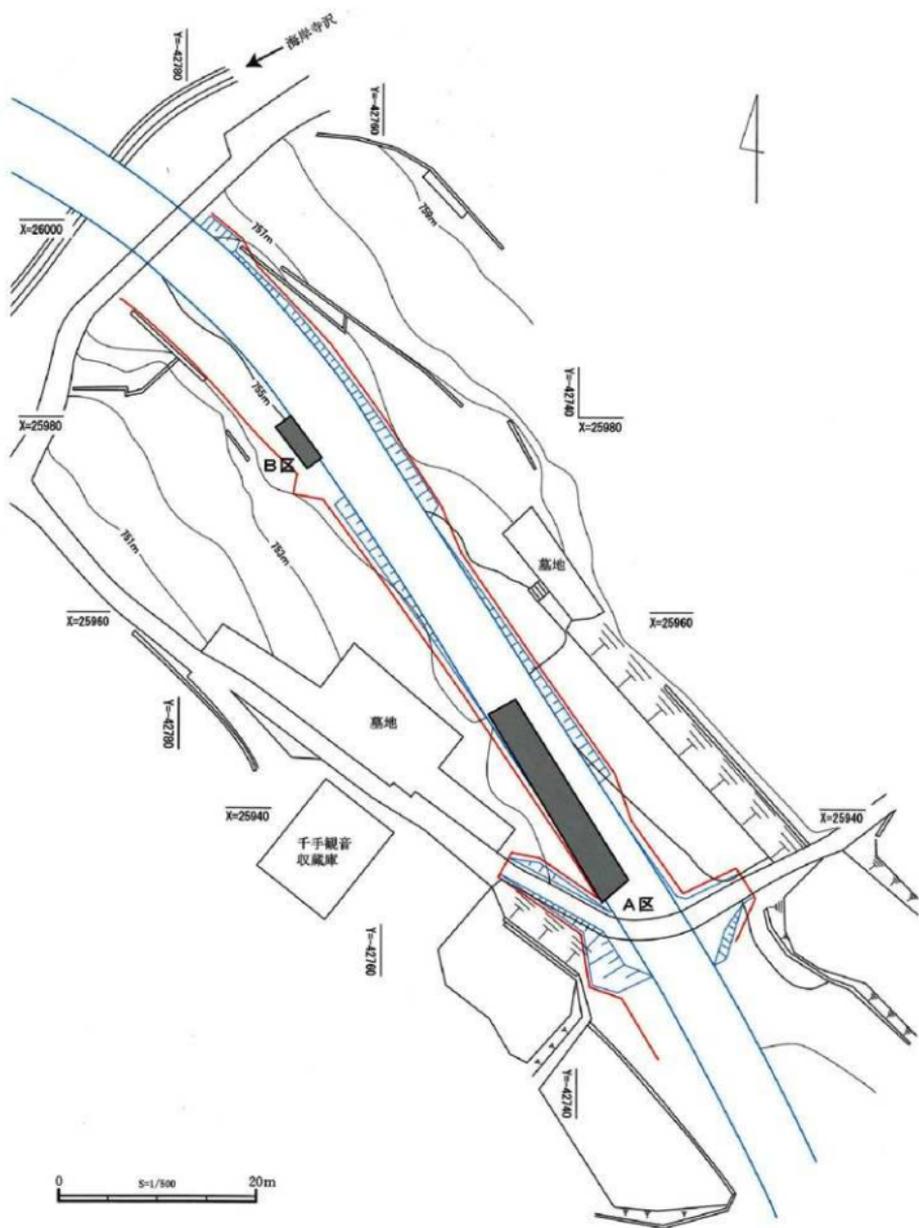
**ガラス製品**



**金属製品**

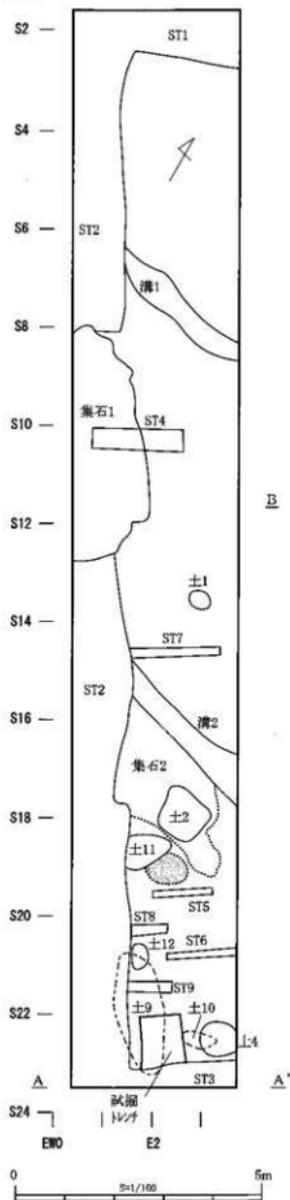


第24図 桐原城址 陶磁器・ガラス製品・金属製品

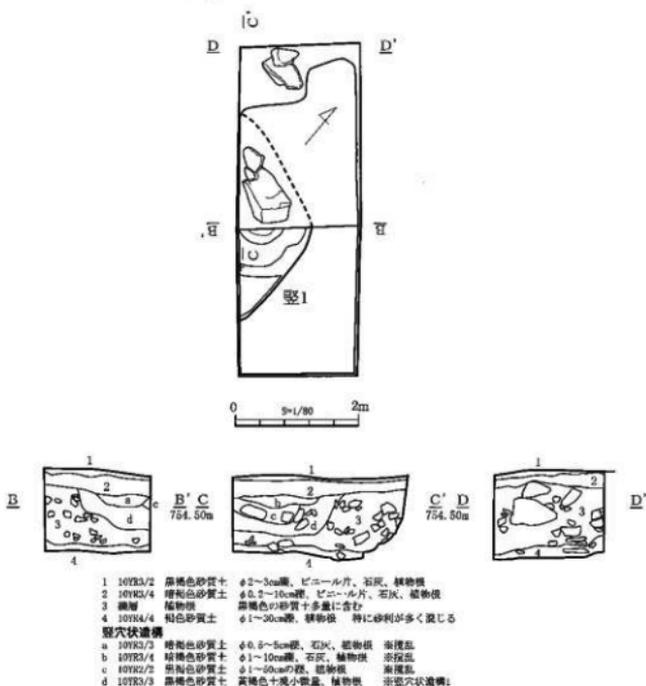


第25図 海岸寺遺跡 調査区配置

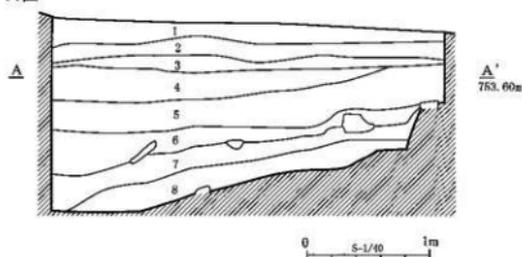
A区



B区



A区



- |   |         |        |                        |           |
|---|---------|--------|------------------------|-----------|
| 1 | 10YR4/7 | 褐色土    | 植物根                    | 土及び水田の跡残層 |
| 2 | 10YR5/8 | 黄褐色粘質土 | 灰色土塊小多量、植物根            | 水田の集積層    |
| 3 | 10YR4/2 | 灰黄色粘質土 | 植物根                    |           |
| 4 | 10YR3/2 | 黄褐色粘質土 | φ3cm以下の硬少量、黄褐色土塊混入     |           |
| 5 | 10YR2/1 | 黒褐色粘質土 | φ1~10cm硬少量、灰褐色土塊混入     |           |
| 6 | 10YR2/2 | 黒褐色粘質土 | φ1~10cm硬混入、黄褐色土塊混入     |           |
| 7 | 10YR2/1 | 黒色粘質土  | φ5~30cm硬混入、黄褐色土塊大混入    |           |
| 8 | 10YR2/1 | 黒褐色粘質土 | φ1~20cm硬多量、黄褐色土塊混入、植物根 |           |
- 灰・土塊混層

第26図 海岸寺遺跡 遺構配置図・基本土層

集石遺構2

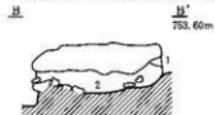
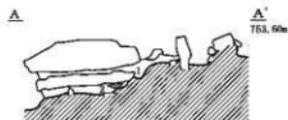
第1面



第2面



第1・2面

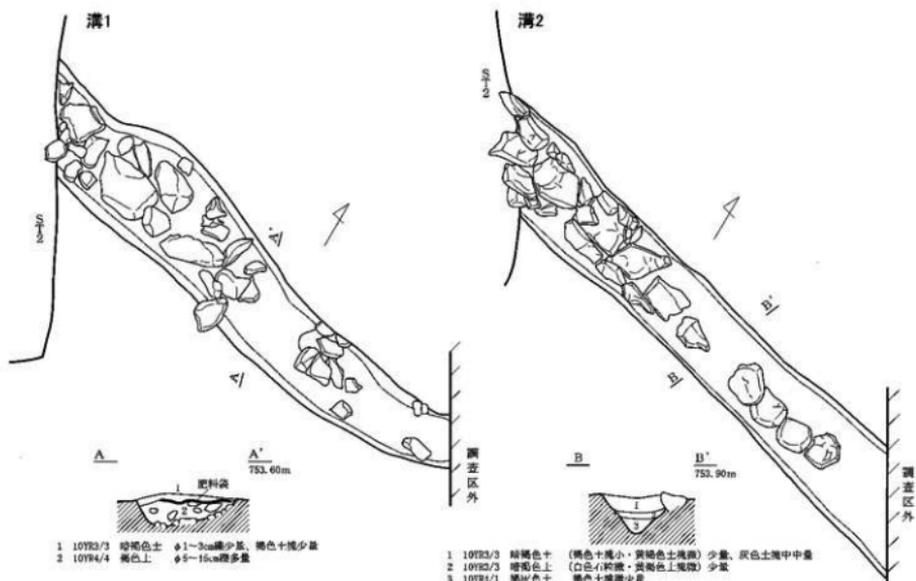


- 1 101K3/3 砂褐色土 4.5~10cm層中量、褐色土塊少量、灰紅物小中量、橙土塊中少量  
 2 101K2/2 深褐色土 4.5~6cm層少量、灰色粘土塊小少量、灰化物極少量、雜土塊極少量

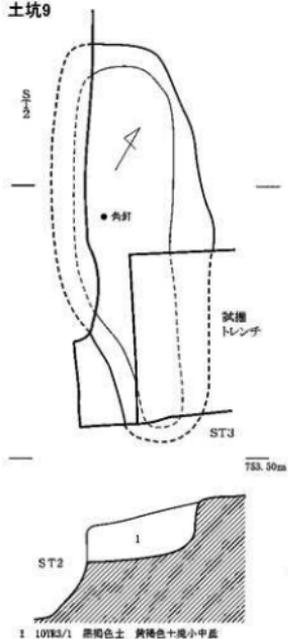


0 1/40 1m

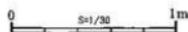
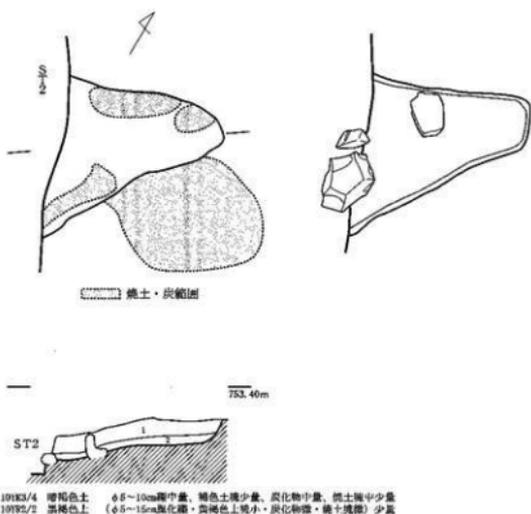
第27圖 海岸寺遺跡 遺構圖1



**土坑9**

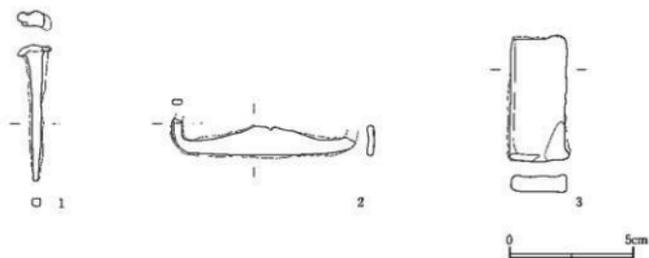


**土坑11**

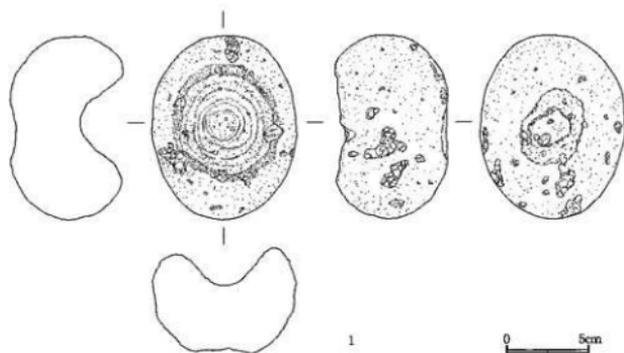


**第28図 海岸寺遺跡 遺構図2**

金属製品



石器



第29図 海岸寺遺跡 金属製品・石器

# 写真図版

---



調査地遠景（松本城上空から山辺谷を望む）



調査地遠景（里山辺上空から山辺谷を望む）



桐原城址・海岸寺遺跡遠景（南から）



桐原城址（南西上空から）



西区全景 完掘状況（南西から）



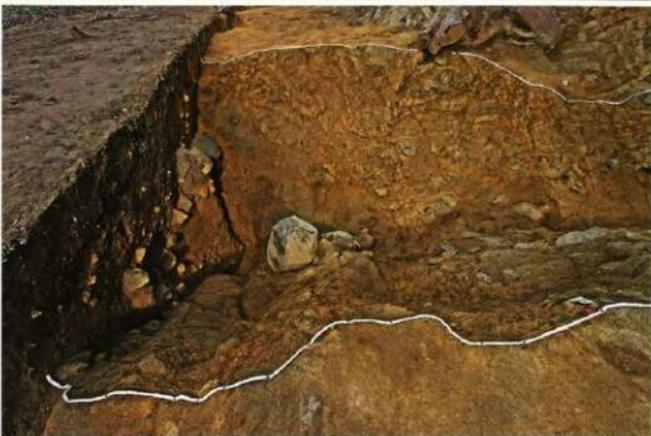
西区 壘壁 完掘状況（南西から）



西区 塹堀 完掘状況  
(北東から)



西区 塹堀 完掘状況  
(南西から)



西区 塹堀 完掘状況  
(南東から)



西区 竪堀 T8 土層



西区 竪堀 完掘状況  
(上方から)